KH249-H337
1200500712753

處女の死

加藤武雄著

處女の死

加藤武雄著

美紗子とその妹……三
城が島……六一
子供を打つ話……六九
仙太の戀……八五
N先生のビジョン……一〇三
母……一〇九
或る夕の事……一二七
父……一三三
平凡非凡……一四九
小品十一……一八七
處女の死……二〇三
終列車……二四七

KH249-H337

I種
W

1200500712753

處女の死

加藤武雄著

美紗子とその妹（九年八月）

一

美紗子は、今日云はう今日云はうと思ひ思ひ、つい、云ひ出しそびれては、一日一日と延ばして行つた。此の二三日、急に騰つた暑氣の爲めに、母の容態はどうもよくなかつた。で、美紗子は、殆どその枕許に附ききりにしてゐなければならなかつたので、實際その隙も無かつたのだが、しかし、漸くその機會を見つけても、どうも、うまくきり出せないのだつた。

「須美ちやん！」と呼びかけて見ても、

「なあに？　姉さん？」などと、無心な顏附で問ひ返されると、あとの言葉に困つた。

「須美ちやん！　お話があるのよ。」やつとこれだけは云つたが、

「何あに？」と、その圓い眼をみはるノンセンスな須美子の顏附を見ると、美紗子は、何か知ら自烈度いやうな腹立たしいやうな氣がして、

「まあ、須美ちやんたら。何を食べてゐるのさ。」と、心にも無い突慳貪な調子で云つた。

今、社から歸つた許りの汗ばんだ顏をして、解きかけた袴の裾をひき摺りながら、口のなかで何かもぐ〳〵としてゐた須美子は、一寸はにかんだやうにして、

「お菓子――。こゝにあつたのを一つ頂いたの、でも、お腹が空くんですもの。」と、甘えるやうに云つた。

「お腹が空いたら御飯を召上れ！　立つて食べたりして。」と美紗子は笑ひながら、「いやな須美ちやんね。もうお嫁に行かうつて人が――。」

「いやあだ。私、お嫁になんか行かないわ。」

須美子は、腹立たしさうにかう云つて、つんと横の方を向いて了つた。美紗子は、それでまたすつかり出端を折られて口を噤んだが、實際、こんな子供のやうな人に、結婚の話など飛んでもない事だといふ風にも考へられた。が、また、その子供らしさの何處に一人の男をそれほどまでに惹きつける丈の力が潜んでゐるのだらう？　と思ふと、何だか油斷がならない、といふ樣な氣がした。さう思つて見れば、揉上のあたりからかけて、ふつくらと寸の延びた横顏にも、なよやかな線を描いた肩附などにも、未だ彼女自身は意識しない自然のなまめかしさが匂ひ漂うてゐた。子供だ子供だと思つてゐる中に、いつか美しい娘盛りになつてゐる妹の姿に、輕い驚きの眼を睜りながら、美紗子は、何となく裏切られたやうな心持と、妬ましさに似た或る心持とを感じずにはゐられなかつた。

「姉さん、母さんはどう？」袴を疊んでしまつた須美子は、小さい聲で、かう美紗子に尋ね

た。
「えゝ、今日もあまりよくないやうよ。でも、今は、よく眠つていらしつてよ。」
母は丁度眠つてゐるし、あの話を持出すには、今が一番いゝ時だと思つたが、何だか妙に心持が改まつて了つて、容易に口がほぐれなかつた。
「ねえ、須美ちやん――。」
「なあに、姉さん。」と、須美子は飽迄も無心な様子だつた。美紗子はまた言葉の繼穂をなくした。自分の事ではなし、何故、こんなに言ひ出しにくいのか。何が、こんなに言ひ出しにくくするのか。美紗子には自分でもそれがわからなかつた。「阿父さんが自分で話せばいい、私に話させようとするのは、無理だわ。」――何となく、さういふ氣がした。

その晩、須美子が、病人の爲めのいろ〳〵の買物をしに出て行つたあとで、父は、美紗子に問ひかけた。
「美紗！　あの話をもうして呉れたかい？」
今、すや〳〵と寢入つたばかりの妹の幹子を膝の上に抱へてゐた美紗子は、眼をあげて一寸父の顏を見上げたが、又伏目になつて、

「え、未だ。」と小聲で云つた。
「向うも急いで居るんだし、母親に話すにしても、一日も早い方がいゝからな。ひとつ、早く話してみて呉れ！」と、父は云つた。
「えゝ。私もさう思ふんですけど、いゝ機會が無いものですから。」
「一寸一言云やいゝんだから。」と、父は、不機嫌さうに云つた。美紗子は、その父の言葉に何といふわけも無く、輕い反感を感じた。人の氣も知らないで――とでも云ひ度い樣な、うとましい氣がした。で、
「矢張、阿父さんから話して頂いた方がいゝと思ふわ。」と云つた。
「俺が話す分にやわけは無えが――とつくりと彼女の心持を聞いて見度えから。それにや矢張お前の方がいゝと思ふから――。」近頃ひどく太り過ぎて、心臟を弱くしてゐる父は、せい〳〵と喘ぐやうにしてかう云つた。
美紗子は、それには答へなかつたが、父が須美子にばかりさういふ優しい心づかひを見せて、自分はどうでもいゝ者に見てゐるやうに思はれて、悲しく恨めしい氣がした。自分の願ひをば、あんなに素氣無く斥けながら、須美子の事だといふとこんなに乘氣になつてゐる。それにはそれ丈の理由がある事は十分に判つてゐるとは云へ、何だか、自分にばかりつらい

父のやうに思はれてならなかつた。妹が姉を越えて先に嫁に行くといふ事についても、「お前には濟まないが――。」などと口では云ふが、一體が呑氣な父は矢張何とも思つてはゐないのではないか――そんな風にも考へられた。

「一つ、今夜にも話して呉れろ！　病人の番はおれが引受けるから。一緒に散歩にでも出かけて行つて、ゆつくり一つ話して呉れろ！」と、父は、飽迄も察しの無い調子で、せか〳〵と云つた。

「はい、今夜は屹度話します――。」さう答へた自分の聲が、ひどく霑んで、而してぎごちなく硬ばつてゐるのに美紗子は氣がついた。父も、それに氣がついたと見えて、

「本當なら、こりやあお前の方が先でなけりやならねえんだがな――お前にや實際濟ま無えんだがな。」

さうして、これほどの良い縁は、さう澤山あるものぢやないから、とりはづし度くない。痩せても枯れてもおれの娘だ、へんなところへはやり度くない。今立派にやつてゐる昔の仲間への手前にも、娘をあの位のところへやればまづ顏が立つ。それでなければ、勿論、こんなに急ぐのぢやないが――と、辨解らしく、今までもう何度も云つた事を繰り返すのであつた。

「いゝのよ。阿父さん、そんな事。私、何とも思つてやしなくてよ。」と、美紗子はかう打消したが、何だか自分の心の底をすつかり見拔かれたやうな氣がしてはづかしかつた。而して、「私何も、須美ちやんを妬んでなんか居やしないわ、些ともそんなさもしい心持をもつちやゐないわ。」と、心の中で自分で自分に囁いてみた。

「須美ちやん。一寸、出て見ないこと。」

かう美紗子が、須美子を誘つたのは、もう九時過ぎてからだつた。須美子は、餘り氣が進まなささうだつたが、姉のあとへついて出た。

銀座の通りには、ぞろ〳〵と散歩の人が續いて居た。明るい灯に裕衣の袖を飜して、何か口々に笑ひさゞめきながら、肩をすり合はせて練つて行く人々の中に交つて歩いて行くと、美紗子は、眼がちら〳〵として、頭がぼうッとなる樣な氣がした。もう二週間も母の枕元につききりで、殆ど一歩も外へ出なかつた美紗子には、此の賑やかな夏の夜が、何處か遠い國へ來でもした樣な物珍らしさで眼に映つた。

二人は手を繋ぎ合つて歩いた。須美子は、快活な調子でいろ〳〵と話しかけたが、美紗子は、時々氣の無い返事をする丈けだつた。

「……？」

ふと、美紗子は立止まつた。今摺れ違つて行つた男――それはTでは無かつたか？　美紗子は振向いて、その躍る眼で忙しく人混を掻き探つた。しかし、それらしい姿は見えなかつた。

矢張さうでは無かつたか知ら？　だが、今自分の片頬を掠めて行つたあの一直線に射つけるやうな、物狂ほしく燃える眼は、確かにあの人に違ひ無い、あの人でなければあんな眼をした人はない――。美紗子はさう思はずにはゐられなかつた。

Tには、もう一月の上も逢はなかつた。この十日ばかりは手紙さへ一度も出さなかつた。Tが、どんなにいら〳〵としてゐることか、屹度、今夜も、たまらなくなつて、此方へ出かけて來たのに違ひ無い。――さう思ふと、どんなにしても探し出して、一目でも逢はずには居られないやうな氣がしたが、否、矢張別の人だつたかも知れないとも思ひ返された。

「姉さん、どうかなすつて？」と須美子が、歩みをとめて、一寸袂を引張つて、此方の顔をのぞき込むやうにした。

「いゝえ。」と、美紗子は一寸うろたへて、「何だか少し頭が痛いの。」

「さう。何だか顔色がよくないわ。看病づかれなんだわ、きつと。」

「……。」

「――本當に姉さんも大へんね。私、社の方を少し休まして貰つて、御手傳ひしませうか知ら？」

美紗子は、矢張、Tの事を考へてゐた。母の枕元にゐる時は、忘れるとは無しに紛らされてゐた。又、瀕死の母を前において、さういふ事を考へる事が、何か罪深い事のやうに思はれて、つとめて抑へつけるやうにしてもゐたのだが、かうして賑かな人通りに交つて少し放たれた心持になると、しきりにTの事が思はれた。それは戀しいとか懷かしいとかいふ心持では無かつた。あの一人でじり〳〵と燃えてるやうな、狂氣染みた人はどうしてゐるか？　自棄を起して酒でも呑んでゐはしないか？　――そんな事を思ふと、美紗子の心はたまらなく不安になつて來るのだつた。

「姉さん、もう歸りませうか？」

須美子にさう云はれて氣がついて見ると、もう雜沓の中を出外れて、街路樹の根の草花が飾窓の灯に目立つて、絶え續く足音にも更けて行く宵の靜かさが思はれるやうな、淋しい人通りになつてゐた。美紗子は、自分一人の物思ひから覺めた。而して、今夜こそ話して

了はなければならないと思つた。
「あゝ歸りませう。河岸の方から歸らないこと。」
「あゝ、さうしませう。」
新聞社などのある、暗いひつそりとした街を拔けて、二人は河岸通に出た。一ぱいに裕衣の人を乘せた電車が一臺風を切つて走り過ぎた。黑ずんだ濠の面には、黃いろい灯の影が幾筋も長くのびて、涼しさうに搖れてゐた。
「須美ちやん！　あなたの社に高野さんて方があるでせう。」と、美紗子は何氣無い調子で話しかけた。
「えゝ。あつてよ。」
「どんな方？」
「どんな方つて、よくわからないわ。」
「いゝ方なの？」
「えゝ。深切な方だと思ふわ。——どうして、姉さん、そんな事をお聞きになるの？」須美子は一寸足をとめるやうにして、斯う問ひ返した。
「實はね、その方からね、結婚の御申込みがあつたのよ。で、須美ちやんは何う思つて？」

美紗子は、自分の聲が少し震へるのを意識しながら、一息に斯う云つた。
「まあ！」と須美子は小聲で叫んだが、一寸間を置いてから、「そりやあ、あの方はいゝ方だと思ふわ。でも——。」と、云ひかけて口籠つた。
美紗子は、須美子が案外平氣なのに一寸拍子拔けのした氣がしながら、後の言葉を待つたが、須美子は默つてゐた。
「その方からね、一月程前から熱心な御申込みがあるのよ。で、お父さんはね、もうその方にお逢ひになつたの。さうして、いろ〳〵調べて見たりして、お父さんはいゝと仰しやるんですけど。——でも、須美ちやんの心持もよく聞いて見なきやいけない事なんだから。」と、美紗子は姉らしい優しい調子で云つた。
二人は肩をならべて、橋の欄干によりかゝつて、水の面を眺めてゐた。須美子は、矢張、默つてゐたが、やがて、
「あの方なら私いゝと思ふわ。でも、姉さん——。」さう云つて、須美子は、物問ひたさうな眼で美紗子を見返した。美紗子は、その時はじめて須美子の思ひ違ひに氣がついた。而して、思はず頰を火照らせながら、
「須美ちやん、あなたの事なのよ。あなたに結婚の御申込みがあつたのよ！」

「え。私に？」と、須美子は驚いて問ひ返したが、「私になんて――私になんて。――そんな事無いわ。そんな事私知らないわ。」と早口に云ひながら、袖で顔を隠すやうにした。

「いやな須美ちやんね。何を間違へてゐたの？　あなたになのよ。」と、繰返して云つたが美紗子の頰は、益々赤くなつて來た。苟にもそんな風に間違へられた事が、ひどく恥かしい事に思はれたのだつた。

「でね、お父さんも氣が向いていらつしやるし、須美ちやんがいゝとお思ひなら、嫁つた方がいゝと思ふわ。」と、須美子が何時までも默つてゐるので、美紗子は返事を促すやうに斯う云つた。

「でも、私未だお嫁になんぞ早過ぎるわ。それに姉さんが未だなのに、私の方が先に嫁くつて法は無いわ。」と、須美子はやうやく落着をとり返した調子で云つた。而して「私、姉さんの事だとばかり思つてた――。」と、呟く樣に云ひ添へた。

「だつて、私は、須美ちやんの知つてる通り家を出られ無い身體なんだから仕方が無いわ。私は駄目だけど、須美ちやんだけでも話がきまればお母さんも安心なさるし。――お母さんも、もう長くて二月か三月、此の暑さを越すのがむづかしいかも知れないつて、山田さんは言つていらしつてよ。だから、早く話を定めて、せめて須美ちやんの方だけでも安心させてやり度いとお父さんも云つていらつしやるのよ。」

「でも、私未だお嫁になんぞ――。」

「だからね、直ぐに行かなくてもいゝの、唯約束さへ定めて置けば――。御婚禮は、半年や一年、待つて貰つてもいゝだらうと思ふわ。」

須美子は、默つて考へ込んで居たが、美紗子の掌の中で、須美子の手は、小鳥のやうにふるへてゐた。

「ぢや、姉さん。姉さんも御約束だけしてお置きなさいな。而して、姉さんの御婚禮が濟んだら――そしたら――。」

「駄目よ。私の方は。」と、美紗子は抑へつけるやうに云つたが、その顔には、淋しい微笑が浮んだ。

「駄目な事は、須美ちやんだつて知つてゐるくせに。」

「私からも、ようくお父さんに話して見るわ。」

「いゝえ。須美ちやんなどがいくら云つても駄目！　お父さんは些ともあの人を信用して下さらないんだから――。」

「でも、私、ようくお父さんに話して見るわ。」

「いゝえ。その事なら止して頂戴！　私の事と須美ちやんの事とは別なんだから。」と、美紗子は命令する様な強い調子で云つた。妹の口から頼んで貰ふ――殊に、妹の婚約を利用して父の心を動かす、などと云ふ事は、彼女の意地が許さない事だつた。此の小さい妹から、すこしでも氣の毒がられたり心配されたりなどはしたくなかつた。

「私には私の覺悟があるの。だから、私の事など氣にしないで、須美ちやんは須美ちやんでようく考へてね、――私、いゝ御縁ぢやないかと思つてよ。」

須美子は、又、默り込んで了つた。

二

「もう、少し考へさせて頂戴。」さう云つて、須美子は、翌日になつても、又その翌日になつても、はつきりとした返事をしなかつた。

「どう？　未だ決心がつかなくて？」美紗子が態と氣輕な調子で、こんな風に問ひかけると、須美子は赤くなつて、おど〳〵した。さういふところを見ると、矢張、未だ子供だと思はれた。

はつきりと返事をしないけれど、須美子がその人を好ましく思ひ、その申込に對して心を躍らしてゐる事は慥かだつた。須美子が決心しかねてゐるのは、自分に對する遠慮からだと考へると、美紗子は心苦しかつた。どんな意味に於ても、妹の運命に邪魔する樣な姉にはなりたくないと、美紗子は思つた。

「須美ちやん。ぢや、私、お父さんに云ひますからね。思ひ切つて決めてお了ひなさいな。」と、美紗子は命令的な調子で、かう切り出した。三日目の朝、須美子の出勤前だつた。

「だつて、姉さん――。」と、須美子は、ちらと姉を見上げてから、やり場に困る眼を膝の上に伏せた。

「私からお願ひするわ。決心して嫁く事にして下さいな。」

「……。」

「さうして、お母さんを安心させて上げて下さいな。お父さまも乘氣になつていらつしやるんだし、私も、大へんいゝ御縁ぢやないかと思ふわ、さうすれば屹度須美ちやんは幸福になれると思ふわ。」

「姉さんはいゝと思つて？」と、須美子は小さい聲で聞いた。

「えゝ、本當にいゝ御縁だと思つてよ。大さうしつかりした立派な方ださうだし、年の釣合

も丁度よし――。ね、決心してお了ひ！　私、お父さんにさう云つてよ。いゝでせう、ね、いゝでせう！」

須美子は、眞赤になつて、さうして默つてゐたが、その眼には一杯に涙が湛へられてゐた。それを見ると、美紗子は、急に須美子がいじらしいものに思へて來た。而して、その肩に手をかけるやうにして、沁々とした調子で云つた。

「屹度幸福になれてよ、須美ちゃん！　あんただつて可哀さうだわ。女事務員などになつて、小さい時から苦勞して――。私、何時までも須美ちゃんに會社通ひなどさせて置き度くないのよ。」

美紗子は、自分で自分の言葉に引き入れられて、涙ぐましい調子になつた。丁度、家の惡くなつた時に生れ合せて、一番樂しい筈の少女時代を會社勤めなどして、貧しく乏しく過して來た須美子も、考へて見れば可哀さうな者だ。此の可哀さうな妹の爲めに、心から幸福を冀はねばならぬ、と美紗子は思つた。

三

母の病氣は引き續きよくなかつた。家事一切の處置、病人の看護、その上四つになる妹を母代りに育まねばならぬ美紗子の此頃は、隨分忙しかつた。須美子は會社へ、父と、須美子には兄になる弟の讓治とは、朝から近所の工場の方へ出かけてゐた。父は、五六年前までは自分で工場を有つて、大勢の職人を使つて獨立してやつてゐた塗師であつたが、或る手違ひから、こんな處に逼塞して、今では他手に渡つて了つた其の工場へ、他の使用人として働いてゐるのだつた。皆出拂つて了つた家の中は、ひつそりとして、時々、奥の四疊から病人の咳の聲がした。

むづがり泣きに泣き寢入りした妹に幌蚊帳を掛けてやつてから、美紗子は、一寸柱時計を見て、時間の過ぎてゐるのに驚いて、勝手元の水瓶に浸して置いた藥瓶を盆の上に乘せて、母の枕元に持つて行つた。

「どう？　お母さん。」さう聲を掛けると、母はぽつかりと眼を開いた。而して、ぢつと美紗子の顏を見つめるやうにして、

「あゝ、今日は少しいゝやうだよ。」と、微かな聲で云つた。母は、容態を聞くと、いつでも「今日は少しいゝ」といふのだが、衰弱の加はるのが一日毎に目に見えた。げつそりとこけた頰は透き通るやうに蒼白めて、脣にも色が無くなつた。吸口から藥を飲ませたり額際の

汗を拭いて上げたり、寢返りをさせたりすると、母は一々、「有りがたう。」と云つた。
「有りがたう。本當に美紗ちやんも大へんだね。お前、この頃顏色が悪いが、どうかおしなのぢやないかい？」
「いゝえ。」
「氣をつけなくちやいけませんよ。——よく消毒をしなきやいけませんよ。」さう云つて、母は眼を閉ぢて、暫く、苦しさうに喘ぎ乍ら默つてゐたが、だしぬけに、
「お前、その人に逢つた事があるのかい？」と云つた。
「え？」と、美紗子は訊き返した。
「——その、須美子の旦那樣にならうつて人にさ。」
「いゝえ。私はお目にかゝつた事はないの。」
「どういふものでせうね。——お父樣は大へん氣乘がしておいでだけれど——。」
「私、本當にいゝ御緣だと思ひますの——しつかりした方らしいから。」
「でも、未だあれはほんの子供なんだからね。——それに、須美子よりも美紗ちやんの方を先にするのが順序なんだから。」と、母は、低く抑へるやうな聲で、しみ〴〵と云つた。
「えゝ、でも——。」と美紗子は口籠つたが、縋りついて、嘆き訴へ度いやうな弱々しい悲しい氣持が、又、その心に歸つて來た。
「まあ、それで兎に角須美子の方は安心だがね。」と、母は、すこししてから言ひ出した。
「美紗ちやんの方はどうなんだえ？」
「私の方つて？」母の言葉があまり唐突だつたので美紗子は思はず赤くなつて、どぎまぎとした。その細い聲が美紗子の心には雷のやうに強く響いたのだつた。
「思案に餘つた事があつたらね、お母さんに話しておくれ！　美紗ちやんは一人でばかり考へ込んで居る性質だけど——私と同じやうにね——。私にだけは話してお呉れ、さうすれば私がようくお父樣に話して上げるからね。」と、母は、仰向いて眼を閉ぢたまゝ、獨言のやうな調子で喘ぎ〳〵云つた。それでも、美紗子が默つてゐるので、一寸眼を開いてその方を見やるやうにして、「何かお前考へ事があるのだらう？」
美紗子は、どう返事していゝかに困つた。一切を母に告げて、此の日頃胸に包んでゐる悶えを訴へようかと思つたが、しかし、母は氣こそ慥かだがもう明日にも知れぬ人だつた。母に話したら、母は屹度自分に味方して、共に父の心を動かすやうに骨を折つて呉れるであらうが、あの頑固一徹な父は、一旦あれほど手強く斥けた願ひを決してもう容れては呉れないだらう。それは、結局瀕死の母を無駄に苦ませる事に過ぎないに違ひない——。

「いゝえ、お母様、私、そんな事はなくてよ。」と、美紗子は、とつてつけたやうな、まづい返事をした。

「さうかえ？」さう云つてぢつと見上げた母のきれいに澄んだ眼は、「皆、知つてゐる。」と語つてゐるやうに見えた。「何故、隠すのか？」と詰り問ふ様に見えた。美紗子は座に堪へられないやうな氣がしたので、茶の間の方で妹がむづがり出したのを機會に立上つた。

幌蚊帳を除けて、その傍に添つて身を横へて、

「どうして？　幹ちやん。さあ、ねんね、ねんね。」と云ひながら、輕く叩いてやつてゐる中に、美紗子の眼には又しても涙が浮いて來た。美紗子は、今朝久振で受取つたTからの手紙を思ひ返した。もう、一月もあなたに逢はない、あなた無しに活きる月日がどんなに苦しいか、どんなに辛いか？　食べられもしず、眠れもしない。思ひ疲れて唯茫然としてゐる。あなたの愛を信ずる私は、あなたを冷淡な人だとは思ふまい。けれども自分の餘りに激しい愛の前には、あなたも亦冷やかな人に見える——そんな事が例の投げつける様な調子で書かれてあつた。而して、最後に、もしや貴方に逢ふかと思つて毎晩銀座の通りを歩いてゐるが、一度も逢へない。東京の炎暑は、私の頭腦を狂はせさうだ。思ひ切つて旅に出るつもりである。旅に出る前、一度どんな事をしても逢ひ度い。兎に角、此の手紙には返事を下さい——

と書いてあつた。それは、痩せ青ざめて、眼ばかりきら〳〵と輝かしてゐるTの顔が、その文字と文字との間からちらついてゐるやうな、思ひつめた心持の手紙だつた。

四

美紗子がTを知つたのは、未だ美紗子が女學校に通つてゐる時分の事だつた。一番仲好くした友達のN子の兄さん——それがTだつた。美紗子はよくN子の家に遊びに行つて、Tとも前から顔馴染になつてゐて、顔を赤めながらも、二言や三言は口も利き合ふ仲だつたが、美紗子が、そのTから愛せられてゐると知つたのは、N子が死んでから後の事だつた。N子は十七になつた年の初めに、流行感冒から肺炎になつて、僅か二十日ばかり病んで死んだが、最も深くその死を悲んだのは、Tと美紗子とだつた。而してその悲みが二人を結びつけた。Tが美紗子を妹の様に思へば、美紗子も亦Tを兄の様に思つて、時々、訪ねたり手紙のやりとりをしたりしたが、やがて、Tの心が妹としての愛に滿足しきれなくなる時が來た。それは美紗子の十八の夏だつた。其時分、美紗子の父は、三崎の城が島に家を借りて、夏中は家の者を代り〴〵に避暑に遣る事にしてゐたが、Tも美紗子達のあとを追つてその鄙びた避暑

地にやつて來た。而してTは未だ十二三にしかならなかつた須美子や、その弟の讓治を相手に、毎日呑氣さうに遊んでゐたが、ある日の夕方だつた、島の燈臺の下の岩蔭で、美紗子はTからその愛の告白を聞いたのだつた。

「でも、私、貴方を兄さんだと思つてゐるのよ。本當の兄さんだと思つてゐるのよ。」美紗子はその時、眞赤になつて震へながら、たゞかう繰返したが、實際、美紗子には兄とより外はTを考へられなかつた。戀といふ事も夢みないではなかつたが、謂はゞ唯戀を戀する丈で、實際に戀をするといふ事は——まして、その對手がTであらうなどといふ事は、全く思ひもかけない事だつた。美紗子は、Tのこの不意打にすつかり脅かされて、唯、

「でも、貴方は、兄さんなのよ。——唯、兄さんなのよ。」と繰返す丈であつた。

「貴方が僕を兄さんと思つてゐても、僕は貴方を妹だとばかり思つて居れないから困る。」Tは、激しい羞恥の爲に引歪められた顏に、苦しげな笑ひを浮べて、胸の底から押し出すやうに斯う呟いたが、その晩の夜船で東京へ歸つて了つた。

あんな事を云つて、美紗子さんは驚いた事だらう。抑へても抑へても抑へきれぬこの煩惱が、とう〳〵あんなことを云はせて了つた。僕が惡かつた。あなたを妹より外の者に思ふのは惡い事だ。あの清らかに死んで行つたN子の靈の前にも——こんな風に書かれた手紙がT

から來た。その手紙を受取つた時、美紗子は、病氣で寢てゐた。その夏は持病の胃痙攣に苦められ通しで、折角の避暑も樂しい日は一日もなかつた。年齡の割合には無邪氣で、まだ少女のやうに快活だつた美紗子も、此時分から漸く人間の苦しみを、苦い涙の味を知り始めた。美紗子は島の燈臺の青い灯を眺めながら、東京で病んでゐる母の事などを考へて、わけもなく涙を流したのだつた。

それまで、Tがよく呉れた手紙も、それからはぱつたりと絶えた。あんな事があつたので此方からも、訪ねる事は勿論、手紙を出す事も憚られた。美紗子は淋しかつた。而して、捨てられた人の樣な恨めしさをさへ感じた。が、その年の秋の上野の展覽會で偶然Tと逢つてから、美紗子は又、折々、Tを訪ねる樣になつた。Tは美紗子の訪問を喜びはしたが、いつも憂鬱な暗い顏をして、時々、淋しい重い微笑を漏らす丈であつた。美紗子は、自分が媚婦の樣にTを苦しめつゝある事を知りながら、——而して、それを惡い事に思ひながら、矢張Tを訪ねずにはゐられなかつた。

「兄さん、いらしつて？」

一月に三度、一週に一度位は、さういつて顏を赤めてTの部屋の前に立つた。Tはその時分繼母が不快だと云つて、家を出て、同じ山の手の或る素人下宿にゐた。而して籍を置いて

ある××大學へは殆ど出ないで、一日中閉籠つて文學の本などを讀んだり、何かぢつと考へ耽つたりしてゐた。

そんな風で半年が過ぎ一年が過ぎるうち、少し宛少し宛、美紗子の心は動いて行つた。而して翌年の夏が巡つて來た時は、美紗子は、全くTにその心を捧げる人になつてゐた。女學校を卒業してからは、一週に一度宛近所の花の師匠の處へ通つてゐたが、美紗子はその歸りに、よくTの許を訪ねた。而して一時間、三十分、或は僅か五分間をそこに過したが、折々は、思はず時を移して、夜になつてから歸る事もあつた。

「私、矢張、兄さんのやうな氣がするのよ。」美紗子は未だそんな事を云つて、Tを怒らせる事もあつたが、しかし、二人の間には、結婚といふ實際問題が持出されるまでになつてゐた。

「大丈夫よ。お父さんの方は何ですけど、お母さんは、よく私を理解して下さるわ。而して屹度、私の願ひをかなへて下さるわ。」美紗子はさう云つて、連りに不安がるTを慰めてゐたが、その美紗子が唯一つの賴りにしてゐた母は、その頃から、病床を離れる事の出來ない人になつて了つた。一番末の幹子を產んで、すつかり身體を毀したところへ前からその氣のあつた肺が惡くなつたのであつた。美紗子は、未だ乳離れもしない幹子の爲めに、母の役目をしなければならなかつた。その上、益々暮し向きがいけなくなつて、女中を雇ふ事さへ出來なくなつた家の爲めに、主婦としての務めをも兼ねなければならなかつた。かうして結婚の話などは當分成立つ見込はなくなつた。せめて母にだけは、すべてを打明けて置き度いと思つたが、此の場合、そんな話を持ち出す事が、何となく氣が咎めるやうな氣がして、美紗子はとう〳〵それも言はずに過して來たのであつた。

美紗子は、一言も母には告げずに來た。けれども、母はそれを知らなかつたであらうか？絕對に美紗子を信じ切つてゐた父は、繁々と美紗子に來るTの手紙をも矢張女學校時代の仲間からだらう位に思つて、格別氣にも留めず、「お友達の處へ寄つて來ました。」と云へば少し位歸りが遲れても、怪しんだりなどはしなかつたが、しかし、それも初めのうちだけだつた。それ丈の物思ひをぢつと押しかくして、些とも氣取られずにゐようといふには、美紗子は餘り正直過ぎた。

「何だか姉さんは此頃、へんよ。」などと、心も體も眼覺際の、感じ鋭くなつてゐる須美子が先づそんな事を云ひ出した。美紗子は仲の好い須美子とつまらない事から口爭ひをはじめてほろ〳〵と涙を流したりする事などがよくあつた。

「をかしな姉さん！」須美子は、その思ひがけない姉の樣子に呆氣にとられた。「本當にを

かしな姉さんね。此頃どうかしてるんだわ。」

それに、一寸と云つて出かけて、夜遅くなつてから歸るやうな事も、一月に一二度宛位はあつた。――「どうしても五時迄に歸らなきやならないの。五時過ぎるとお父様が歸つて來ますから。」などと云つても、Tは、「もう少し、もう少し。」と云つてひきとめた。もう花の師匠通ひも止めて了ひ、從つて訪問の機會が少くなつた丈に、Tは、美紗子を歸したがらなかつた。病氣で寢てゐる母や、懷を求めて泣いてゐる小さい妹やが氣にかゝりながら、美紗子は引きとめられるまゝについ長居をした。こつそりと家に歸つて、未だ父が歸つてゐないと、美紗子はほつとして、

「母さんは？」と小聲で須美子に聞いた。須美子はいつも素氣ない風をして、ろく〳〵返事もして呉れなかつた。

「つい、遅くなつて。」さう云ひながら、おど〳〵した心持で母の室に入つて行くと、母は工合よく眠り入つてる事もあつたが、まじ〳〵と眼を開いて、いかにも待ち焦れてゐたといふ様子でゐる事の方が多かつた。

「あゝ、お歸りかえ？」と、母はしかし物柔かな調子で云つた。

「あの、つい遅くなりまして。」と詫びると、

「――もう少し早く歸るやうにおしよ。今日は未だお父様は歸らないやうだね。――早く着物を着換へてお了ひ。お父様に見つかると又うるさいからね。」などと母は云つて呉れた。

母は美紗子の辯解をそのまゝに受け入れる風で、別に、何處へ行つたのか？　とも、どうして遅くなつたのか？　とも問ひはしなかつた。が、それ丈に凡てを見拔かれてゐる様で、美紗子は何だか氣味が惡いやうな氣がした。而して、病氣の母にいろ〳〵と心配をかけてゐる事を心から濟まないと思つた。

癇癪持ではあるが、案外氣の弱い父は、蔭でじり〳〵する割には、面と向つては小言を言はなかつた。時々、激しい勢で責め詰る事があつたが、美紗子がぼろ〳〵と泣き崩れたりすると、却つてなだめ賺すやうな態度に出た。又、美紗子がぢつと思ひ詰めたやうな青い顏をして、口元などを引締めて、ろく〳〵口も利かずにゐるやうな時は、傍へ寄つて來て種々機嫌を取つたりなどした。その事だけを除けば、美紗子は健氣な忠實な、近所でも賞められ者の娘だつた。病人と子供とを抱へて、一家の事を何から何までやつて行くのは、若い娘の身にとつて一通りや二通りの骨折ではなかつた。くらしむきの事などには全く無成算な、といふよりも無能力な父は、美紗子がさうして母親代りにとりしきつて居て呉れるのでなければ、

その毎日がどうにもならないのだつた。だから、父は平常から美紗子に一目も二目も置いてゐた。で、美紗子に對する不機嫌の刷口を、母親や須美子などの方にもつて行く事もよくあつた。それをよく知つてゐるので、美紗子は一層辛かつた。

Tが、美紗子の父に、美紗子を貰ひ度いと申し出たのは、去年の暮近くであつた。今のところ私は家を出られもしないし、迚も聽かれる見込はなさゝうだから――さう云つて、美紗子は未だその時機で無い事を說いたが、Tは、たゞ約束だけでいゝから、と云つて自分自身で美紗子の父の許に出かけて來たのであつた。が、結果は美紗子の心配した通りであつた。それに、直に至誠を披瀝しようとして、直接に自分でそんな申込をしたTのやり方も、昔氣質の美紗子の父には、唯或る不安な印象を與へたに過ぎなかつた。

何時からあの男と知合になつたのか？　とか、どういふ男だ？　とか、父は根掘り葉掘り美紗子に訪ねたりしたが、

「美紗！　お前はだまされてゐるんぢや無えか？　――もう決してあんな男と交際つちやいけ無え！　何をされるかわからねえ！」苛々した調子でさう云つた。美紗子は、父がTを不良青年か何かのやうに思つてゐるのが口惜しかつたが、云へば云ふほど自分の心持が辱められるやうな氣がしたのでぢつと押默つてゐた。すると又、父は、

「それやお前には濟まねえたあ思つてゐる。いゝ緣せえありや直ぐにもやり度えたあ思つてゐるが、何しろ、母親はあの通りの病人だし、幹子はお前の手でなきや育た無えし――。」などと、訴へるやうな調子で云ひ出すのだつた。

「いゝのよ！　そんな事、お父様。私、お嫁になんぞ一生行かなくてもいゝと思つてゐますから――今、直ぐどうしようなんて、誰が思ふもんですか、誰がそんな事――。」

「兎に角、廻り合せだと思つて辛抱して呉れなきあ。」父が打萎れたやうにして、そんな事をいふのを聞くと、美紗子は、自分が、親兄弟の事などは關はず、唯自分だけの事にかまけてゐる世の中のいたづら娘などと同じに見られてゐるやうな氣がして、腹立しくもあれば情なくもあつた。

そんな事があつてから、父の監視は一層嚴重になつて、手紙を貰ふ事も出來なくなつた。訪ねて行く事は尙更難かしくなつた。一寸買物などに出て、少し手間取つたりすると、もう横町の角のところに、幹子を手おぶひにした須美子が迎へに出てゐた。

「四丁目まで氷囊を買ひに行つたのよ。いつもの處に無かつたものだから。」などと美紗子は辯解するやうに云つたが、さうして一々の行動を見張られてゐると思ふと、堪らなく腹立

たしかつた。又、そんな風に須美子などにまでおど〳〵と氣をつかはなければならない自分を考へるとなさけなかつた。而して、さりげない樣子をしながらも、ちら〳〵と横の方から疑ひ深い眼を光らせてゐる樣な須美子を小面憎く思ふ事もあつた。須美子は、Tとも三崎で會つてよく知つてゐた。未だ子供だとばかり思つてゐたが、あの時分から何も彼も見拔いてゐて、種々と父に告げ口したりするのではないかなどとも邪推されたり、また、もう少し、須美子が大人であつて呉れたら、自分の今の心持をすつかり打開けて、力になつて貰ふ事も出來るだらうに、などとも考へられたりしした。

さういふ中でも、しかし、美紗子は一月に一度位はTと會ふ機會を作つた。行き會ふ場所を打合せて置いて、歩きながら話す爲めの五六分を偷んだり、幹子を遊ばせに出たついでに、一寸その下宿に立ち寄つたりした。

「此の子があるから、此子は矢張私が無いと育たないんですから——それで父も私を手離せないんですよ。」美紗子は、見知らない處へ連れて來られて、一泣き泣いたあとの眼を不思議さうにきよときよとと動かしてゐる幹子を見ながら、こんな風に云つてTをなだめたが、Tは、

「この子一人位僕等で育てたつていゝぢやないか。それに今直ぐにといふのぢやないんだ。

などと、苛々とした調子で云つた。Tは、あの申込みを拒絶されてから、すつかり絶望して自暴自棄染みた調子になつてゐた。情熱的であると同時に、その場その場の感情に支配され易いTには、どんな苦痛にも踏み堪へて、ぢつと思慮深く時を待つ丈の意志が缺けてゐた。而して、一緒に燃えて呉れないと云つては、美紗子の冷淡を責めたり、美紗子の愛の誓ひを疑つたりした。

「さう貴方のやうに仰有つても——。」さう云つて美紗子は泣き出す事があつた。自分の心に包みきれない辛さ苦さを訴へようとするその人が、却て、此方から慰めてやらなければならない人である事が、美紗子には此上もなく便りなかつた。單純で、而して善良である丈にそれ丈に又頑固な父と、駄々子のやうな男との間に立つて、美紗子は一人で苦まなければならなかつた。

五

高野——それが須美子に求婚した男であつた——の遠縁に當るといふ五十許りの、官吏上りらしい上品な老人が、三四遍目の足を運んで來たのは、美紗子が須美子にその事を話した

日から三日ばかり後であつた。父が留守なので、美紗子が代つて返事をしなければならなかつた。

「私どもゝ御覽の通りの姿で御座いますから、――もうほんとに野育ち同様なんで御座いますよ。裁縫などの方も、もう少し仕込んで置きたかつたので御座いますが――。」などと、美紗子は姉らしい調子で話した。

きちんと行儀よく坐つた老人は、靜かに扇を動かしながら、一々、「はい」「はい」と丁寧にうなづいて居たが、その膝頭のところに眼を落して一寸口籠つてから、

「お姉さまがまだお片附きにならんのに、さしこえて妹御の方をといふのは、誠に無理なお願ひでは御座いますが、――實は最初、何も存じませなんだので。」

「いゝえ、もうそんな事は――。」と美紗子は一寸赤くなつた。老人の、思ひやりの深さうな柔かな眼ざしに、或るなつかしみを感じ乍らも、此の人からまで氣の毒がられて居るやうなのが、妙に辛い氣がした。で、その氣持を押しかぶせるやうに、

「母が病氣で臥つて居りますし、それに、少さい妹が一人御座いますし――私はもう到底家を出られない身體なのですから。」美紗子はさういつて淋しく微笑した。

「お母さんの御病氣はいかゞな鹽梅で？」

「どうもあまり良い方では御座いませんので、もう長くはないだらうと思ひますが、――せめて妹の方でも身が固まりませば、母も安心しますでせう。」

「大きに。」と、老人は大きくうなづいた。が、それからまた高野の人物や、經歷や身分やなど、美紗子ももう父から傳へ聞いてゐる種々の事を、ぽつり〳〵と話した。而して結納や婚禮の細かい事については又改めて御相談にあがるからと云ひ殘して去つた。それと行き違ひに、須美子が社から退けて歸つて來た。

「お客さま？　何方？」と、須美子は、そのまゝになつてゐる座蒲團や茶道具などに目をとめながら聞いた。

「當てゝ御覽！」と、美紗子は一寸揶揄ひ顏になつて、「高野さん、今日どんな顏をしていらしつて――。」

「いやだ！　姉さん！」と、須美子は眞赤になつた。

「愈々御返事をして了つたのよ。」

「……。」

「大變な秀才ですつて？　今の人がそりやあ褒めてゐてよ。須美ちやんお目出度う！」

須美子は、簞笥の陰のところにかくれて了つた。

「須美ちやんの快活な無邪氣なところがお氣に入つたんですつて。」さう云つて笑ひかけた美紗子は、須美子が、袖を顏に押しあてゝ泣いてゐるのに氣がついた。

「いやな須美ちやんね。何泣いてるの。え、何泣いてるの？」さう云ひながらも、美紗子は、直ぐ自分が妙な心の彈(はず)みから、はしたない調子で物を云つた事が恥ぢられた。

無邪氣な快活な須美子は、がらりと人が變つた樣におとなしく、おとなしくといふよりは、涙つぽい娘になつた。一寸の事に直ぐに顏を赤めたり、おど〳〵したり、妙に氣が立つた樣な顏をして、ろく〳〵物も云はなかつたり――さうかと思ふと又、その涙ぐんだ樣な眼をあげて、何か斯う、憧(あこが)れ夢みるやうなうつとりとした柔かな表情を見せたりした。

丁度早春の日の下に、おづ〳〵と頭(あたま)を擡(もた)げた小さい草の芽のやうに、いた〳〵しいまでに感じ易くなつてゐる須美子の心持を姉らしく劬(いたは)りながらも、しかし、どうかすると美紗子は皮肉な調子で物を云つてゐる自分に氣がついた。

「本當に早いもんだわねえ。もう須美ちやんがお嫁に行くんだもの。」

「私、ほんとに早過ぎると思ふわ。」と、須美子は、眞面目な、思ひ込んだ調子で云つた。

「早い方がいゝのよ。――でも、須美ちやんは幸福(しあはせ)ね。まあ、戀女房(こひにようばう)つてわけなんでせう。

お金はあるし、屹度大切にして下さるわ。

そんな事を云はれると、須美子は、もうすつかり途方に暮れて了つて、唯、顏を赤くするばかりであつた。それを見ると、美紗子はある執拗な意地の悪い興味に誘ひ込まれては、揶(か)揄ひ氣味の言葉をちよい〳〵と横の方から投げかけるやうにした。須美子はわけもなく泣き出したりするかと思ふと、又、そんな事は耳にもかけぬといふ風に、ぢつと自分一人の考へに耽り入る事もあつた。さういふ須美子の樣子が、もう、自分を世の中にたつた一人の姉として、自分ばかりに賴り縋つてゐたもとの須美子でない事を、明かに美紗子に思はせた。もう自分の須美子では無くなるのだ――と思ふと、美紗子は、何とも云へず淋しい氣がするのであつた。

又、その身も心もそれから住んでゐる世界も、未だ些(ちつ)とも汚され傷つけられてゐない純潔な處女として、素直(すなほ)に親の手から男の手に移されてゆく須美子の、初々しい憧憬と、瑞々しい希望とに張り切つたやうな心持を、自分のそれと考へ合せると、美紗子は、自分の痛み、傷き、疲れた心持が厭はしかつた。人目を忍んだり、親を欺いたりする自分の戀が、何となく汚れ果てたものゝやうに思はれて、この須美子の純潔さにくらべれば、自分は矢張、いたづらな女と云はれても仕方がない樣な氣さへした。而してまた、今はもう苦(にが)い澱滓(おり)ばかりが

殘されてゐるやうな自分の戀――最初からあまりに苦しく惱ましかつた自分の戀が、たまらなく呪はしいものに思はれたりするのであつた。

六

土用に入ると、毎日八十五六度から九十度以上の暑熱が續いた。母の病氣が次第に惡くなるのが一日一日と眼に見えて來た。

美紗子は、いつも夏になると起る持病の胃痙攣に惱まされたりして、ひどく身體が弱つて來た。で、須美子に社の方を休ませて、手助けをして貰ふ事にした。婚約だけしておいて、婚禮はもう半年や一年先に伸ばしてもいゝと先方でも云つてゐたし、此方にも支度などの都合もあつて、父ははじめさうする意見であつたが、美紗子が强く主張して、秋になつたら早速式を擧げる事にとり極めさせたのであつた。而して、須美子も、此際社を退かせる事に社の方に申し出てあつた。

「須美！　もうお前が親孝行が出來るのも、一寸の間だぞ。本氣になつて阿母様の看病をしなけりやいけねえぞ。」

父は晩酌の杯を擧げながら、急に叱りつけるやうな調子でこんな事を云ひ出した。――近頃、ずつと酒量は減じたが、毎晩の晩酌は不相變缺かす事はなかつた。昔から此の晩酌の時が父の一番機嫌のいゝ時で、二人の娘に代る〴〵酌をさせながら、種々おどけた事を云つて家内中を陽氣にしたものだつた。二人は――殊に美紗子は父の自慢の娘だつたので、その時分金廻りのよかつた父は、醉つたところを見すまして美紗子が强請る、着物だの、芝居だの、種々の願ひを、皆「うん、よし、よし。」と肯いて呉れたものだつた。

「高えお酌だぞ。柳橋の姐さんより餘つぽど高えや！」紺の腹掛の上に唐桟の半纏などを引ツ掛けた父は、その太つた顏の眼尻に優しい皺をよせて、鷹揚にほゝゑみながらこんな戯談を云つたりしたものだつた。だが、今では父も恐ろしく陰氣な氣難かしい人になつて、ちびり〳〵やりながらも浮かない顏をして考へ込む事が多かつた。五六年前の手違ひから急に手許がつまつて來る、その上、あすこはお上さんで持つてゐると云はれたほどの母が病氣で寢ついて了ふ。種々思ふやうにならない事が多いので、今まで殆ど苦勞といふ事を知らずに來た、呑氣な父が、呑んでも呑んでも醉へない酒の苦さを知るやうになつたのだつた。

父は、須美子に酌をさせながら、何かくど〳〵と言ひきかせてゐたが、

「いけねえ、もう止さう。」と、二本目を半分ばかり餘して、ごろりと横になつて了つた。

美紗子は母の室の隣の四疊で膝の上で幹子をねかしつけながら、懶く團扇を動かして居た。今朝の激しいさし込みのあとが未だきや〳〵と痛んで、身體にもせいがなかつた。肩胛骨の邊などに感ぜられる妙に重苦しい感覺が、ひよつとしたら母と同じ病になるのではないかなどとも思はせた。美紗子は悲しい果敢ない心持の中で、もう長くはなからうと思はれる母の事を考へたり、先刻電話をかけて來たTの事を考へたりした。

日暮前、お隣の砂糖屋の小僧が、電話と云つて知らせて來た時は折よく父は留守だつた。胸を躍らせながら出て行つて受話機に縋つて見ると、矢張Tからだつた。例の少し吃り氣味の聲に、もだ〳〵した胸の中から吐き出される荒い呼吸がきかれるやうな氣がした。美紗子は店の人達を憚る小さい聲で、そのだしぬけに突つかゝつて來るやうなTの言葉に受けこたへをした。

「でもね、とても今駄目なのよ。――ね、そんな事を云はないで頂戴。母がね、今大へん惡いのよ。えゝ、大へんいけないのよ。ね、そりやり私だつて行けさへすりや行きますわ。だけど本當に今は、手紙書く事さへむつかしいのよ。――あの、一昨日の手紙御覽下すつて。えゝ、私も少し身體が惡いの。」そんな事を云つてゐる中に美紗子は自分一人が四方八方からいぢめつけられてゐるやうな氣がして來た。

「ね、ですから、そんな事仰しやらないでね。」急に胸が迫つて來て、周圍の人達を氣にしながらもつい涙聲になつて了つたのであつた。

「そんなにお惡いんですか？」と對手の聲はくぐもるやうに聞えた。

「えゝ。惡いの、もうこゝ五六日が難かしい位なの？」と、云つて美紗子は、少し誇張し過ぎたと思つたが、しかし、醫師はもう明日をも保證してはゐなかつた。かうしてゐる間にも何時變が來るか判らない狀態になつてゐた。

寢て了つた幹子を幌蚊帳の中に入れて、そつと母の室に行つて見ると、母は崩れた結髪を枕の上に亂して、ぐつたりと眠つてゐた。長い病苦が眉のあたりに幽かな顰みを作つて、半ば開いた、色の褪めた脣から苦しさうな息が漏れて居た。花好きの母の爲めに、須美子が銀座の露店から買つて來た白グリアの大輪が、藥瓶に交つた大コップに挿されて、物惱ましい熱ッぽい空氣に喘いでゐた。美紗子は枕元に坐つて、輕く團扇の風を送りながら、その窶れ果てゝ、相變りのした母の顏を打眺めた。その、いつ自分の眼の前から消え去つて了ふか知れない母の顏をぢつと眺めてゐるうちに、種々の思ひ出が、懷しく心の中に群がり寄つて來た。口數の少い、いつも優しく微笑してゐるやうなこの母が、どんなに自分を愛して呉れたか？　どんなに、その柔かな慈愛で自分を包んで呉れたか？

それは七つか八つの時分であつた。美紗子は品川の方に居た伯父の家によく泊りにやられたが、一日二日は邊りの物珍らしさに取紛れてゐても、三日目頃になると、家が戀しくなつて、お臺場の方を見てはしく〳〵泣いたりした。すると、丁度その時分を見計らつた樣に母が迎へに來て呉れて、「美紗ちやん、餘り腕白だから伯母さんに上げて了はうと思つたが、矢張止める事にしました。」などと、笑ひ笑ひ云ふのだつたが、美紗子はもう、懷しさのあまりその懷に飛びついて泣き出したりした——そんな事が、今、美紗子にはまざ〳〵と思ひ出された。その時分は母も未だ若く美しかつた。美紗子は、早く生れた子だつたので、母との年の違ひは、丁度幹子と自分と位だつた。で、一緒に歩いてゐるとよく妹と間違はれたりしたものだつた——。

七

結納の取交しが濟んだ日から二三日經つて、母はとう〳〵息を引きとつた。

くやみ客の應對や、葬式のとりこみやで、何事にも中心になつて働かなければならない美紗子はその悲みを悲しむ隙もない人であつた。昔、父が盛にやつてゐた時分の關係から、會葬者抔も驚く程多かつた。赤坂の高臺にある菩提寺まで、さすがに立秋過ぎの頼りなさの見える午後の殘暑の日ざしの中を行列はしめやかに續いた。須美子と並んで、俥の上にゆられて行く白無垢の自分の姿を顧みても、美紗子は未だ母の死といふ事を十分に實覺する事が出來なかつた。お堂の隅にかしこまつて、嚴かな讀經の聲を耳にしながらも、家に歸れば、母は矢張あの部屋に寢てゐるもののやうに思はれた。須美子は勿論、近所のお上さん達などさへほろ〳〵と涙を溢してゐるのに、美紗子は些とも泣けないのが、自分ながら不思議だつた。

美紗子が本當に泣けたのは、葬式の濟んだ夜、Tに出す手紙の筆を執つた時だつた。精も根もなく疲れ果てゝゐたが、これ丈は書かずにはゐられない氣がして、皆寢て了つてから、そつと起き出して、美紗子は小型の書簡箋を机の上に置いた。

「T樣。母はとう〳〵亡くなりました。私のたつた一人の母さんは、もう此の世にない人になつて了ひました。あんなにまで慈愛深かつた、私の事をいろ〳〵と心配して下さつた母さんは……」

こんな風に月並な言葉を並べて行くうちに、今まで何かに抑へつけられてゐたやうな悲しみが急に捌口を見つけて、泉のやうに湧き溢れ流れ漲つて來た。美紗子は、その書簡箋の桃色がぼうと眼の前にひろがるのを感じた。次の瞬間には、涙が頰を傳うて、紙の上に音を立

てゝ落ちた。美紗子はペンを措いて、机に俯伏して了つた。

すこししてから顔をあげた美紗子の、泣いたあとの乾いた眼には、臨終の母の顔がまざまざと描かれてゐた。

「美紗ちやん！」母はさう云つて、あの悲しい眼つきでぢつと美紗子を見上げて、

「幹子を頼みます――ほんとに美紗ちやんには濟まないね。須美子の事もよく面倒見てやつて下さい。それから――それから、お前もね――。よく氣をつけてね――。」

たしかな言葉でそんな事を云つたが、その深く睜つた目の裡には、思ひ做しか、とう〳〵打明けずに了つた心の祕密を覗き込むやうな、又、何故隱してるかと詰る樣な――といふよりも恨むやうな心持が動いてゐた。

矢張、阿母樣は、死ぬまで自分の事を心配してゐて呉れたのだ。私は死ぬまで阿母樣に心配をかけてゐたのだ――さう思ふと、美紗子は泣いても泣いても足りないやうな氣がするのだつた。

「姉さんどうしてゐるの？」

美紗子が驚いて振向くと、須美子がそこにはひつて來てゐた。美紗子は、机の上の書きかけを手早く裏返して、而して涙の顔を灯影からそむけるやうにして、

「何だか頭が痛んで些とも眠れないの？」と、云ひわけするやうに云つた。

「私も些とも眠れないで――。」須美子は、肩を合せる樣にしてその傍に坐つて、ぢつと姉の顔を覗き込むやうにしたが、その眼には矢張涙が湛まつてゐた。

「私、どうしても、阿母さんが死んで了つたとは思へないわ。うと〳〵してゐると、須美ちやん！　須美ちやん！　つていふあの阿母さんの呼ぶ聲がするやうな氣がして――」と須美子は云つた。

「何だかまるで夢のやうね。」

「ほんとに――夢のやうだわ。」

「もう少し。せめて須美ちやんの御婚禮が濟むまで生きてゐて頂き度かつたわね。」

美紗子がさう云ふと、どうしたのか、須美子は、袂に顔をあてゝ激しく泣きはじめた。

美紗子は自分でも流れる涙を振り拂ふやうにしながら、

「須美ちやん、そんなに泣くのは止めませう。ね、私だつて悲しいけれど、泣くのは止めませうよ。――でも、あの方が會つて呉れてよかつたわ。須美ちやんの事だけは、阿母樣も安心してゐたわ。」と、なだめるやうに云つた。母の臨終の間際に、美紗子は、すこし變則ではあるが、須美子の夫となるべき高野を呼び迎へて一目母に會はせたのであつた。社の方へ電

話をかけると直ぐに飛んで來た高野は、此の場合のばつの惡さに一寸狼狽した樣でもあつたが、しかし、いかにも若い會社員と云つた樣な世馴れた態度で、その枕元に手をつかへたのであつた。

「阿母さん、阿母さん。須美ちやんの――。」と、美紗子が傍から言葉を添へると、

「高野で御座います、須美子さんを頂く事になりました高野で御座います。」と、高野も熱心な調子で繰返した。その時は、母はもう、幽かに脣を動かした丈で口は利けなくなつてゐたが、その眼はしかし、はつきりと婿となる可きその若い紳士の顏を寫してゐたに違ひなかつた。而して、一寸うなづくやうに首を動かしてゐた。

美紗子はその時のパセティックな光景を今も眼の弱に描き浮べたが、その時でさへかすかに蔭を射さずにはゐなかつたある妬ましさに似た感情が、今また心の中に頭を擡げて來るのが感ぜられた。

「でも、須美ちやんはいゝわ。――私は、私は本當にお母樣にすまない。」さう云つた時、美紗子の靑くやせた頰には更に新しい涙が流れたのであつた。

八

葬式やそのあと片附が大體濟んで了ふと、美紗子は心の張りの拔けたせゐか、すつかり弱つて了つた。

「須美！　すこし姉さんを休ませてやれ！」父はこんな風に云つて、美紗子を劬つた。而して美紗子が、母の病室になつてゐた奧の四疊に横になつて、懶げに幹子をあやしてゐる傍などに寄つて來て、何時にないしんみりとした調子で、話しかけたりした。

「又、お前が身體あ惡くしちや困るぜ。うちの事なんざ須美にやらせといて、當分ゆつくり休むがいゝぜ。」

「でも、須美ちやんも何時までもこゝに居る人ぢやないわ。」と、美紗子は果敢なげな調子で云つた。

「須美の事あ、どうせ少し延ばして貰はなきやならねえ。」と父は呟く樣に云つた。

「延ばす事無いと私思ひますわ。もう結納も濟んでゐるんですし。」

「いや、さうも行かねえ。」と、父は、いつもの父らしくない分別臭い顏附をして、傷々しく

疲れ弱つてゐるその娘の横顔をぢつと眺めるやうにしたが、
「斯うなつて見ると、俺は須美公だつて手離し度く無え氣がする。いゝ縁だから、とりツぱぐツちやならねえと思つたんだが、考へて見りや彼奴は未だ年もいかねえし――それにお前もあとで一人ぢやあ大へんだしな。」
「そんな事を云つたつて――。」と淋しく微笑した美紗子の心には、自分の事などは些とも考へて呉れもせず、あんなにまで須美子の縁談にばかり乗氣になつた父の心持に對する僻みがましい感情が、再びかすかに喚び起された。が、美紗子は、さういふ感情の醜さに心の眼をそむけるやうにしながら、
「須美ちやんがゐなくても私がやつて行きますから大丈夫ですよ。」さう、きつぱりと答へた。
「お前にや本當に濟まねえ。けどまあ、一二年の辛抱だから我慢してやつて貰ふんだ。何しろその子がお前の手を離れちや育たねえんだから――。」父は、心からの劬はりを見せてそんな事を云つた揚句に、もう二三年前から執拗に申込んで來てゐる、河岸通りの材木店の若主人からの縁談などをもち出した。美紗子を欲しいといふ口は、美紗子の耳に入つたばかりでも、まだ二つばかりあつたが、其中で父は一番その材木店の方に心が傾いてゐるらしく、

「もう二三年は待つてもいゝと云つてるんだからな。」などと云ひ添へた。
美紗子は、自分のTに對する苦い戀を十分に知り抜き乍ら、白々しくそんな話を持出したりする父の氣持を疎ましく思はずにはゐられなかつた。
「いゝのよ。私、一生どこへも行かずに居ますから。――而して阿母さんの代りに幹ちやんを育てます。此の子は阿母さんに私が頼まれたんです。」と美紗子は、反抗的な心持をその言葉に籠めてかう云つた。早く乳から離された幹子は、一體に發育が悪く、脾弱な、泣いてばかりゐる様な子だつた。むづがり泣きに泣き寢入して、その腕の中で小さな寢息をたてゝゐる幹子の顔に、美紗子はその頬を寄せるやうにして、
「お前も阿母さんに捨てられて了つたのね。可哀さうな幹ちやん！」と、心の中で呼んで見たのであつた。

何か中心點が失はれた様な、とりとめの無い淋しい日が續いた。美紗子は何よりも先にTの許に走つて、胸一ぱいの悲みを訴へ度い、と思つたが、なか〳〵外出の機會が無かつた。で、毎晩のやうに片便りの手紙を書いては、その悲しい文句に誘はれて心ゆくまで泣くのが、美紗子には何よりも慰めであつた。

Tから手紙を貰ふ事は、父の眼が怖ろしかつたが、それでも一度丈は下さいと云つて、そつと貰つた手紙には、いろ〳〵の事が細かに書かれてゐた。Tは、自分のわがまゝな愛が、いかにあなたを苦しめたか？　あなたばかりではない、あなたのお母さんにそんなに心配をかけたときくと、全く、お母さんには申わけがたい。けれどおわびしようにも、もうその人はゐないのか？　せめて一日でもお目にかゝつておきたかつた——などゝ、書きつゞけられてゐた。

九

二七日の日には、美紗子は須美子と二人丈で、その赤坂の寺に詣でた。寺は、葵橋の停留場で降りて、靈南坂を上り詰めたところの丁度米國大使館の眞後にあつた。兩側の高い塀の塀越の立樹の蔭影に、お對のパラソルの紫の色をくつきりと浮べて、二人はそのしめやかな細い道を靜かに歩いて行つた。而して、寺の門を入らうとすると、そこに、羽織袴の禮裝をした若い紳士が待ち受けるやうに立つてゐた。

「あら！」と、須美子が先づ目にとめて、小さい驚きの聲をあげた。それは、高野であつた。

「阿母さんの墓參りに參つたのですが。——多分あなた達もお見えになるだらうと思ひましてね。」と、高野は物慣れた調子で、どちらにともなく云つた。須美子は眞赤になつて、美紗子の背後に隱れる樣にした。

「まあ、左樣で御座いましたか。有難う御座います。」と、美紗子は赤くなりながらも、すぐ姉らしい落着をとりかへして、「あの、お待ち下すつたのでせうか？」

「いえ。今、參つたばかりでした。どうも、後からいらつしやるのがあなた方のやうな氣がしましたので、一寸こゝに立つて居たんですよ。」と、高野はその短い髭を立てた脣に一寸微笑を浮べた。

「有難う御座います。母も嘸喜びますでせう。」と美紗子は云つた。

それから三人は、門前の花屋へ行つて、花や香を買ひ調へ、閼伽桶を提げた墓守の爺さんを先に立てゝ、寺の背後の墓地の方へ行つた。三四十坪もあらうかと思はれる廣い墓地は、いくつもの區劃に分れて、幾十百の石碑が壘々と重なり合ひ、そこにぢつと人の心を押ししづめずには置かない樣な墓地特有のしいんとした氣分を湛へてゐた。

「まあ、どなたか御參りして下すつた方があるわ。こちらこんなにお花が——。」先に立つた須美子が輕い驚きの調子でさういふのを見ると、成ほど、その新しい卒塔婆の前には、まだ今

捧げられたばかりらしい生々とした蝦夷菊の花が、淋しい匂を放つてゐた。
「まあ、どなたか知ら――」さう云ひかけて、美紗子は、すぐその人を思ひあてた。而して一寸胸を衝かれた様にして言葉を消した。
「まあ、誰でせうね。品川の義叔父さんか知ら――。お爺さん、私達の前にどんな人がおまゐりに來たの？」と、須美子は墓守の爺に問ふと、爺は、無雜作な調子で、
「若い男の人でしたよ。三村さんのお墓はどこかと御聞きになるから、教へてあげましたよ。」
「若い男の方つて、何方でせう？　いくつ位の方？」と、須美子は執拗に問ひかけた。
「さあ、いくつ位かね。」と、老爺は桶をそこへ置いて、懶さうに云ひすてゝ去つて了つた。
「姉さん、誰でせう？」さう云ひながら振返つた須美子の眼が、ぢつとその蝦夷菊の花に心を吸ひ込まれてゐるやうな、姉の思ひ深さうな横顔を捕へた時、須美子も、漸くその誰であつたかに氣がついたのであつた。

墓參を濟まして寺を出た時は、もう午に近かつた。
「一寸、私の許へお寄り下さいませんでせうか。」と、坂を降りきつて電車通りに出ようとする時、高野は遠慮深さうな調子で美紗子に云ひかけた。「こゝからなら、私の家は、すぐなのですが。」
「はあ。」と美紗子は答へて、
「須美ちやん、どう？」と小聲で須美子に訊くと、須美子はまた一寸赤くなつて、
「私、どちらでも――」と云つた。
「何かお差支へが御座いますか？」
「いゝえ、別に何ですけど――」と、美紗子は一寸口籠つた。美紗子は何だか氣が進まなかつたが、招かれる者が須美子である以上、而して須美子がそれを拒まない以上、自分丈の氣持で辭退する事も出來なかつた。
「ぢや、一寸御邪魔させて頂きませうか？　ね、須美ちやん！」
須美子は、默つて點頭いた。
電車の中で、美紗子は丁度高野の向うに坐つてゐたので、初めて此の妹の婿になる男を落着いて觀察する事が出來た。その瀟洒とした快活な容貌と云ひ、きちんと整つた服裝と云ひ、いかにも當世向の若紳士であつた。その短い髭を上に乘せた脣から圓い顎のあたりにかけて子供々々した愛嬌があつて、くるりと見開かれて機敏に動く明るい眼附などもいゝ感じがし

た。――美紗子は、いつの間にか自分のTを、その男と並べて見てゐた。あの、青く痩せた、憂鬱な顔附をした、いつも苛々と氣むつかしいTを思ふと、自分の戀の暗さ、運命の暗さが、しみ〴〵と思はれるのであつた。

此の人は屹度、須美子の爲めによい夫となつて、須美子の一生の幸福を護つて呉れるに違ひない。さう思ひながら、美紗子は、自分の傍にすわつてゐる須美子の、ぽつと上氣したやうな美しい頰を覗いて見た。而して、

「須美ちやん、矢張、あなたは仕合せだわ。」とその心の中に呟いたのであつた。

十

愛宕下の高野の家には、老婢が一人で留守居をしてゐた。獨住には廣過ぎる小綺麗なその住居は、調度類などもすつかり整へられて、何時でも家庭生活を始める準備が出來てゐる樣に見えた。

「さあ、どうぞずつとおくつろぎ下さい。」

庭越しの崖の上から生ひ被さつた青葉の影が、伊豫簾の外に凉しく搖れるその靜かな二階

で、高野は、冷たい飲み物や果物などを二人に薦めながら、如才ない調子で、ぽつ〴〵と世間話などを始めた。その西の方にある鄕里の家の事や、老いた一人の母の事などの話も出た。

「來月の末頃、少し凉しくなつた時分に母も出て來る事になつて居ますが、さうしたら又お二人で御遊びにいらしつて下さい。――僕の母といふのが、又呑氣でしてね。」などと、高野は云つた。

「阿母さんはもうおいくつなのですか？」と、須美子が問うた。

「さあ、もう五十八――九。たしか九になるでせう。もう婆さんですよ。」と、高野は呑氣さうに笑つた。その中に、前から用意されてゐたらしい午餐などが運ばれた。

「まあ、ゆつくりなすつて下さい。少し凉しくなつてから、お歸りになる方がよう御座んすよ。」などゝ云つて、高野が連りに引きとめるので、美紗子もつい立端を失つた。而して、高野の話上手が、次第に打解けた自由な氣持に美紗子を誘ひ入れた。いろ〴〵と話してゐる中に高野の遠緣に當る或る娘が、美紗子の女學校時代の同窓であつた事などが判ると、話は益々彈んで來て、美紗子は久振に晴やかな氣持になつて聲を立てゝ笑つたりした。高野は、美紗子にばかり話しかけた。美紗子は、傍に忘れられたやうにしてゐる須美子に氣がつくとひとりで調子にのつて喋つてゐる自分が顧みられた。同時に、美紗子はまた、さうして閑却され

てゐる須美子と、閑却してゐる高野との、時々見合せる無言の眼附や顔附の中に、心の底から許し合つた同志の間にのみ見られる、或る安らかに落着いた親しみの通つてゐるのを認めずには居なかつた。而して、美紗子は、此の場合、自分が一種の闖入者である事に氣がつかずには居られなかつた。此の意識が、美紗子を淋しくした。而して、心の裡に或る恥を感じながら、口を噤んで了つた。

「どうかなさいましたか？　急に考へ込んでお了ひになつたぢやありませんか？」と、高野は微笑しながら斯う聞いた。

「いゝえ。」と、美紗子も仕方なしに微笑して、

「何だか少し頭痛がしてまゐりましたの。――いえ、何でもないんですの。――さあ、須美ちやん、そろ〳〵お暇致しませうか。」

須美子はうなづいた。

「まあ、宜しいぢやありませんか。もう少し涼しくなつてからお歸りになつても。」と、高野は心から名殘惜しさうにしてとめたが、

「えゝ、でも父に默つてまゐりましたから。」と、美紗子は冷やかな調子で云つた。

今朝から時々輕い頭痛に襲はれてゐた美紗子は、高野の家を辭して、午後の日のかん〳〵照りつける埃つぽい町へ出ると、くら〳〵と眩暈がした。

「須美ちやん。私、俥で歸ります。眩暈がして、とても電車には乘れさうもないわ。」と、美紗子は、そこの電柱の下に立ちすくんでかう云つた。

「めまひがするの？　ひどく？」と須美子は驚いて、その顔を覗き込むやうにして、「そこまで出れば俥があるわ。でも歩けて？」

「あゝ、少し位大丈夫よ。」

二人はそろ〳〵と歩いた。

「姉さん！」と、須美子がだしぬけに呼びかけた。

「なあに？」

「あのね、Tさんの事ね。私、私あの人とも相談して、屹度、よくなるやうにしますわ。」と一語一語云ひ澁る樣にしながら須美子は云つた。

「えゝ、有難う。」と美紗子は素直な氣持で答へた。

「姉さん！」と、再び呼びかけた時、須美子の聲は涙にうるんでゐた。「こんな事云つて、生意氣だと思つちやいやよ。私、姉さんにはほんとに濟まないし――それにTさんがお氣の毒でならないわ。」

「……。」美紗子も涙含ましい氣持になつて、默つてゐた。

その横町を出外れた處に、丁度一臺の辻車があのたので、美紗子はそれに乘る事にした。きたない俥で、車夫もよぼ〳〵の爺さんであつたが、それでも威勢よく走り出した、走り行く俥の上で、美紗子は、何となく「逐はるゝ者」のやうなみじめさを感じないではゐられなかつた。——美紗子の眼や耳には、不思議に高野の言葉や顏附などがはつきりと殘つてゐた。

「姉さん。」などと呼びかけられた時の、あの甘いやうな切ないやうな感情も鮮かに思ひ返された。美紗子にとつても、兎に角高野は好もしい男に違ひなかつた——。

「本當に須美ちやんは仕合せだわ。」美紗子はかうした心に繰返した。須美子の前に開かれてゐる明るい愛の生活、華やかな家庭の生活がいろ〳〵と想像された。續いて、ひとりあの貧しい不如意な家にとり殘されて、許されぬ戀に苦しみながら生きて行かなければならない自分の將來が對照的に思ひ描かれた。而してこれを一番恥しいものにしてゐた妬みに似た心持が、いつの間にか、美紗子の心を領しはじめた。すると、それを反撥する或る強い感情が、續いて頭を擡げて來た——。美紗子は心の中で云つて見た。「でも、あの人は、矢張、淺薄らしい處がある。何だか輕薄才子みたやうな處がある。本當の愛は強い悲しみに裏附けられなければ——さうTさんが仰有つたのは本當だ。私達は苦しい。けれども私達は本當の愛に生

きてゐる。」

美紗子は、Tのあの激しい熱に燃えた一双の眼を思ひ描いた。而して、再び心の中で叫んだ。

「Tさん！　私は苦しい。でも、私は本當に愛せられてゐるのです。Tさん、私達は、いつまでも苦しく悲しく愛し合つて行きませう。」

美紗子の涙含んだ眼には、幌の窓を通して、街路樹の綠が、ぼうと映つては消え、映つては消えた。

城が島

（九年七月）

私は、その夜の十二時發の夜行で東京へ歸らなければならなかつた。船の上では寢られないから、宵の中に一眠りしようと思つたがどうもうまく眠れない。で、上り框の柱に凭りかかつて、ぼんやりとしてゐた主の圭さんを捕へて、圭さんがつい此間行つて來たといふ南洋の話を聞いた。圭さんは此の島でも一二を爭ふ潛水の名人で一日に十五貫ならしの鮑を採るといふかせぎ手だつた。で、海軍の方から拔擢され、南洋の新占領地の海底測量の人夫になつて、ポナペ群島の方へ行つてゐたのであつた。

「獨木舟の眞中へ、斯う横に棒を渡して。」と、圭さんは口不調法の口の不足を、手眞似で補ひ乍ら說明した。油煙のひどく立つ洋燈の灯に、赤銅の顏の半面が、油に濡れた樣にてらてらと光つてゐた。

「で、その船をカノセと云ふんで、土人がそれへ乘つてべつかう龜を突くんだが、そりやあうまいものだアね。」

「何で突くんです？」

「槍で。五尺もある長え槍で。」

私は、漫々と疊はる白綠色の波の間を躍り上り躍り上りつゝ泳いで行く大龜の群を想像しながら、「圭さんも、やつて見たかい？」ときくと、圭さんは、

「いや、俺なんざあ迚も。」と云つた。

「これ見ろ、え、この椰子の實。南洋の椰子の實だあ！」と五つになる文三は、部屋の隅から椰子の實を兩手で抱へて來て、寢轉んでゐる私の鼻先につきつけた。南洋の土人のやうな眞黑な丸裸で唯眼ばかりが光つて居る。「南洋の椰子の實だあ！」ともう一度云つてそれを投げ出した拍子に、可愛いチンボコが一躍り躍つて、磯臭いにほひがする。

「あのう、三崎の島屋の前にな。」と文三はあとをしきりに何とか云ふのだが、その喚くやうな高調子のアクセントが妙なのと、よく舌が廻らないのとで、うまく判らなかつた。

「島屋の前に？　何だい。」と幾度も私が聞返すと、文三はじれこんで、益々高聲に「あのな」を連發するが、益々判らない。傍で十三になるおとくが笑ひこける。圭さんも笑ひ出す。背戸口で圭さんのお上さんのおさださんも笑ひ聲を合せる。——おさださんは、おしろいの花の仄白く見える井戸傍で、こつんこつんと螺螺を割つてゐた。ざあと釣瓶の水を明ける音がした。

「おとく、笊を持つて來う！」とおさださんに呼ばれて、おとくは暗い土間の隅から笊を探し出して、こと〳〵と背戸口に出て行つた。

三崎の町の島屋の前には芽が出かゝつた椰子の實がある。あれも矢張阿父が南洋から持つ

て來たので、島屋のをばさんに俺が呉れたんだ、といふ意味だと、笊を抱へてはひつて來ながら、おさださんが文三の話の註釋をしたが、文三はもう椰子の實の事は忘れて了つて上框の闕にのせた紙の船を、頰一ぱいふくらまして、ふう〳〵と一生懸命に吹いてゐた。

「ほうら、南洋へ行く船だア、へい南洋だあ！」

おさださんは、座敷にあがつて來ながら、

「どうだんべ？　今夜は？」と圭さんに聞いた。圭さんは、身體を斜にして、後の窓から空を見上げて、

「大丈夫だよ。今日のは相模雷立だからしけは來ツこねえ。」と夜航の安穩を私の爲めに保證して呉れた。「大丈夫、今夜はいゝ凪だあよ。」

「きんによはいゝ凪だつたあ、おりやあかじめを三貫とつたあ。」と、隅の方に腹這つてゐたおとくが思ひ出したやうに云つた。おとくも文三も背戸の本家の子で、文三は子の無い圭さんの養子になつてゐるのであつた。おとくは、口數の少いおとなしい子である。古びた麻の葉の腰卷一つで、文三ほどではないが、矢張隨分黑い。

「ほう、えらくかせいだなあ。もう大分ほまちが出來たんべえ。一つをぢさんが借りようかな。」と圭さんがいふと、

「おとくはもう東京へ行き度くて堪らねえだ。」と、おさださんが云つた。此の島の娘は、嫁入りする前にきつと東京へ奉公に出る習慣になつてゐた。おとくは毎日海へもぐつてかじめを採つては、東京でのお小遣ひを溜めてゐるのだ、とおさださんが話した。

「そんなに東京へ行き度いのかい？」と私が笑ひながら聞くと、うつむいてすこし赧くなつて貝殼を彈いてゐたおとくは、急に起つて、

「おら、もう歸んべ。」と蓮葉に叫びながら、背戸口から本家の方へ歸つて行つた。

「おとくは東京、文三は南洋か――。」と私は笑つた。それをきつかけに南洋の話が又一としきり續いた。圭さんはパンの樹の話をした。パンの樹の實は、栗と甘藷との合の子のやうな味のするもので一つ喰へば腹一ぱいになる――といふ樣な話に一寸興が乘つたが、圭さんはやがて話しくたびれたと見えて、口を開けてすう〳〵と寢て了つた。文三も大の字になつて寢入つてゐる。文三の小さい夢は廣い〳〵南洋の海を抱へ込んでゐるのであらう。

私は、前の緣側に出て、つめたい板敷の上に坐つた。

すぐ前の二坪ばかりの圃には、いぢけた玉蜀黍が五六本、もうすつかり實をとられて枯れた葉や裂けた葉がささこそと鳴つてゐた。その間に胡瓜の蔓が雜草交り貝殼交りに這つてゐて、魚の鱗のぴか〳〵と光る砂土の上では、何かの蟲がもう秋めいた聲で、りゝりゝと鳴

いてゐた。その向うは五十集の巳之助さんの家で、きりぬいた様に見える四角い窓から、赤い灯が玉蜀黍の葉越にちらついてゐた。

五十集の家と、その左手の物置との屋根を壓しつける様に、眞黑な斷崖が被ひかぶつてゐた。空は一面に濃い灰色に曇つて、雲の薄くなつた處々は眞珠色に滲んでゐた。天にも地にも、何處となく暗い隈が漂うて、仄かな奥深い感じのする夜だつた。

沖からざあと寄せて來ては、ひた〳〵と迫る波の音が、折々、忍ぶに餘るすゝり泣きのやうにせぐりあげて來る。晝聞くやうな大ざつぱな騷音ではなく、神經的に小さい顫動を刻む微妙なリズムが細々とした餘韻を引く。

つい足下でまた蟲が鳴き出した。おとくが、うしろの濱から摘んで來たのだといふ濱撫子と、百合に似た形の赤い花とを五六本、緣の缺けた蛸壺にさしたのがそこに置いてあつた。蟲は、その壺の底の方で鳴いてゐるらしい。

私は駒下駄を穿いて濱の方へ出た。戸袋の前に珊瑚樹の葉のつや〳〵と光る、そこを出はづれるとすぐ濱であつた。ざく〳〵と砂を踏んで、蝦網を乾す架竿の幾十本となく横へられた間を潜り拔け〳〵して渚に出ると、引きあげた船が七八艘、行儀よく並べた舳先には、一尺ばかりの幅を置いて潮先がひた〳〵と迫つてゐた。その船の船ばたに背を凭せかけると、風が冷たく頰を吹いて船肌の潮濕りがしんみりと背に沁みた。足元ではざわ〳〵と蟹の這ふ音がした。

海は鼠色にぼうと煙つてゐた。對岸の三崎の町の燈火が點々と横に長くつらなつて、その特に濃かな部分が三處ばかり、幻のやうな光を水に引いてゐた。晝間は手に取るばかりの町は、今は二倍も三倍も遠く見え、此島とは全く何のかゝはりもない夢の世界の様に思はれた。半島狀に見えるその突端では、海と陸と空との差別が全く無くなつて、唯眠つぽい灯が四つ五つ覺束なく浮んでゐるが、それが町の灯か、沖のいざり火かは判らない。今夜乘つて歸る可き東海丸が舷側に赤い灯をちらつかせて、黑い影のやうに横はつてゐた。その他帆前船が三四艘、處々に散在してゐて、それ等の船からしい人聲が、割合に明瞭と聞きとられるのが、錯覺でもある様な異やうな感じを與へた。——風がいやに冷たく吹いた。

私は、燈臺の光の見える方へと斷崖の裾を渡つて行つた。そこに又小さな洲濱が出來て居て、そこには引き上げられた船も無く、外海に近い丈に波の寄せ方も荒かつた。その先を遮る斷崖は犢の様な岩になつて海中に突き出てゐた。それへどつと打寄せる波頭が、銀灰色に烟つて、その水煙の間から沖のいさり火がたつた一つ見えた。而して、見上げる斷崖の上に僅かに燈臺の火先が搖れて、青白い光が薄暗い空をぼかしてゐた。闇の夜には螢の様に闇に

吸はれ、月夜には月の光に搔き消さるゝこの小さい燈臺の灯に、こんな夜には一ばんその光力を逞うすると見えて、ぼうと半空に青白い幻怪的な光を漲らしてゐるのであつた。――その青白い光の波動に喚び覺された樣に、つめたい風が吹いて來た。

私は、肌寒さを感じ乍ら歩みを返した。

舷によりかゝつてゐる浴衣の人を誰かと見ると、五十集の家に來てゐる女の人だつた。美しいが淋しい顏をした、病人らしい三十恰好の人である。一寸言葉をかけて見ようと思つたが、私は默つてその傍を通り拔けた。

振り返つて見ると、この空しい磯の渚を縫うて、夜光蟲のほのかな光が絶えず明滅してゐるのであつた。

子供を打つ話（九年五月）

A校長が赴任して來たのは、たしか、私が尋常四年になつた、其の新學期のはじまる時であつたと記憶する。脊も低く痩せてもゐたが、眼の窪んだ顎の角ばつた氣むづかしさうな顏附をして、新しい靴をぎゆつ〳〵と鳴らし乍ら、少し右の肩をあげるやうにして歩く――その様子には、いかにも校長らしい、一種の犯し難い威嚴があつた。

「今度の校長先生は、えれえ人だぞ。」

「だからおつかねえぞ。」

私達は、別に何といふ理由も無く、A校長は、先の校長よりもずつと偉い先生である、それ故に怖い先生である、ときめて了つた。先の校長といふのは、村から出た人であつた。而して、その他の先生も皆村の人であつた。あまり素性の知れ過ぎてゐる村から出た先生は、それほどえらいとは思へなかつた私達は、今度のA校長に於て、はじめてえらい先生を見出し得たやうな氣がした。A先生は、これまでY市の大きな學校の校長をしてゐたのだが、或る事情があつて、こんな山の中の小さい學校に來るやうになつたのだ―― といふ意味の事を、一級上のNといふ村長の息子が知つたかぶりで話したが、私達は「なるほどさうだらう。」と思つてゐた。

A先生の赴任して來てからしばらくの間は、そのぎゆつ〳〵と鳴る靴の音が、私達の心に、

妙な脅威的な響をひゞかしたが、やがて、その靴も古びて、もう鳴らなくなると共に、A先生に對する怖れも次第に薄らいで來た。A先生は、見かけによらない、やさしい先生であつた。

A先生は、尋常一年級を受持つたが、その教へ方の熱心なことは、私達生徒の眼にもよくわかつた。A先生は、オルガンも彈けば唱歌も案外いゝ聲で歌つた。(私達は、校長先生といふものは、オルガンを彈いたり唱歌をうたつたりするものではない、と思つてゐた。)而して、「もし〳〵龜よ――」の遊戯などを、先に立つてやつて見せた。手拍子をうつたり、あまり格好のよくない身體をいろ〳〵に曲げたりして、額際に汗をにじませて、小さな子供と一緒に躍る先生の様子は、大眞面目になつてやつてゐる丈けに何だか滑稽のやうであつた。眞面目と言へば、先生は實は眞面目な人で、さういふ時でも、笑顏一つ見せなかつた。いつも嚴肅な、憂鬱な表情をして、きら〳〵と光るやうな眼を、足元から二三尺先に落して一歩毎にしつかりときざみつけるやうにして歩くのが癖であつた。

先生の赴任と共に、先生の娘と息子とが、私達の學校にはひつて來た。娘の方は、私達と同級の尋常四年で、その弟は、たしか尋常二年位だつたと思ふ。「校長先生の子」といふので、はじめから一目置くやうな心持でこの姉弟を迎へた私達は、その都會風な風俗や言葉附など

に、わけもなくひきつけられて了つた。姉の方は、すぐに、私の級は勿論、全校の女生徒達の女王になつて了つた。弟の方は、洋服を着て靴を穿いて出て來たが、此の服裝が、第一私達の眼を睜らせた。「君」「僕」といふ言葉も珍らしかつた。上級のものも、下級のものも、皆「健ちやん」「健ちやん」と、その左右をとり圍んで、彼の機嫌をとる事に努めた。嫉妬に似た心持から、健ちやんの事で喧嘩したりする者もあつた。私達がさうして爭つて健ちやんの御機嫌をとつて、すこしでも健ちやんに親しくする事を無上の光榮と思つたのは、强ち健ちやんが校長先生の息子であるからといふばかりではなく、健ちやんのもつた都會風に洗煉された何ものかにあこがれたのであつたらう。私達の仲間でも、その當座、健ちやんにかぶれて「君」「僕」などといふ言葉遣ひをした者があつた。――いや、私も一度、その言葉を使つて見た事がある。その新しい言葉の感覺に心をおど〳〵させながら、顏を赤めながら、そつとさゝやくやうに「君」と呼んで見た事がある。相手は、たしか一番親しくしてゐたKであつた。Kは、一寸あわてたやうであつたが、さりげない樣子で「うん」と返事をした。私は、すこしもぢ〳〵してゐたが、急にはげしい羞恥に打克たれて、てれかくしに大聲で唱歌を歌ひながらかけ出して了つた。私が今、一日に幾回となく繰返してゐる此の「君」といふ言葉、それを、私は、その時はじめて口にしたのであつた。私は、その時の感じを今でもはつきりと思ひ出す事が

出來る。而して、それを思ひ出す毎に、微笑の頰にのぼるのを禁じ得ない。

しかし健ちやんといふ子は、大へん病身で、一月に十日位缺席する事が珍しくなかつた。胸に病氣があるらしく、あまり走つたり飛んだりする事は出來なかつた。皆からちやほやされるのを迷惑さうに避けながら、運動場の隅の櫻の幹に背をよせて、ぼんやりとしてゐる事が多かつた。A先生は、放課時間にも、殆ど絶間なく運動場を歩き廻つて、その注意深い眼を、生徒等の一擧一動に投げる事を怠らなかつたが、その眼が、さうして遊戯の群を離れて、さびしさうに佇んでゐる自分の息子の、蒼白な活氣のない顏を捕へる時、憂鬱な先生の顏は一層暗くなるやうに見えた。而して、その眼を更にいかつくして、そつけなくつき放すやうにして、くるりと向を變へて歩き出す。

が、ある時、先生はつか〳〵と自分の息子の傍によつて來て、

「どうだい？　今日は？」と、そつと聞いた。そばにたつた一人しか居なかつた私に憚るやうにしながら。

「……。」健ちやんは、哀願するやうな眼で、父の眼を迎へた。A先生は、一寸健ちやんの頭に手をあてゝ見たが、

「どうも未が熱があるな。」と云つた。が、そこへどや〳〵と押寄せて來た生徒等の群に氣が

つくと、慌てうろたへたやうな様子をして、その傍から離れて行つた。

一週間に一度宛、全校の生徒を運動場に集めて、校長が特に一場の訓話をするのが、此の學校の例になつてゐた。はき〳〵と齒ぎれのよい、少し癇高な調子で語らるゝA先生の訓話は、かなり立派な力のあるものであつた。A先生は、その訓話に於て、健康といふ事についてよく說いた。人生、健康よりよきものはない、あらゆる幸福の源泉は健康にある。德育、智育、體育の三つのうち、最も根本的なるものは體育である、健全なる精神は健全なる身體に宿る。身體の健全を得ずして何の德育、何の智育ぞや——といふやうな意味を平易な言葉で、くどいと思はれるほど熱心に繰返してきかして呉れるのであつた。私達は、「また、健全なる精神は、健全なる身體か」などゝ、いさゝか閉口しながらも、先生の熱心な調子には動かされずにはゐなかつた。此のA先生の體育演說と、先生の息子の病弱との間に、先生自身の心理に於て、どんな苦しい交渉がなされてゐたか、といふ事は、しかし、私達には十分のみこめなかつた。

とにかくA先生はいゝ先生であつた。生徒の受けもよく、村のうけも非常によかつた。A先生が來てから、半歲ばかりの間に眼に見えて校風が革まつて來た。前にも云つた通り、他の先生は皆土着の人なので、私交上の情實が教室にまで及んで來るといふ事も決して珍らしくはなかつた。たとへば、村の勢力家の子供は特に大切にするとか、親しい家の子には、よい點を與へるとかいふやうな依估贔屓も、かなり露骨に行はれてゐた。A校長が來てから、さういふ事はすこしも無くなつた。村の素封家のLといふ家の子は、三人が三人乍ら、毎年、優等賞を貰ふのがきまりになつてゐたが、その學年には、一人も貰へなかつた。村會議員の息子なのにも係らず、私の級のCといふ子は、見事に落第した。而して、健ちやんも亦、缺席勝の爲の不成績で、落第した。受持の教師は、及第させると主張したのださうだが、校長が自ら成績を考査して頑として、それを容れなかつた、といふ事であつた。

先生がいかに、公平無私であつたかは、次の一事によつてもわかる。先生は、絕えず運動場を巡視して禁じられてゐる遊戲をしてゐる者などがあると、引つぱつて來て、廊下に立たせておくのであつたが、私と同じ級の先生の娘は、先生によつて、幾度廊下に立たせられたか知れない。教師としての先生の眼には、他の子も自分の子も無かつたのである。先生の娘といへば、これは、弟の方とは違つて、非常におてんばな生徒であつた——。

それから、先生が皆、おさとの知れてゐる村の者なので、生徒の方でもあまり有難がらず、先生の方でもずゐ分生徒を亂暴にとりあつかふ風があつた。生徒を呼ぶにも、姓を以てしないで、その名を、しかも片輪な呼び方で呼び捨てた。たとへば、「武！」「猪之！」といふ風に、

而して、少し云ふ事をきかないと、拳骨をくらはすやうな事も珍らしくはなかつた。私が尋常三年位の時に教はつたHといふ若い先生などは殊にひどかつた。粗野な癇癪持のH先生は、殆ど毎時間一つ位の割合で、その堅い拳骨を飛ばした。私の祖父は村でもかなり尊敬されてゐる方で、學務委員なども務めてゐたから、私には特別に遠慮もしてゐたのらしいが、それでも、或る時、私はH先生の拳骨を頂戴した。體操か何かの時間であつた。何か、外見をしてゐたとか何とか、極く、些細な、何でもないやうな事――私はさう記憶してゐる――で、H先生は、私の頭を打つたのである。私は、家では隨分甘やかされてゐた。殊に祖父の寵愛者として、非常に大切にされて、曾て何人からも打たれた事などは無かつたので、H先生の拳固が、ひどく私を憤らせた。それはほんの一寸小突いた程度のものに過ぎなかつたので、勿論、そんなに痛くはなかつたが、「頭をうたれた」といふその事が、大へんに私の自尊心を傷けた。外の生徒は打たれる、しかし、私だけは打たれぬものと定めてゐたその誇を、その小さな一撃で打碎かれた事が、私は心外で〳〵たまらなかつた。睨むやうに　強くみはつた瞼の裏から熱い涙が、あとからあとからと、止度もなく轉げ出した。私は、自分の打たれた事を、非常に恥づ可き事と考へたので、家にかへつても、誰にも告げはしかつた。たゞその翌日から二三日、頭が痛いといつて學校を休んで了つた。實際私は、その打たれた部分に、いつまでも〳〵消えずに殘つてゐる一種のかすかな痛みを感じたのである。ところがそれから二月ばかりたつて、私はまたH先生に打たれた。私は今度は我慢が出來なくなつて、そつと祖父に告げた。すると祖父は非常に立腹して、「たとへどんな事をしようと頭を打つといふ法は無い、體罰は規則の上にもちやんと禁じてゐる筈である。よし！　おれが行つてすこしとつちめてやる。一體、此の村の教員共は亂暴で困る。」さう云つて、すぐに學校へ出かけて行つた。祖父がどんな事を云つたか、それは私は知らない。が、とにかく、それ以來、私は頭を打たれる事無しに濟んだ。

私は、あまり挿話（エピソード）に深入りしすぎたかも知れない。――兎に角、此の先生達の粗野な風習は、A校長が來てから、次第に改められて行つたのである。A先生は、決して生徒を打つ事をしなかつた。ずゐ分ひどいいたづらをして、先生にくつてかゝるやうな不良性の生徒もあつたが、先生は、決して、そのからだに手をかけるといふ事はしなかつた。而して、また、他の先生達にも決して生徒を打つ事をゆるさなかつた。（長くゐたH先生は、その頃隣郡の或る學校に轉任になつた。何でも、粗暴の風を改めぬ爲めに、A先生に追はれたのだ、と噂された。）生徒を呼ぶにも、ちやんと「××さん」といふ風に、さん附（づけ）にした。私の祖父はA校長のこのやり方を非常によろこんで、よくかういつて彼をほめた。「子供を打つのはよくない。

教師にしろ、親にしろ、『怒りを移す』といふ事は『論語』でもいましめてある。今度の校長はわかつてゐる。あれは立派な教育家だ。」

A先生が赴任してから一年ばかりの後、健ちやんは、とう〳〵死んで了つた。病身のところへ、急に肺炎にかゝつて、それで、たつた十歳で、亡くなつて了つたのであつた。私達は、皆心から悲んだ。健ちやんは何かの都合で、村のB――寺といふお寺の墓地に葬られたが、私達は、折々、學校のゆきかへりにB――寺の健ちやんのお墓まゐりをした。そのお墓の背後の土手に亂れ咲いてゐた山吹の花が、今でも私の心にはつきりとした印象を殘してゐる。

「先生、健ちやんのお墓參りをして來ました。」

「先生、おれも――。」

勿論、先生に媚びようとする不純な心持も、多少交つてゐたに違ひない。こんな風に告げると、A先生は、「さう。有がたう！」と低い聲でいつて、深くうなづいてゐた。その時の先生の眼には、暗涙があつた。

たつた一人の息子を失つてから、先生は眼に見えて元氣がなくなつた。しかし、學校の事には不相變熱心で、憂鬱な顏をしながらも、小さい子供と一緒に、唱歌もうたへば、遊戯もやつた。毎週の講話も缺かした事はなかつた。矢張、體育といふ事を繰返して說いた。が、

どうかすると、その調子が妙に昂奮して、云ふ事がしどろもどろになる事があつた。「身體が大切です。健康がすべての土臺です！　病氣になつてはおしまひです！　それつきりです……。」ぢつと、睨むやうな眼つきをして、嚙みつくやうな調子で、同じ事をいつまでもくりかへしてゐるやうな事があつた。

私が、高等二年（今の尋常六年）になつたとき、A先生は、急に、もとゐた町の方に轉任して行つた。先生が、こんな田舍に來たのは、健ちやんの健康の爲めに淸い空氣を要した爲めであつたが、健ちやんが亡くなつたので、がつかりして歸つて行つたのだといふ事を、あとになつてから私は聞いたが、A先生が轉任する二月ばかり前の事であつた。決して子供を打つたなかつたA先生が、唯一度子供を打つたのを私達は見た。

健ちやんがなくなつてから、A先生は一層陰鬱になつた。而して、餘ほど氣むづかしくなつた。その頃、私の級の受持のTといふ師範出の若い先生が、六週間現役に召集されて缺員になつてゐたので、尋常一年級の受持で時間の少ないA先生は、一日に二時間づゝ臨時に私の級におしへに來た。

氣むづかしくなつてゐる先生は、よく叱つた。叱るといつても、決してどなつたりなどす

るのではない。寧ろ丁寧な言葉附で、條理明白に說諭するのである。が、そのすこしかすれた言葉には一種の重壓があつて、その窪んだ眼窪の底から射出されるつきさすやうな眼つきと共に、かなり私達を怖れさせた。

私達の級には、先生の娘がゐた。前にも一寸云つたが、先生の娘のお絹といふ子は、かなりおてんばな、行儀のよくない子であつた。町育ちで才はじけてはゐたし、校長先生の娘であつたし、級中は勿論全校の女生徒からたてられて、大へん勢力があつた。その勢力に任せて、まあ、女の方の餓鬼大將といふ格で受持の先生を困らせるやうな事をも度々やつた。勿論、A先生は、それに氣がついてゐたのであらう。前にも云つたやうに、A先生が、娘を廊下に立たせたり、留め置いたりする事は、めづらしくなかつた。よくわからないが、A先生は、ふだんからこの娘が、あまり氣に入つてゐなかつたらしい。

教場でも、A先生の鋭い眼は、折々、その娘の方にきらめいた。高等二年の女生は、みんなで七八人しかなかつたが、揃つて行儀が悪く、受持の先生もかなり持餘してゐた。而してそのこそ〳〵話や、いたづらの中心は、大抵、そのお絹といふ子であつた。それが校長の娘なので、受持の先生も多少遠慮する傾があつたのは事實である。

それは綴方の時間であつたと記憶する。女生徒の一人が、鉛筆か何かを机の下に落して、

それを拾ひ上げようとして、身體をこゞめた途端、袂からざら〳〵と音を立てゝ一掬みほどのきしやごが轉び出した。小さな、その螺貝の殼は、銀色の日を捕へて躍り乍ら、生物でもあるやうに、勢よく四方に飛び散つた。その子は眞赤になつた。先生の眼はきらりと光つた。

「それは何だ？」A先生の嚴かな調子が、鳴りをしづめた教場に高く響いた。――一體、このきしやごは、一時全校の女生徒の間に、非常に流行したものだが、おはじきをして、やりとりするのは宜しくないといふので、二月ほど前から、それを買ふ事、學校へもつて來る事を、堅く禁じられてゐたのである。

「あれほど嚴しく止めておいたのにまだそんなものを――」と、A先生はその女生徒の顏と、散亂したきしやごとを等分に睨んだが、ずつと女生徒全體を見渡すやうにして、「あなた方は、未だこの悪いあそびをやめずに居るのか。」と、少しふるひを帶びた聲でいつた。女生徒達は、皆おど〳〵した眼で一寸左右を覗ふやうにして堅く身をそばめた。

A先生は、靴音を高く鳴らして、教壇から降りた。而して、女生徒等の机の傍近く寄つて、端の方から一人々々、きしやごをもつてゐるか？　どうか？　を嚴かにたづねた。皆ふるへる聲で、「いゝえ。」と答へて首を振つた。

「お絹、お前、もつてゐるのだらう？」自分の娘の番に來ると、A先生はぢつとその顏を睨

むやうにして、一層嚴かな調子で問うた。
「いゝえ。」と、お絹は幽かに答へた。
「屹度持つて居らぬな。」
「はい。」
「屹度だな。嘘はいはんな。――屹度だな。」
誰も、皆、持つてゐないと答へた。で、問ひはまた最初の女生徒に戻つて行つた。いつ買つたか、どこで買つたか、――嚴しくたづねられて、その子は、たゞおど〳〵としたが、問ひつめられて、とう〳〵、もう絶體絶命といふ樣子で、
「買つたんではありません。貰つたのです。」と答へた。
「貰つた？　誰に貰つた？」
「……。」
「何人（だれ）に貰つたか？　さあ、それをお言ひなさい。」と、A先生は、せきこんで來た。
「お絹ちやんに――」と、その子は答へた。A先生の眼はぎらりと自分の娘の方に光つた。
「いゝえ、私やあげやしません。」と、お絹は眞赤な顏をして云つた。
「今朝、門のところで貰つたのに――。」その子は、恨めしさうな眼を左右にさまよはすやうにして、誰にともなく訴へるやうに、半ば口のうちでかうつぶやいた。A先生は、づか〳〵と自分の娘の傍に寄つて、その机の蓋をあけて、亂暴に机の中をかきまはした。それから、娘の袂の中に手を入れた。袂の中はざく〳〵と鳴つた。
A先生の脣は、わな〳〵とふるへた。而して、その一掴みのきしやごを力一ぱい床に投げつけたかと思ふと、娘の襟首を引掴んで、ぐいぐいと教壇の方へひき摺り出した。娘は、袂を顏にあてゝ、啜り泣いた。その袂からは、またばら〳〵ときしやごが散つた。
「どうしたのだ？　どこで買つたのだ？」と、A先生は、喘ぎ乍ら訊ねた。
「近江屋で――。」と娘は答へた。
「その金はどうしたのだ。そんな金をお前にやつた覺えは無い――今朝鉛筆を買ふと云つたが――」
その時、男生徒の方でくす〳〵笑ひ出したものがあつた。それに誘はれて、皆が、笑ひ出した。――どうして私達が笑つたのか、今考へて見てもよくわからない。或は、A先生が、今朝鉛筆を買ふ錢を娘にやつたといふ、思ひがけないところでの内情の暴露といつたやうなものが、そこに或る不調和を感じさせたせゐかも知れない。が、その次の瞬間には、私達はもう笑つてはゐられなかつた。私達の笑ひ聲に向けられた先生の顏が、その刹那、ぱつと赧

くなつたやうに思ふ。と、思ふと、急に、激しい平手打の音がひゞいた。A先生が、娘の頰を打つたのである。娘は、高い聲で、泣き出した。その泣き聲の中に、ぴたり〳〵とつゞけさまに平手打の音が鳴つた。——そこには、A校長はなかつた。いつものA校長は無かつた。唯、怒りに驅られた一人の「父親」がある丈であつた。私達は、呆氣にとられて、此の異樣な、不思議な光景に眼を睜つた。先生は、足下に泣き倒れてゐる娘の小さな姿をうつろな眼に映すやうにして、失神したやうにしばらく突立つてゐたが、やがて先生は今自分のしてゐる事が何であるかに氣がついたやうに見えた。先生の顏はその時さつと赤くなつたやうに見えた。而して、羞恥と慚愧とのひどく混雜した表情のために、先生の顏はひきゆがめられた。先生はふら〳〵と教壇の眞中に立つて、脣をむづ〳〵させて何か云はうとしたが、どう思つたのか、その儘ふら〳〵と教室を出て行つて了つた。

その事があつてから一月ほどたつて、先生は急に、Y市の方へ轉任する事になつたのである。其の後、先生がどうしたか私は知らない。それからもう二十年近くたつ。あの時、あの光景を見て、唯妙な氣持しかしなかつた私にも、今では、先生の心持が多少わかるやうな氣がする。教師としての彼の外の、人の親としての彼の心持が。——さうだ、私も今は、人の親である。

仙太の戀

（九年八月）

七つの春、私は小學校にあがつたが、内辨慶で、お祖父さん子で、からきし意氣地の無かつた私は、學校へ行くのが可厭でたまらなかつた。長い顎髯を垂れた佐藤先生といふのが一年生の受持で、此の先生はその時分村の學務委員をしてゐた私の祖父とも心易い仲だつたし、私には特別に眼をかけて優しくして呉れたのだが、どうも私はその先生が怖かつた。先生ばかりで無く、大勢の仲間が皆怖くて、その大勢の中に一人でゐる事が心細くて、ともすると涙がさしぐまれる樣な思ひばかりした。

放課時間にも、私は、鬼ごつこや毬投げの仲間には交らずに、運動場の隅ツこの櫻の幹などに倚りかゝつて、ぼんやりとしてゐた。ぼんやりとした私の眼は、いつも、そこの唱歌教室の窓の下で遊んでゐる女生徒の群の方へ惹き附けられた。尋常三四年位の女生徒の、氣の合つた同志の五六人は、屹度そこに集まつて、お手玉をとつたり、毬つきをしたりしてゐた。而してその五六人の中に、一人際立つて美しい子が居た。色の白い細面に黑い凉しい眼をして、服裝などもきれいで、此の邊の女の子には珍らしい華車な樣子をしてゐるその子に私は心を捕へられた。物を云ふ時一寸首を傾げて「――ね」と語尾を響かして、睫毛の長い眼を睜り乍らこくりをする癖なども、私には堪らなく好もしく思はれて、淡い戀に似た心持でその娘の一擧一動を打戍つてゐた。

ひい、ふう、みい、よう、
四方の景色を春と眺めて、
……

その女の子はそんな風の唄を歌ひながら、上手に毬をついたが、或る時、その毬が私の足許にころ〳〵と轉がつて來た。私は無意識にそれを拾ひあげたが、どうしていゝか判らないで困つてゐると、走り寄つて來たその女の子は、につこりと笑ひ乍ら私の方に手を差しのべた。その時私は妙なはにかみから、毬を女の子に渡さずに、ぽんとその肩越しに向うへ投げやつた。

「まあ、意氣惡！」と、その女の子は一寸睨むやうな眼をしたが、晴れやかな笑ひを響かし乍ら、身を翻して毬の方に飛んで行つた。

私は、何だか大へん濟まない事をしたやうな氣がした。而して、その私の大好きな女の子からすつかり嫌はれて了つた樣に思つて、味氣ないわびしい心持がした。が、その女の子は一向そんな事は氣にしてはゐないらしかつた。

私がさうして、その女の子に見とれて居た時、

「邦夫さん。何をしてるんだい？」と、馴々しく呼びかけ乍ら、傍に寄つて來たのは、榎本

仙太だつた。榎本仙太といふのは、私が世間の人の名として覺えた最初のものだつたかも知れない。私は、列を作る時も仙太の次へ並ばされたし、教場でも、一脚の机を、仙太と二人で半分宛使はせられた。學校へ上つて、先づ最初に知つたのはこの榎本仙太だつた。仙太は私より一つ年上の八つで、年の割にはませてゐたから、私からはずつと大人の様に思はれた。實際、仙太は、兄貴の様な心づかひで、種々私を庇ふ様にして呉れたので、私も、仙太とだけは割合に打解ける事が出來た。私が、仙太の事を話すと、母は、「それはよかつた。親切なやさしいお友達が出來て宜かつた。」と云つて、仙太の爲めに私のとお對の筆入を買つて呉れた。私が、それを仙太に與ると、仙太は、幾度も有りがたうと云つて喜んだ。仙太は、K——といふ部落から通つて來たが、貧しい家の子と見えて、服裝も惡く、學用品なども乏しさうだつた。赤ツ毛の埃だらけの頭髪が、耳を掩ふまでに伸びてゐたが、それを短くして來たと思ふと、鋏で苅つたあとが鮮かな虎の斑を描いてゐたので、腕白な上級生から、「やあ、虎が來た。虎が來た！」と囃されて、ひどく悄げてその日一日便所の裏の方に隱れて居た事があつた。

その仙太が、私の傍にやつて來て、

「邦夫さん。お前はあの人を知つてるかい？」

と、私に問ひかけた。

「あの人つて、だれ？」

「ほら、あの人だよ。」と、仙太が指したのは、その、美しい女の子であつた。

「知らない！」と、私はかぶりを振つた。

「ありや、美紗ちやんて云ふんだよ。俺ん許の子だよ。」と、仙太は得意さうに云つた。

「うそだ！」と、私は刎ねつけるやうに云つた。

「うそなもんか？　おれん許の子だよ。うそだと思ふんなら。」と、仙太は躍起となつたが、二三歩、その女の子へ歩いて行きながら、

「美紗ちやん！」と遠慮ツぽい調子で呼びかけた。

その女の子は、お手玉を取つてゐた手を止めて、驚いたやうに振向いたが、仙太を見ると、急に腹立たしい顏附をして、

「馬鹿！　仙太！　彼方へ行つといで！」と、叱りつけた。私は、その優しい女の子が、そんな荒々しいものゝ言ひ方をするのに、内心少なからず驚いた。

仙太は意氣地も無く叱りすくめられて、にや〳〵と笑つたが、別に怒つた風も無く——それどころか、その女の子から言葉を掛けられた事を誇るやうに、

「な、俺をよく知つてるだらう？　俺ん許の美紗ちやんなんだよ。」と繰返した。

仙太は、「俺ん許の美紗ちやん」だと云ふが、あの美しい上品な女の子と、仙太の様なきたない子とが、一つ家の者だとは私にはどうしても思へなかつた。

すると、仙太は、私がそれを本當にしないのをもどかしがる様に、

「ほら、これも美紗ちやんに貰つたんだよ。これも、それからこれも――。」と、授業中の教場で、使ひふるして短くなつた鉛筆や、しまひの方だけに少し白紙を剩してゐる雜記帳を私に見せた。

「この本もさうなんだよ。な、こゝに名が書いてあるだらう。三澤美紗子つて。」と云つて自慢さうに見せたのを見ると、なるほど、仙太の教科書も矢張、美紗ちやんのお古であつた。

さう云へば、塗りの剝げた小さな辨當箱でも、孔のあいた教科書包みの風呂敷でも、皆、その美紗ちやんのお古らしかつた。赤い鼻緒の上草履も、慥かさうらしかつたが、これ丈は仙太も流石にきまりが悪いかして、その赤の上を墨で黑く塗つて、人に氣がつかれはしないかと始終足もとを氣にしてゐた。

仙太は、眼と眼の間の遠い、鼻の低い、口の大きい子で、色は白い方だつたが顏一面に雀斑があつた。學課もあまりよく出來る方でなく、かなり惡戲好きで、よく先生に叱られた。惡戲ッ子のくせに意氣地なしで、先生に席から引摺り出されて、教場の隅に立たせられたりすると、すぐめそ〳〵と泣き出した。いつもおどけた眞似をしては、人を笑はせるのが得意で、人の機嫌をとる爲めには、どんな事でもするといふ風だつた。虎の斑のやうに頭髮を刈つて來るので「虎」といふ綽名がついてゐたが、上級生の腕白な奴は、

「虎！　さあ來い！　虎退治だ。」などと云つて、仙太に飛びかゝつた。而して、仙太の背に馬乘になつて、襟首を摑まへて、ぎゆう〳〵と砂利の上に壓しつけて、

「やい、虎！　虎なら虎らしく呻れ。」と云つた。すると仙太は、「うゝ、うゝ――。」と妙な聲で唸り乍ら、半ばは虎にふさはしい動作として、半ばは實際の苦しさから、身もがきをしいしい、首を振り立てた。

「やあ、此ん畜生！　暴れ出しやがつた。」と、上に乘つた奴は、本氣になつて小突き廻す。見てゐる者は皆聲をあげて囃す。皆に囃されると、仙太は益々調子に乘つて、「うゝ、うゝ――。」と唸り乍ら、身もがきと一緒に首をふり立てるのだが、見ると、その赤く充血した顏は苦痛の爲めに引き歪められて、眼には一杯に涙を溜めてゐた。さうして、散々こづき廻さ

れて、漸く赦して貰つた時は、仙太は埃と汗とで汚れた顔に今にも泣き出さんばかりのべそをかいてゐたが、それでも未だ、「うゝ、うゝ――。」と唸りながら、おどけた様子で首を振立てる事を止め無いのであつた。

仙太は、よく大人の口まねをして、生意氣な事を云ふので、度々、上級生からいぢめられた。しかし、根が惡氣のない無邪氣な子なので、決して憎まれはしなかつた。私には、大へん親切にして呉れて、私が草履の鼻緒を切らして困つてゐると、上手にたてゝ呉れたりした。而して、一度雨の降つた日に、私を迎へに來た家の下男が、「坊ちやん」と呼んだのを聞いてゐて、

「坊ちやん！　山岡の坊ちやん！」などと、私を呼んだりする事もあつた。

「坊ちやん、お前と俺とはいつまでも仲好にしようぜ。おれは、本當にお前が好きなんだからな。――俺が一ばん好きなのは、お前と、それから美紗ちやんさ。」などとよく云ひ云ひした。

一年生の時から四年生の時まで、私と仙太とは同じ机に並んでゐた。仙太は成績もよくないし、家が貧乏でもあるしするので、私も次第に仙太を馬鹿にするやうになつたが、併し、相變らず仲好ではあつた。

私達が四年生になつた時、仙太の謂ふ「俺ん許の美紗ちやん」は高等三年になつてゐた。一年增に美しくなつた彼女の、そのみづ〳〵しい嫋やかな姿は、全校の女生徒の中でも際立つて眼についた。高等科になるともうそろ〳〵生心が附くので、誰と誰とがどうだとか斯うだとかいふ樣な噂がよく立てられたが、美紗子は美しい丈に、とりわけさういふ興味の對象となる事が多かつた。而して、どういふものか、彼等は、多くの女生徒の中でも美紗子一人をめのかたきにして、種々惡口を云つたり、意地惡をしかけたりするので、美紗子は廊下の柱などに倚りかゝつて泣いてゐる事がよくあつた。

それを見ると、仙太は何時でも躍起となつた。美紗子を苛める者は、それがどんなに年上の強い奴でも構はずに、仙太は猛然として喰つてかゝつた。が、結局、相手から返り討にされて、さん〳〵な眼に逢ふだけの事だつた。

「仙太の奴、彼女の事だと夢中になる。餘程をかしな奴だぞ。」

「仙太の奴、彼女に惚れてるんだ。」

皆、そんな事を言つて囃し立てた。而してさもそれが可笑しい事のやうに、聲を合せて笑つたが、仙太は、眞面目な顏をして赤くなつてゐた。

町の呉服屋の子で、美紗子と同級の野村といふのが、美紗子に相應しい美貌の持主だつたので、よく美紗子との噂を立てられた。美紗子の事を、「おい、野村！」と呼びかけたり、野村の事を、「やあ、三澤君！」と呼びかけたりして、彼等は喜んでゐた。裏の運動場の隅に建てられた體操器械の置場の板壁には、いつも落書が絶えなかつたが、そこへ、何人が書いたのか、思ひ切つて大きく相合傘を書いて、その下に、三澤美紗子、野村正一と二人の姓名が並べられてゐた。その落書は、學校中の評判になつて、私達も交る〴〵それを見に行つたが、何時の間にか、その相合傘の一方の野村正一といふ文字が消されて、あとに、小さく薄く、榎本仙太といふ四字が記されてあつた。

仙太と美紗子では、どうも餘り不釣合だつた。だから、それを見ると、皆、大笑ひに笑つた。而して、可笑しい事には、その榎本仙太と書いた文字は慥かに仙太自身の筆蹟であつた。

「やあ、仙太と美紗子と――。」と、皆が笑ひながら囃すと、仙太はその鼻のぴしやんこな顔をぽつと赤くして、「えへへ、えへへ。」と笑つてゐた。

仙太はしかし、その頃では、前の様に、あまり「俺ん許の美紗ちやん」を振廻さなくなつてゐた。が、私にだけはよく美紗子の噂をして聞かせた。昨日は美紗ちやんと一緒にK町に行つたの、此次には美紗ちやんと一緒に山遊びに行くんだのと、得意さうに話して居た。仙太

の話に據ると、二人はいかにも仲が好ささうで、美紗子は十二分の好意を仙太に寄せて居る様に思はれたが、併し、學校での美紗子は、ひどく仙太を可厭がつて、仙太と同じ家に住んでゐる事を人に知られまいと努めてゐる様に見えた。此の時分になつてはつきりと知つた事だが、仙太の父は美紗子の家の古い小作人であつたが、仙太の母が未だ乳呑子の仙太を置いて別の男と逃げてから、ぐうたらな仙太の父は、すつかり悄げて了つて、獨立して一家を營んで行く事が出來なくなつたので、仙太と共に、美紗子の家に引取られて、そこの臺所の隅にしがない父子の生活をしてゐるのであつた。だから、仙太は「俺ん許の美紗ちやん」といふが、實は美紗子は主人の娘なのだつた。それを仙太が兄弟か何かのやうに云ひ觸らすので、美紗子はひどくいやがつてゐるらしかつた。時々、美紗子が忘れて來たものを、仙太があとから持つて來て、美紗子に渡したりする事があつたが、そんな時、仙太は、如何にも親しげな調子で、

「美紗ちやん！　お前、これを忘れたらう。」などと、云ひかけると、美紗子は、引ツたくるやうにそれを受取つて、知らぬ顔をしてゐた。而して、仙太が未だ何か言ひかけようとすると、「馬鹿！　彼方いお出で！」と、眼を光らして、邪慳に叱りつけるのであつた。でも、仙太は別に怒りもしないでにや〴〵と笑つてゐた。

教科書でも、その他の學用品でも、仙太は皆、美紗子のお古を貰つて使つてゐた。その教科書には美紗子の書いた署名が殘つてゐた。仙太はそれを得意さうに、わざ〳〵人に見せびらかした。而して新しく買つた本にまで、自分で、三澤美紗子有などと書いて喜んでゐた。

だが、何人も、眞面目になつて、美紗子と仙太とをどう斯うと評判する者は無かつた。

「仙太！　お前、昨日何處え行つた。此の馬鹿！　彼女のお供をして、彼女のあとにくつついて、嬉しさうににこ〳〵しながら歩いてやがつたぞ。」

などと、揶揄はれてる事もよくあつた。

仙太は、美紗子の事では、どんなに揶揄はれても罵られても唯にや〳〵と笑つてゐた。だが、もし美紗子を苛める者があると、容捨なく其奴に喰つてかゝつた。而して、散々ひどい眼に會はされて、膝小僧から血を出したり、頭に瘤をこさへたりした。

仙太は、美紗子が卒業した年に、學校を中途退學した。美しい美紗子を失つて學校がひどく淋しくなつたやうな氣がした。併し、私にとつては、美紗子よりも仙太が居なくなつた事が大へん淋しく思はれた。仙太は、隨分おどけた、をかしな奴だつたが、非常に親切な心の濃やかな友達だつた。私は何かにつけてよく仙太の事を思ひ出した。

私が高等四年の時であつた。私の部落のお寺で、禁酒宣傳か何かの幻燈會が催されて、村中の老若が集まつて來た。その晩、私は、K――部落の若衆達と一緒にやつて來た仙太と久振で逢ふ事が出來た。仙太は、その時分村の若衆仲間で流行つてゐたやうに、頭髪を角刈にしてゐたが、それが、まだ子供ツぽい全體の様子と不釣合で、かなり滑稽に見えた。私は、昔、彼が、虎刈の頭をしてゐたのを思ひ出して、一層滑稽に感じた。だが、久振に逢つたので、非常に懐かしい氣がして、幻燈などはそつちのけに、本堂の柱の蔭のところで、いろいろと話をした。

「本當に君、僕も一度逢ひ度いと思つてたんだよ。いろ〳〵君とは話し度い事もあるんだよ。」仙太はそんな調子で云つた。「君」だの、「僕」だのと、仙太は仲々しやれた言葉を使つた。而して、もう一人前の若衆だといふやうな顔附で、袂からゴールデンバットを出して吹かしはじめた。

「僕も今一つ苦勞があつてね。」と云ふから、

「何だ？」と聞くと、

「彼女がね、どうしても僕と一緒になり度いつて云ふんだよ。」と、仙太は沁々とした調子で云つた。

「彼女つて、誰だい？」
「あの美紗子がさ。」仙太は、極まつてらあ！　といふやうな顏附で云つた。が、私は云ふ事があまりへんなので、默つてゐた。すると、仙太は、
「今、東京の女學校に行つてるんだがね。――いゝ娘になつたぜ君、紫の袴か何か穿いてね。」
と、嬉しさうに云つて、
「それが、どうしても僕と一緒に――つまり夫婦になり度いといふのさ。で、本人はそのつもりでゐるんだが、何分親がむづかしやだからね。僕も實際、どうしたらいゝか、困り切つてゐるのさ。」と、いかにも思案に餘つたやうな、心配さうな顏附をしてゐるのであつた。
私はまさかと思ひながらも、あまり仙太の調子が眞面目なので、半信半疑の心持になつた。而して、
「そんなに先で思つてるんなら、一緒になりやいゝぢやないか！」と、多少昂奮した調子で云つたが、言つて了ふとすぐに酷く氣がさして一人で赤くなつた。「思つてる」とか、「一緒になる」とか、そんな大人の言葉を口にしたのは、私はたしかにその時が最初だつた。
「あゝ、僕もそのつもりぢやゐるがね。何れまた君にも考へて貰ふ事があるかも知れないよ。」仙太は飽迄も眞面目な調子で、そんな事を云つた。

それからまた二三年經つた。私は、東京に出て、叔父の家に寄食して、中學に通ふ身となつた。
私が東京へ出て、最初の歸省の汽車の中であつた。同じ室に一人の美しい女學生が乘り合せたので、熟く見ると、慥かに三澤美紗子であつた。美紗子はもう十九か二十になつてゐる筈だつたが、その娘盛りの漲るやうな美しさは、人々の眼を見張らせるに十分だつた。豐かな黑い髮と、白い匂やかな頰と、活々とした、それ自身が一つの生物であるやうな大きな眼と、高慢らしいまでに高い鼻と――それは東京へ出て、澤山の美しい女達を見馴れた眼にも、とりわけ眼立つ美しさであつた。
私がさうして、或る驚きを以て遠くから彼女を眺めてゐると、ふと、私に氣がついた美紗子は、
「まあ、山岡さんぢやないの？」と、無雜作に呼びかけた。而して、如何にも女學生らしい快活さで私の傍に寄つて來て、いろ〳〵と話しかけた。私は、非常に嬉しくはあつたが、何だか眩いやうな、壓しつけられるやうな氣がして、はか〴〵しくは返事をする事も出來なかつた。

美紗子は、停車場の賣子から果物を買つて分けて呉れたりなどして、姉らしく私をもてなし乍ら、私の學生生活の模樣をいろ〳〵と聞いた。而して、自分の東京の住所を紙片に記して呉れて、此次必ず訪ねて來るやうにと云つた。私は、何も彼も嬉しかつた。

やがて、村の停車場に着いた。改札口を出ると、そこに二三臺の俥があつたが、その中の一臺には仙太が居た。それは三澤家の自用車で、美紗子のお迎ひに仙太が曳つぱつて來たのだつた。

被衣姿の仙太はきよろ〳〵とした眼で、改札口からプラットホームの方を覗き込んでゐたが、先づ私を見ると、びつくりしたやうに、

「やあ、山岡さん！」と云つた。あの幻燈會の夜以來、仙太に逢つたのは初めてであつた。

「やあ！」と私が改札口を出ながら、一寸頭を下げると、仙太は尙もきよろ〳〵と眼をさまよはしながら、

「宅の美紗ちやんはどうしたんだらう？」とつぶやいた。

「あとから――。」と、私が應へると同時に、美紗子がかたこと下駄を鳴らして走り寄つて來た。美紗子は改札口を出ると、

「ぢや、山岡さん、私はこゝで失禮してよ。」と、親しげな調子で私に云つた。而して、その小さなバスケットを無言の儘、仙太に渡すと、仙太が何か云ひかけるのは耳にもとめぬといふ樣子で、その俥に乘り込んだ。仙太は、甲斐々々しい風附をして、膝掛をかけたりなどしたが、俥の上の美紗子から何か二言三言小言を言はれたやうだつた。

仙太は梶棒を上げながら、一寸私の方を見た。而して、べそをかいたやうな、そのくせまたひどく得意なやうな、へんな顏附をして、「えへ〳〵、えへ〳〵」と妙な笑ひ聲を洩らしたと思ふと、

「えゝい、はいよう――！」と、怖ろしく威勢のよい掛聲をして、韋駄天のやうに走り出した。

N先生のビジョン（七年四月）

兩方から逼つた山裾の間を、小路は曲り曲つて、一曲りごとにだら〳〵と爪先上りになる。兩側の雜木林の綠の中には、恍惚とする聲で小鳥が鳴いてゐた。路傍の草叢の中には木瓜の花が燃え、ちよろ〳〵と湧き出す泉の上には山吹の花が枝垂れかかつてゐたりした。明るい空氣に談笑の聲を響かし乍ら一行は長い列を作つて登つて行つた。先頭が村長、次が校長、その次が一行の主賓たるN先生、それから學校の教師、村の役員、青年會々長、その後には青年會の人達がつゞいた。その中にはN先生が此の村に教鞭をとつてゐた頃の教へ子であつた者も交つてゐた。N先生から最も愛され、志を勵まされて、一度は先生を便つて東京に出て苦學をしたが、身體を惡くして今は役場へ務めてゐるK青年は、一番あとからぽつりぽつりと歩いて行つた。Kは久振で先生に逢つて、非常に懷かしくは思ひ乍らも、意氣地の無い今の姿を先生に見られるのが辛いのであつた。

徑は次第に險しくなり、山は次第に深くなつた。兩側の雜木林が、杉林にかはつて、一行は暗い濕ツぽい綠の隧道へ這入つて行つた。是からが××村の共有樹栽地で、N先生が行つて見ようとする學校の樹栽地はその中の一部分である。

「隨分大きくなりましたな。」とN先生は一寸立ちどまつて、樹脂の匂ひを含んだ爽かな樹の香をすうと吸ひ込んで斯う云つた。

「學校のはこれより未だ一際高くなつて居ります。これは、たしか學校のより三年あとに植ゑつけたんですから。」

青年會の會長は、ステッキでこつ〳〵とその幹を叩き乍ら云つた。

「その筈ですね。——もう十五年も經つのですからね。」

N先生の口からは、又しても感慨深い言葉が漏れた。

谷が窮まつて又一つの谷が開ける。漏斗形に右左に伸びた山肌は、麓から中腹まで杉の林に掩はれて居た。「××小學校樹栽地」と書かれた雨曝れた標木を灌木の叢の中に見出した時、一行はN先生の周圍を取捲いて、而して等しく眼を擧げた。

「隨分大きくなりましたな。」とN先生は云つた。

「六千本はあります。もう五六年するとざつと、一萬兩になりますよ。」と村長が云つた。

「皆、Nさんの御丹誠の結果で——。」と帽子をとつて汗を拭き乍ら校長が云つた。さういふ風な言葉が、一同の口から繰返された。

「いや、決して——。」と打消すN先生は、得意の微笑に、その肥つた丹い顏を明るくした。

一同は草を藉いて暫く休息したが、やがて杉林の中にはひつて行つた。下草を分け、下枝

を潜つて、上へ上へと登つて、林を出外れて了ふと、林は眼の下にその全景を展開した。N先生は、谷を埋め山を埋めて蠕々と並び立つた杉の林を幾度となく眺め渡した。N先生は十年前の秋晴のころ、四十餘人の生徒を引連れて、此谷に分け入り、自ら先に立つて此の山の草を苅り灌木を燒き、堅い岩石まじりの土を開墾して、子供等の卒業記念として一萬本の杉苗を植ゑつけさせた日の事を思ひ浮べた。

「おれの植ゑたのは屹度つく。」

「おれのだつて。」

子供等はかう云つて苗を植ゑた。先生は一々それに手を添へてやつた。先生は一の旅人として此の村に來た。而して此の村に是丈の努力の記念を殘した。此の杉林は年と共に繁り、自分の記念は永久にこゝに殘るであらう——かう考へるとN先生は衷心に限ない誇りを感じたが、先生は更により以上の誇を以て考へた——併し、俺の栽ゑたのは樹ばかりではない——十年の計は樹を栽うるにあり、百年の計は人を栽うるにあり——。

がや〳〵と騷ぎ乍ら降りてゆく一同を少しやり過して、先生は靜かにあとから降りて行つた。樹立の間には樹脂の匂を含んだ濃いしめツぽい空氣が淡綠の水のやうに堪へられてゐ

た。先生は杉の林の一本々々を丁寧に見乍ら歩いた。——そのうちに一つのビジョンが先生を捕へた。其の杉の樹の下から短い筒袖を着た、眼の圓な男の兒が先生の前に飛び出した。一本から一人宛飛び出した。而して兩手をあげて先生！　先生！　と呼びかけた。「先生！　私はB・Aです！」——おゝB・A、彼は行儀の惡い、併し數學のよく出來る兒であつた。「先生！　私はN・Iです！」——おゝN・I、彼は運動ずきな、併しよく泣く兒であつた。「先生！　私はT・Kです！」——おゝT・K、彼は……。「先生！　私はN・Mです！」——おゝ、N・M……。「先生私はT・Oです」「先生！　私はK・Yです！」「先生！……」

「先生！　私はS・Nです。」といふ悲しい聲がきこえた。そこには黃色く立枯れた一本があつた。青白く窶れた、眼ばかり大きく輝いた敗殘の一青年が先生の前にあらはれた。彼は先生が最も望みを囑した秀才だつた。先生は彼を、無理な境遇の中から東京へ呼んだ。併し、彼は躓いた、失望した、死んだ。

「先生！　私はL・Kです！」二度目の枯木が斯う云つた。彼も田舍に置くには惜しい秀才であつた。奮起して都へ出た、併し、今はどうなつたか知る者もないと聞いた。

——先生の心は震へはじめた。三度目の枯木には不幸なSが居た。四度目の枯木には、腑甲斐のない、墮落したHが居た。何れも先生によつて志を激まされた青年だ。五度目の枯

木、六度目の枯木、――先生は枯木の餘りに多いのに氣がついた。先生の眼には、枯木ばかりが見えて來た。先生の心は暗くなつた。而してはげしく震へた。此里ばかりではない、N先生は三十餘年の教師生活の中には幾つの里の子供等に男子の事業を說いて、その功名心を喚びさました。百年の計は人を栽うるにあり――併し、併し――併し――。

「隨分枯れたのもありますね。」と降りて來た時先生は云つた。

「多くの中ですもの、仕方がありませんや。」村長はさう云つて、「さ、辨當をやりませう。」

先生は一人ぼんやりとイんで居た。K靑年がだまつて其傍に立つてゐた。先生は、あゝ、ここにも――と思つた。

「どうだい。近頃は身體はいゝかえ?」と先生はやさしく問うた。

「えゝ」とK靑年は低く答へて懷かしさうに、先生の白髮のちかちかと日に光るのを見た。先生も老いた。あの教卓を叩いて、

「男子生れて草木と共に朽つる勿れ!」と說いた頃の先生の悌はもうどこにも見出されなかつた。春の鳥は連に鳴いた。

母

(九年八月)

二三日うちに一寸お尋ねし度い、一身上の事に就いて、いろ〳〵相談して頂き度い事があるから――といふ端書を、肇から受取つた時、私は一寸混亂した氣持になつた。

肇が訪ねて來るとすると、どうしてもこゝで讓吉と顏を合せなければならないが、二人とも、お互に兄弟であるといふ事を知つてゐるだらうか？　肇の方では、或は讓吉が自分の弟である事を知つてるかも知れないが、讓吉の方では、肇が自分の兄である事を知らないかも知れない――兄があるといふ事位はどんなに周圍で祕密にして置いたところで、うす〳〵知つてはゐるだらうとも思はれるが、しかし肇をその兄だとは知らないかも知れない、よし双方でよく知り合つてゐるとしても、お互ひにどんな感情を持ち合つてるか？　こゝでだしぬけに顏を合せて、お互にばつの惡い思ひをするやうな事は無いだらうか――？　工合の惡い事になつたな、と私は思つた。

さうも思つたが、しかし一方では、又、いや却て好い機會が出來たのだ。一つの胞から出た彼等兄弟を　この機會に引き合せて、しつかりと握手させてやらう。而して、二三日一緒に樂しく遊ばせてやらう。――さう思つて、私は、一種の緊張した心持で肇の來訪を待ち構へた。

丁度その一週間ほど前から、讓吉は、師範學校の休暇を利用して英語の講習に出るといふので、私の家に來てゐるのだつた。お坊ちやん育ちの、人見知りをする讓吉は、私などが話しかけても、含羞んでばかりゐてはか〳〵しく返事もせず、學校から歸ると、與へられた四疊半へ引籠んで、こつ〳〵と字引を引いたりノオトを取つたりしてゐた。

「隨分よく精が出ますね。この暑いのに。さあ、又、少し出かけて見ませう！」私が、こんな風に聲をかけると、ぼうと疲れたやうな眼をあげてその色白の丸顏に無邪氣な微笑を浮べて、而して素直に私のあとについて散歩に出るのだつた。從弟といふよりも甥のやうな氣がする此の少年に、私はかなり深い愛を感じた。何を話しかけても、唯「え〻」「え〻」と簡單に應答する丈で、決して自分から話しかけたりしないのが、物足りない氣もしたが、しかし、その若い鹿のやうな柔かな明るい眼附に絶對の信頼を示して、いつでもにこ〳〵としてあとについて來る晴やかな顏を見ると、私の心は非常に樂しかつた。で、私は毎晩のやうに讓吉を連れて散歩に出た。

明るい灯の下の卓に向ひ合つて、アイスクリイムなどを啜つてゐる時、ぢつと讓吉の顏や動作に見入りながら、或る感慨に耽つてゐる自分に氣がつく事が、私はよくあつた。

「大きくなりましたなあ。本當に。」と、私はきまり文句の樣にかう繰返した。「十七でしたね、たしか。」

「えゝ。十七です。」と、讓吉は既に何度も繰返した答へをして、一寸含羞笑ひをした。

「本當に早いもんですねえ。叔母様が生きて居られたらどんなに喜ぶ事か。」さう云ふ私の心には、あの不幸な叔母の生涯がそれからそれへと思ひ返されるのであつた。

叔母が最初嫁入りしたのは、村の内のKといふ町の、M——屋といふかなり大きな荒物屋であつた。其時分私は未だ五つか六つだつたが、近い處に新しい親類の出來た事を喜んで、姉などに連れられてよく遊びに行つた。叔母の夫の、恭さんといふ人は、細面の色の白い人だつたが、どうしたのか、眼の下に疵痕があつて、その爲めに片方の眼の下瞼が、べツかつこうをした樣にひきつれて、それがその顏に、笑つてゐるのか怒つてゐるのか判らない妙な表情を與へてゐた。で、最初の中はどうしても、その妙な顏をした人に親しむ事が出來なかつたが、行く度毎に、種々愛想よくもてなして、今迄誰からも貰つた事のない樣な立派な玩具を買つて呉れたりするので、すぐに私はその人が好きになつて了つた。

「べツかつこうのをぢさん！」私は戯れにかう呼んだ。而して、婢共などに、「坊ちやん、K町のをぢさんはどんな顏してました？」などと聞かれると、得意になつてべツかつこうをして見せた。婢共は皆聲を合せて笑つた。母も一緒になつてふき出したが、やがて眞顏になつて、

「圭ちやん、そんな事云ふ者ぢやありませんよ。」と小言を言つた。

これはあとになつて知つた事だが、叔母は何でも、恭さんがそんな顏をしてゐるのを嫌つて、嫁に行く迄もさんざ駄々を捏ねたといふ事だつた。そんな顏をしてゐても、恭さんは親切な、氣だてのいゝ人だつたから、夫婦仲は大へん宜かつたやうだが、姑といふのが未だ年の若い後妻で、舅との仲に出來た乳呑子を抱へてゐるといふ始末だつたから　家中の折合は仲々うまく行かないらしかつた。叔母は平常着の儘で戻つて來て、そのまゝ二日も三日も歸らずにゐるやうな事も度々あつた。三日目位になると屹度恭さんがやつて來た。而して、叔母を穀庫の蔭の處などに呼び出して、何かひそ〳〵と話すのだつた。叔母が前掛を顏にあてて泣いてゐるのを、恭さんが途方に暮れる樣な顏附でぢつと見てゐる——さういふ處を私はよく見掛けた。おど〳〵とあたりに氣を配るやうにしてゐる恭さんは、私を見つけると、それでもいつもの懷しい微笑をその顏に浮べた。而して、私が傍によつて行くと、私の頭を撫でながら、

「坊！　叔母さんはもうK町へは歸らないと云ふが、どうしようかなあ。」などと云つた。

そんな風にしてゐるうちに二三年が過ぎた。而して、肇がお腹に出來てからは、叔母ももう出るの退くのとは云はなくなつたが、肇が生れて間もなく、恭さんは熱病に罹つて死んで

了つた。

それから種々のいざこざの後、叔母は未だ乳離れもしない肇をその家に殘して、私の家に戻つて來た。出戻りの肩身を狹さうにして、一日中納戸に引込んで、針仕事などをしてゐたが、時々ヒステリイを起して、私などに當り散らした。

「何だい？　熱病！」私もこんな事を云つて罵つた。すると叔母は、本氣になつて口惜しがつて泣いた。

「まあ須うちやん。勘忍してやつて下さいよ。私が代つて謝まりますから。」などと、何時までも物蔭に泣いてゐる叔母を、おろ〳〵聲で母が慰めてゐるのを聞くと、私は自分のはしたなさが悔いられたが、しかし、叔母がどうしてあんなに直ぐ泣いたり怒つたりするのか判らなかつた。

母と叔母とは前から隨分仲が好かつた。叔母は機嫌の宜い時は、母を捕へて種々の話をした。

『お須美！　お前にや本當に濟まない、有難い！』つて、囈言のやうに云ふかと思ふと、ちやんと手を合はせて拜むまねをしてゐるんですよ。そりや私も隨分いやな世話をしましたけれどね。――何しろ、すつかり身體はきかず、熱で夢中なんですからね。」などと、涙を流

して話してゐる事もあつた。

而して、叔母は一年餘りも家にゐたが、また緣があつて、今度は川向うのE町に嫁入りした。今度の叔父さんは、恭さんよりもずつと年をとつてゐたが、矢張い〻人だつた。しかし、こゝにもかなりむづかしい舅姑があつて、叔母にしては何彼と不滿も多く、苦勞も多いらしかつたが、その中に、又、男の子が生まれた。その男の子――讓吉が生れてから、叔母は、一層K町の方に殘して置いた肇の事を思ひ出すらしかつた。

「矢張、肇と似てませうかねえ？」叔母は、抱き上げた讓吉の顏を見ながら、こんな事を云つた。

「似てゐるどころぢやない。そつくりですよ。」と、母がいふと、

「肇の方が少し鼻が高かつたやうですよ。肇はお父さん似でしたから。」そんな事を云ふ叔母の心には、最初の子に對する愛執と共に、その最初の夫に對する思慕の思ひが動いてゐた線香を上げてゐた。

何處までも亭主運の惡い叔母は、讓吉が七つになつた時に、又、その夫に死に別れて了つた。未だ三十を少し越したばかりなので、三度目の緣附を勸める者もあつたが、叔母は、「讓

吉が可愛さうだから。」と云つて、それからずつと寡婦を立て通したのであつた。
「早く此の兒が嫁でもとつて呉れるやうになれば――。姉さん、私や唯それ丈が樂みなんですよ。」と、叔母は讓吉をぎつと膝の上に抱き締める樣にして涙含み乍らこんな事を私の母に云つてゐた。亭主運の悪い叔母は、只管に子に賴つてゐるやうに見えたが、その子が――讓吉がまだ十二三にしかならない年に、叔母は肺を悪くして死んで了つた。

さうして讓吉は孤兒になつたが、祖父母の寵愛の手にすく〳〵成長して、もう今年は十七になつたのであつた。私は、讓吉の、世の中の何の不幸も知らないやうな、晴やかな無邪氣な顏を見ても、又もう一人前の男だといふ風に、何か分別臭さうな顏付をして考へ込んだりして居るのを見ても、叔母がもし生きてゐたら――と思はずには居られないのであつた。而して、

「讓吉君！　君の阿母さんはねえ――。」こんな風な調子で話しかけ度いやうな氣持になるのであつた。

讓吉は母の不幸な生涯に就て、恐らく何も知つてはゐない。或は、肇といふ異父兄のある事さへ知つてるかどうか判らない。肇のやつて來る前にせめて、肇の事だけは話して置かうか？　と私は思つたが、いや、すべてを成行に任せて置かう。默つて居て、不意に逢はせて、

二人がどんな顏をするか見てやらう――と、兎に角、私は二人の會見に或る興味を繫いで、肇の來訪を待ち受けてゐたのであつた。

肇がやつて來たのは、端書を受取つてから四五日目のとりわけ暑い日であつた。肇は洗ひ曝らしの浴衣に黑金巾の兵子帶を締めてゐた。而して、黑く日に燒けた顏に、おど〳〵と神經質らしい眼を光らしてゐた。

「二三日暇を貰つたもんですから――。私も何時迄もこんな風にしては居られないと思ひますから――。」肇は、まだ茶も呑まないうちから、非常に緊張した、せつかちな調子で始めた。今居るH町の洋品店は、此後何年辛抱して見た處で、末の見込はないから、思ひ切つて東京へでも出て來たいと思ふが――といふのであつた。

「さうですね。その方が宜いかも知れないね。だがまあ、それはゆつくり考へるとして、二三日遊んで行き給へ。」と、私は云つた。

「えゝ、さうしても居れませんが――。」と肇は大人つぽい口の利き方をして、「突然に上つて、こんな御願ひをしたりして――。別に、相談相手も無いものですから。」と云ひ乍ら、私の顏を見上げて淋しく笑つた。

肇は、慥か讓吉より三つ上の二十だが、年よりもずつと老けて見えた。目鼻立などは讓吉とそつくりと云つてもいゝ位だが、しかし、讓吉のあの明るさ無邪氣さに較べると、何といふ暗い憂鬱な顏附だらう。私は　ぢつとその顏を見ながら、此の頼りない孤兒の暗い運命に就て考へずには居られなかつた。

肇は、祖父母の手に殘されたが、祖父の後妻に小さい男の子があつたので、自然、餘計者扱ひにされなければならなかつた。それに、M――屋も、次第に左前になつて、肇が小學校の二三年になつた頃には、とう〳〵店を閉ぢて、一家を擧げて後妻の實家のあるH町の方へ出て了つた。H町の方へ出てから、肇は彼方此方へ小僧にやられたりして、かなりみじめにその少年時代を過したらしかつた。が、表面、緣が切れて居るので、父なども進んでどうしてやるといふ事も出來なかつた。父は、H町の機市から歸つて來ると、

「今日も肇に逢つたが、可愛相に、此の寒空に袷一枚で走り使ひをしてゐたよ。それでも俺を見ると、『叔父さん！』なんて、遠くから聲を掛けたつけ――餘り可哀相だから小遣を少し吳れて來た。」などとよく話してゐた。

去年の暮、歸省の汽車の中で、

「Nさんぢやありませんか？」と、おづ〳〵と聲を掛けられた時、私はそれが何人であるかを思ひ出す事が出來なかつた。

「私は、あの、M――屋の肇です。」

「あゝ肇さん、さうでしたか？」と、私は思はず眼を瞠つたのであつた。その時、肇は自分の現狀を訴へて、このまゝでゐては仕方が無い、何とかしたいのだけれど――と云つて、遠慮勝ちに口籠つたが、私が、何時でもやつて來給へ、何とか相談に乘らうから――と云ふと嬉しさうにうなづいてゐた。而して　それから二三度、簡單なハガキを吳れたが、漸く、今日、かうして出て來たのであつた。

聞けば、唯一人の親身の祖父さへつい近くに死んで了つたのださうだ。父も無ければ母も無く、何人一人頼りになる者の無い孤兒の彼が最後の藁のつもりで縋り附いて來たのだと思ふと、私も是非どうにかしてやらなければならないと思つた。

堅く坐つてゐるのを寛がせたり、冷い飲料などを薦めたりしてゐるうちに　讓吉が歸つて來た。

「唯今！」一寸片手を疊について、さう、閾越に挨拶しながら、素早く肇を認めると、讓吉は、

「あ！」と大きく叫んだ。

「譲吉さんですか！」と、肇も驚きに我を忘れたといふ風に、「あなたはこゝに來てゐるんですか？」と彈んだ調子で問ひかけた。

「え？　十日ばかり前から？」

「さうですか？　こゝに居たんですか？」

この二人の、もう十年も前から知つてゐる樣な心易さうな態度は、私には全く思ひがけないものだつた。私は、すつかり裏切られた樣な、出し抜かれた樣な、而して一寸てれた氣持を感じながら、

「やあ、もうよく知つてるんですか？」と云つた。

二人は、一寸私の方を見たが、顏を見合はせて微笑した。

「もうすつかり仲好しになつてるんですね。油斷が成らないなあ。」と、私は聲をあげて笑つたが、何だか瞼が熱くなるやうな氣がした。

二人共無口の方なので、餘り話などしなかつたが、それでも時々ちらと見合せる眼の中には、深い親しみの表情が見られた。

「譲吉さんは師範學校へ行つて、學校の先生になるんですか？」と、肇が、思ひ出した樣にして問ひかけると、

「えゝ。先生なんかになり度くないけど。おばあさんが、兵隊にやるのをいやがるもんですから。」と、譲吉は、はにかみながら答へた。

こんな風に、ぽつり〳〵とだが、いかにも親しさうに懷かしさうに話し合つてゐる二人を見ると、私は深い歡びを感ぜずには居られなかつた。

「矢張、兄弟だなあ。ほんとによく似てゐるねえ。」私がかういふと、肇は、

「そんなに似てゐませうか？」と、自分の頰を撫でて見ながら、譲吉の顏をぢつと眺めた。

「似て居るとも。瓜二つだよ。――で、一體何時から二人は兄弟だつて事を知つてゐたんですか？　僕は、未だ知つてないかと思つたのですよ。」と、私は笑ひながら聞いた。

「私が十三の年です。」と、今度は譲吉が云つた。「その前からも兄さんがあるつて事はうすうす知つて居ました。けれど、阿母さんの口からそれを聞いたのは十三の年、阿母さんが死ぬ少し前です。」

「私は、別に阿母さんがあるといふ事は子供の時から知つてました。弟のある事も、いろいろ人に聞いたりして知つてました。」と、肇は沈んだ調子で云つた。

「で、はじめて逢つた時、どんな氣がしました？」と、私は二人の顏を等分に見ながら聞いて見た。すると譲吉が、何か云はうとして、口を動かし殆めた時、肇が口を開いた。

「はじめて、讓吉さんに逢つたのは、私が主人の用でS驛へ云つた時です。私は自轉車でE町を通つたんですが、阿母さんが玆に居ると云ふ事は前から知つてましたから――えゝ、誰も阿母様の事を私に話して呉れませんでした。をぢさんや、おばさんも些(ちっ)とも話しては呉れず、うちのお父さんや、阿母さんは、お前の阿母さんはもう死んで了つたんだと云つてました。」と、肇はある感激に鼓舞されたやうに、非常に雄辯な調子になつて續けた。(をぢさん、をばさんと云ふのは私の兩親の事であつた。お父さん、阿母さんといふのは、彼の祖父母を、さう呼んでゐたのだつた。)「――けれども私は阿母さんがE町にゐることはよく知つてゐました。弟が一人あるといふこともよく知つてゐました。で、その時、自轉車から降りて、E町を一軒々々片端からのぞき込む樣にして歩いてゐると、その時、ばつたりと讓吉さんに逢つたのです。」

「あの時、僕は學校からの歸りだつた。Y――といふ家は何處だと聞かれて、僕の家がY――だといふと、肇さんが、僕の顏をじろ〳〵と見て、ぢやあ君は？　つてんでせう。僕も、すぐ氣がつきました。」と、讓吉が云つた。

「その時あ、もう阿母さんは死んでゐたんです。僕は、とう〳〵阿母さんの顏を知らずに了ひました。――何時か屹度逢へる時があると思つてたんですが。」と、肇は、淋しさうに笑つ

たが、少ししてから

「でも、どうして皆、あんなに祕密にしておいたんでせう。――而して、一體阿母さんは、少しは僕の事も考へて居て呉れたんでせうか？」さう云つてぢつと私の顏を見た肇の大きな眼には、涙が一ぱいたまつてゐた。

「そりや、考へてゐたとも。」と、私は云つた。

「さうでせうか？」と、肇は不服さうに云つた。

「そりや、考へてゐたとも。」と繰返して云つた私の心には、一つの記憶が浮んで來た。

「君は、未だ覺えてゐるかも知れないがね。たしか君が六つ位の時の事だよ。」

私は、それを肇に語らうとして、かう口を切つたが、しかしどうもうまく話せさうも無いのでそのまま口を噤んで、自分一人の思ひ出の中に浸り込んで了つた。それは私が、尋常四年位の時だつた。叔母は四つになつた讓吉を連れて、泊りに來てゐたが、その時も母と肇の事を話し出して涙をこぼしてゐた。

私はそれを見て、どうにかして、肇を叔母に會はせ度いと思つた。私は毎日學校へ行く時、M――屋の前を通つてゐたので、その店先やまたその店の前の四辻の柳の樹の下などで、大勢の子供に交つて遊んでゐる肇をよく見かけた。

「肇さん、いゝもんをやるから來ないか？」かう私が聲をかけると、いつも物欲しさうに淋しさうにしてゐる肇は、すぐ私のあとについて來た。K町から私の家までは十町餘りもあつたので、肇は道の半ばで歩きくたびれて、もう歸ると云ひ出した。私は種々にすかしなだめて、とう〳〵私の家の前まで引張つて來たが、肇は、あまり遠くまで連れて來られた心細さから、しく〳〵と泣き出してゐた。

私は家に入るや否や、

「叔母さん！　叔母さん！」と勢ひよく呼びかけた。

「叔母さん、肇さんを連れて來ましたよ！」

叔母は、それを聞くと顏色を變へた。

「え、肇を連れて來たつて、本當？　どこにゐるの。」

その時、緣側のところで肇の泣く聲がした。園爐裏緣で、讓吉に乳を含ませてゐた叔母は、思はず立上つて、障子際の方へ走つて行つたが、ふと思ひ返したやうに、ばた〳〵と納戸の方へ逃げ込んで了つた。叔母の不思議な振舞に呆氣にとられた私は、「叔母さん、叔母さん」と小聲に呼びながら、叔母の跡について行つた。叔母は、荒々しく讓吉を投げ出して、納戸の隅の長持の上に突伏した。而して、激しくすすり上げた。

「もう忘れちまつてゐるんだから——すつかり、緣は切れちまつてゐるんだから——。」さう云ひながら私を見た叔母の眼は、きら〳〵と光る涙の底に憤る樣な表情があつた。

「それどこぢや無い、私は苦勞で一ぱいだ。圭さん、後生だから早く歸しておくれ、そんなおせつかいはしないでお呉れ！」

すゝり泣の隙から途切れ〳〵に叔母はさう云つた。私の折角の心づくしは、唯、おせつかいに過ぎなかつたのか？　私は腹が立つた。おまけに、私は、母にまで散々叱られた。而して、すぐに肇を連れて戻らなければならなかつた。しく〳〵と泣き止まない肇を背負つて、K町への道を歩きながら、私自身も口惜さの爲めに泣いたのであつた。

私は、今、肇を前にして、其時の事をはつきりと思ひ浮べた——。妙に悲しい氣持になつて來た。

私はその氣持を紛らす爲めに、ついと立つて便所に入つた。用を濟まして、手水を使つてゐると、何かしきりに話してゐる二人の聲が耳に入つた。

「……つもりなんですか？」と、讓吉が無邪氣な調子で何か問ひかけた。

「うん、そりや僕だつて考へてゐるんですよ。僕だつて、これでいろ〳〵と考へてゐるのさ。」肇がいかにも兄らしい調子で言つてるのが、思はず私の涙ぐましい眼に微笑を浮べさ

せたのであつた。

或るタの事（五年六月）

小さい活字や原稿の文字に疲労した眼と頭とに、夕暮の巷の人の往來(ゆきき)や話聲(はなしごゑ)やを、見知らぬ國にでも行つたやうな物珍らしさにぱツと映しながら、自分は家に歸つた。表の戸はしまつてゐた。がたごとと開けてはひると、机の上に、「お歸りになつてからと思ひましたが晩くなるから、一寸行つてまゐります。」と原稿紙の端に書いたのが、唯一枚戸の開けてある部屋の薄あかりに、先づぼんやりと眼に入つた。

戸を開けて了つたが、もう隅々は薄暗い。越して來て未だ間もないので、肌に馴れない家の内の空氣は、冷たい微くさいにほひをあたりに漂はしてゐる。茶の間の方には、夕飯の支度が箸をとるばかりにしてあつた。強ひられた役目のやうに、其前に坐つて喰べはじめたが、喰べてゐる中に、何とはなしの一種の哀感が心の底から湧き出して、理由もなく箸を捨てさせて了つた。これは珍らしい事ではない。物を喰ふといふ事は何よりも悲しい事だ——とは、自分の今迄にも度々經驗した心持である。物を喰ふといふ事より悲しい事はない——と、直覺的に唯感じた事を、自分は例の癖で、理窟の方から吟味して見るやうにしながら、縁先に立つてぼんやりと荒れ果てた庭先を眺めた。越して來た當座は花を買つて來て植ゑたりなどして見たが、此頃は忙しさに追はれて、唯草の繁るに任せてある。ゼラニヤムの眞紅なのが、みだらな慾情をだらしのない笑に崩し、紫の褪せた矢車草がけちな己(おのれ)を小さい花に

守つてゐる外、花も無いやくざな草が小さい庭をつき破らうとでもするやうに亂暴に繁つてゐるばかりだ。無秩序な、色彩の貧しい此の庭にも、矢張自分の心の姿が見られるではないか。

自分は、縁端にうづくまつて唯ぼんやりとしてゐた。すると、酒井の森で鳴く茅蜩(ひぐらし)の聲が、幽かに聞えはじめた。夕暮の、水のやうに澄んだ空氣を小さい波に震はして、かな〳〵と鳴く其聲を耳にした時、自分は、あゝ東京でも茅蜩が鳴く——と思つた。而して、いつにない靜かな心持で其の音に聞き入つた。あゝ、自分は幾年振で茅蜩の聲を聞いたらう。

ぢつと耳を濟ましてゐる中に、しみ〴〵と湧く哀感が殆んど抑へきれなくなつて了つた。立上つて狹い家の四つしかない室々を歩き廻つて見た。而して一寸机の前に座つて見たが、又縁先に出て暮れ行く庭に對した。心は又靜かになつた。いつにない斯の靜かな心持は、いつになく種々の事を思ひ出させた。何の波瀾もない極めて平々凡々の半生ではあるが、それでも感慨深く思ひ返さるゝ事が無いではなかつた。追懷(おもひで)から我に還つた時、自分は、今更のやうに自分といふものを振返つて見た。

東京へ來て、こんな處へこんな小さな巣を拵へて生きてゐる——と思ふと何とはなしに一種の深い哀みをが感じられた。何の裝飾もなければ家具もない、がらんとした空屋のやうな

此家、これが自分の家なのだ。これより外に自分の家といふものは無いのだ。さう思ふと、いつものやうに、自ら嘲つたり、罵つたりする餘裕もないほど、深い悲みに打克たれて了つたのである。

もう闇の濃くなつた室の片隅に、妻の背負揚が、藏ひ忘れられてあつた。其の紅い色が、荒凉たる室に僅かに一點の溫味を與へてゐた。ふと、それに眼をとめた時、自分は、今頃、混雜な電車の片隅に肩をすぼめて坐つてゐる妻の姿が眼に浮べられた。

こんな處へこんな小さな巢を拵へて生きてゐる——その相手があの女なのだ。さうだ、「あの女」なのだ。自分は此時はつきりと、「あの女」を客觀して見た。妻といふ意識に溺らされ盲目にされたその觀念からはなれて、唯一人の女性、唯一個のソールとして妻を思つて見た。不思議な因緣といふやうな事が心に浮ぶ。人間と人間との關係といふ事が、今更のやうに不思議な神祕的なものに思はれる。「一河の流、一樹の蔭」といふやうな言葉のもつた意味が、限り知られぬ深みに想ひをさそふ。而して「緣」といふものゝの不思議さが、やがて「生」そのものゝ不思議さに思ひをうつして行つた。若しそこに彼女が居たなら、自分は斯う云つて彼女を驚かしたであらう。

「おい、お前は何人だ？　而して一體この俺は何者だ？」

自分はかなり長い間、うすら寒い此夕を多くの街の人の中にしよんぼりと交つてゐる妻の姿を強く心に浮べて居た。其姿は蠶が繭につゝまれるやうに、いつの間にか、濃厚なあはれみの感じにつゝまれてゐた。——果敢ないわびしい斯うした生活をも、別に果敢ないともわびしいとも思はず、新しい家庭の營みにいそ〳〵としてゐるやうな「彼の女」。此の自分でもあてにならぬやうな自分を、世界に於ける唯一人と信じ手賴つて、それで安心してゐるやうな「あの女」。何といふ不憫な、あはれなものであらう。

自分の心の中は、その一人の女性に對するあはれみで一ぱいになつてゐた。

父

（九年九月）

冬の或る日。久振りで村へ歸るその途上での事であつた。

野の中の小さな停車場で汽車を捨てたが、生憎、俥が一臺も無かつたので、少し歩いて、街道まで出て、そこの茶店で馬車を待ち合せた。

やがて、凸凹道をがた〳〵と搖れ乍ら馬車がやつて來た。私はそれに乘込んだが、前から乘つてゐた、たつた一人の乘客に眼を止めると、

「あ、Mさん！」と思はず聲をあげた。

背を丸くして、連りに本を讀んで居た對手は、吃驚した顏をあげて、しばらくは、私が何人であるかを思ひ出し兼ねたやうにその鈍い眼をおど〳〵と動かしてゐたが、

「あゝ。Kさんでしたか。これは、御久振りで――。」と云つて　中腰に立上つて、

「其後は。」と、慇懃に挨拶をした。

「近頃は？　何方へ？」と、私は對手の樣子をまじ〳〵と打成りながら斯う問ひ掛けた。黑い筒袖羽織の鼠色に化けかゝつたのを着て、褶のなくなつたよれ〳〵の千筋の袴を穿いて、だらしなくはだけた胸元から垢染みた莫大小の襯衣の釦のとれた襟をうそ寒さうにのぞかせて、古ぼけた紫色の書包みを膝の上に載せてゐるその樣子は、十年前のMさんそのまゝであつた。

「近頃はH村の方へ出て居ります。はッ。」と、Mさんは答へたが、改まつて物を云ふ時、吃度、云つて了つたあとへ、「はッ」と附け加へる――而して、「はッ」と云ひ乍ら、持前の猪首を一寸前に突出して、くしやと眼を瞑つて、眼の周圍から頰にかけての筋肉をぴくりと動かすあの妙な癖も、昔見馴れた通りであつた。が、よく見ると、そこに十年の老いは爭はれなかつた。「八角時計」などと綽名された、顴骨の張つた巖疊な顏に、毛蟲のやうに濃い眉や、小鼻の怒つた鼻梁の短い鼻や、口の周圍から顎にかけてのごは〳〵とした鬚やが、脊丈は低いながらに、肩幅などの廣いがつしりとした身體附と相俟つて、何か野の獸にでも見る樣ないかにも精力的な印象を與へたものだが、今は、小鬢や、鬚にも白髮が交り、眼の下や口の周圍の筋肉にも弛みが出來て、全體の樣子に、ひどく疲れたぼんやりとした風が見えた。

「H村？　それは大へんですね。H村といふと二里の上もあるでせう。」

「二里半はありますな。はッ。」さう云つて、Mさんは、少しの間押默つてゐたが、

「今日、東京から御歸りで――？」と、遠慮つぽい言葉附で問ひかけた。

「はあ。一寸用事が出來たもんですから。」

「もう、東京へ御出かけになつてから何年になりますかね？」

「さあ、彼是十年になりますよ。」と私は云つた。

「十年　もうさうなりますかな。――ですが、あんたなどは、結構ですな。東京の方では、大分御盛んのやうで。」Mさんは無器用な調子でぽつり〳〵とこんな事を云ひ出した。「御盛んのやうで。」には、私も閉口した。で、苦笑しながら、

「いゝえ。不相變、だつが上らないで困りますよ。」と云つた。

「いや、誠に結構で――。」と、Mさんは初めてその顏に薄笑ひを浮べて、

「私などこそ不相變で――何時まで經つてもみじめなものです。」と云つたが、その言葉にはいかにも心の底から打嘆くといふやうな調子があつた。

「それでも、いつも御元氣のやうで、宜う御座いますね。」

「いえ。もう近頃はからツきし駄目ですよ。毎日二里半の往復は、なか〳〵骨が折れてね、時々、この馬車を奮發するんですが――。」

Mさんは、次第に打解けた調子になつて、村の事や、村の學校の事などを種々と話して吳れた。

「村でも物の判つた人は皆外へ出て居るんで、役場の事でも學校の事でも、もう滅茶苦茶でさあ。」Mさんは、種々の話の後に、かう云つて力なげな笑ひを浮べた。その悲みともつかず嘲りともつかない笑ひの中に、私は、人の好いMさんのやりどころのない不平を見た樣に思

つた。

「隨分わからずやの多い、難かしい村ですからね。――自村よりも、他へ御出になつた方が結句呑氣で宜いでせう。」と、私が、慰めるつもりで、こんな事を云ふと、Mさんは、

「えゝ。そりやさうですがね。――しかし、何處へ行つても私のやうな老耄はもう駄目ですよ。何處へ行つても邪魔者扱ひにされましてな。」と云つて、「えへ、えへ。」と氣の抜けた笑ひ方をした。

がた馬車は、徒にがた〳〵と搖れるばかりで、行程は仲々捗らなかつた。夕風が立つて、桑の枯葉ががさ〳〵と騷々しく騷ぎ出した桑圃の中を、凸凹の石ころ道は長く〳〵續いた。すこし話す中に私達の間には、もう話が無くなつて了つた。で、少しの間手持無沙汰に對ひ合つてゐたが、やがて、Mさんは、そのニッケル緣の眼鏡を一寸掛け直して、膝の上の書物をとりあげた。丁度、此方向きになつてゐる書物の表紙を見ると、「粟田松露著、戀の命」といふ標題だつた。それを見ると、私は思はず微笑した。

十年前、私はMさんと同じく村の學校に勤めてゐたのだが、その時分よくMさんと喧嘩した事がある――といふのは、私はその時分から大へん文學好きで、暇さへあれば小說ばかり讀んでゐた。田舍の小學校教員などといふ者は殺風景なもので、小說本などは士君子の手に

す可からざるものと考へてゐる者ばかりの中に、ひとり、私と同じく小説の愛讀者にMさんがあつた。が、Mさんの小説は、私の小説とは大分違つてゐて、例へば、「不如歸」とか「乳兄弟」とか「伯爵夫人」とか――なら未だいゝが、その頃學校でとつてゐた縣下の某新聞に連載の、名も無い駄作家の駄小説などを毎日新聞が來るのを待ち構へて貪り讀むのであつた。而して私が其頃愛讀してゐたT――といふ大家の短篇集などを讀みたいといふから貸してやると、

「どうもつまりませんな。自然主義とか云ふんでせうが、――どうも自然主義は感服しませんな。」などと、判りもしないくせに、尤もらしい事を云つては、自然主義攻擊などを始めるのだつた。どうせこんな男だから――と思ひ乍らも、私は何だか腹立たしい氣がした。而して、外の人々から、小説好きといふ點で、自分とMさんとを同じ仲間か何かの樣に見られるのを、堪らなく不愉快に思つた。それにしても、Mさんのやうな、粗野な、むくつけな人が、戀だとか　失戀だとか、美しい少女の運命だとか、そんな事に心からの同感を寄せ得るやうな、初々しいセンチメンタリズムをもつてゐる事が、何とも云へない不調和な、滑稽な事に思はれてならなかつた。

「實際、人は見かけによらないもんですねえ。Mさんは、これで多情多恨といふ處があるんですからねえ。」

「多情多恨は宜かつたねえ。はゝゝ。Mさんには、大へんな物語（ロマンス）があるさうぢやありませんか。一つ、どうです。聞かして呉れませんか？」

若い仲間のEや「Sから、こんな風に揶揄はれると、Mさんは、ぽつと顏を赤くしてもぢもぢして、「えへ、えへ。」と笑つてゐた。

Mさんは、十六七歳の時から二十幾年もの長い間教師をしてゐたが、正式の師範學校を出て居ないので、資格は尋常科のしかなかつた。郡の中でも非常に山奥の方の、東京にさう遠くない處にあんな處があるかと驚かれるやうな邊鄙（へんぴ）な山の中で久しく教鞭をとつてゐたが、私が高等三年位になつた時、私の村の小學校に轉じて來た。その時はもう三十過ぎてゐたが未だ獨身であつた。ところが私の村に來ると間もなく、或る百姓の家に入夫して、學校へ出るのは寧ろ内職かと思はれる位に、百姓仕事の方に身を入れた。家に歸ると、すぐにぼろぼろの野良着に着換へて、鍬を擔いで出かけるといふ風だつたので、小さい生徒からさへ馬鹿にされてゐた。私達上級生は、てんで先生とさへ思つてゐないといふ風だつた。

その後、私も小學教師といふものになつて、村の學校に教へに出る樣になつたが、その頃はMさんはもうかなり古顏（ふるがほ）になつてゐた。しかし、不相變、仲間から馬鹿にされてゐた。M

さんは、何を云はれても、「えへ、えへ。」と笑つてゐたが、時とすると一理窟捏ねて見る事が無いでもなかつた。何しろ古顔といふ點では郡の中でも屈指の方なので、その點でかなりの誇りを持つてゐるMさんは、誰も知らない遠い昔の事を持出したりして、一かどの見識を見せようとする事があつた。それに、Mさんは、これも矢張教員氣質といふのか妙に階級的觀念が強くて、自分より上の者には絶對に從順で、無器用な言葉附で下手な御世辭の一つも云つて見るのだつたが、下のものには一寸威張つて見せるやうな處があつた。私などは、遲刻してはよくMさんに諷刺などを云はれた。實際Mさんは大へん規帳面で、出勤退出の時間など毎日々々版で捺したやうに一定してゐて、缺勤する事などは、ついぞ一日も無かつた。が、養蠶期になると　夜晝なしの勞働に疲れが出ると見えて、教壇の上でこくり〳〵とゐねむりをして生徒に笑はれたりする事がよくあつた。

「何しろ、わしは婿なので――どうも骨が折れます。」

Mさんは、その持前の薄笑ひをしながら、こんな事を云つてはこぼす事もあつたが、何でもMさんのお上さんはなか〳〵のしたゝか者で、Mさんを小僧か何かのやうにこき使ふといふ事だつた。人の好いMさんは、お上さんの云ふ事は何でもはい〳〵ときいて、骨身を惜まずに働いた。「本當に、とんだいゝお婿さんだ。夜晝稼いで金を溜める。」などと近所の誰彼は、半ばは嘲るやうに、半ばは心から感心して噂をしてゐた。お上さんは、どんな人だか、私は見た事は無いが、何でも身體の大きな、色の黑い、Mさんと何方とも云へないほど醜い女だと云ふ事だつたが、Mさんはすつかりそのお上さんに參つてゐるのだなどと噂されてゐた。

とにかく、Mさんは、なか〳〵女好きらしかつた。時々、そのぽつり〳〵とした言葉附で思ひ切つたエロチックな事など云ひ出して、若い女教師の顔を眞赤にさせたりする事があつた。

「いやですよ！　Mさん！」などと、Mさんと机を並べてゐるNといふ女學校出の女教師が不意に叫び聲を立てる事などがあつた。「Mさんたら、不意に手を握つたりなどして――。」

事務室中がどつと笑ひ出す中に、Mさんは一寸顔を赤くして、にや〳〵と笑つてゐた。

ところで、Mさんには一人の男の子があつた。三之助といふ名で、その頃尋常三年位だつたが、なか〳〵の腕白者で、いつも受持教師の持餘し者になつてゐた。矢張顎の四角な、鼻の低い、Mさんそのままの顔をしてゐたが、學課の方の成績がよくないばかりでなく、大へん行儀が惡くて、始終立たせられたり、留置にされたりした。が、三之助は一向平氣で、逞しい顏をふて〳〵と膨らしてゐるかと思ふと、人を馬鹿にしたやうに笑つたりしてゐた。

父

「本當に憎らしいつたらない！　てんで此方を馬鹿にしてゐるんだから。」と、その級を受持つてゐる若い女教師のNは、Mさんにあてつけるやうに、こんな風に云つた。留置にして教場に立たせて置くと、勝手に歸つて了ふといふのであつた。すると、首席訓導のHといふ若い師範出は、「よし！　僕が一つ叱つてあげる。」と云つて、應援に行つたが、やがて三之助の襟首を捕へて荒々しく職員室へ引摺つて來た。而して、

「さあ、此處に立つて居ろ！」と云つて、自分の事務卓の傍に立たせた。Hの事務卓とMさんの事務卓とは向う前になつてゐるので、Mさんは否でも應でも、立たせられてゐる自分の息子と鼻を突き合せなければならなかつた。その時のMさんの恐縮した樣子といふものは無かつた。赤くなつて、おど〳〵として、くしや〳〵と眼を瞬いたり、手を押揉んだり、袋を被せられた猫が袋の中でやるやうな表情をするのであつた。皆、それを見て、くす〳〵と笑つた。別に惡氣は無い男だが、かなりの茶目公であるHは、そのいたづら〳〵した眼をくる〳〵とさせて、短い髯をひつぱりながら、

「どうしてさうお前はよくない事ばかりするんだ。叱られても叱られても性懲りもなく！　もうお前は先生が叱つたのぢや駄目だ！　そこに阿父樣が居られる。少し阿父樣に叱つて貰へ！」

Mさんが、もう居ても立つてもゐられぬといふ樣子をすると、Hは益々興に乘つて、

「本當にお前の樣な奴つたらない。物のあはれといふものを知らないのだから――。」などと云ひ出すと皆、もう堪らなくなつて一度にどつと噴き出して了ふのだつた。「物のあはれ」といふのはMさんのよく言ふ言葉で、Mさんは、人間は物のあはれといふものを知らなければ駄目だなどと、時々鹿爪らしい顏をして若い女教師などに說教して聞かせる事があつた。Mさんが、新聞の續き物の一回を讀み終つて、ぼんやりとした顏附でその甘い(?)物思ひに耽つてゐたりするのを見ると、「Mさん、また物のあはれですか？」などとよく冷評かしたものだが、――Hは、今それを云ひ出したのであつた。三之助は、「へんな事を云ひ出したものだ。」といふやうな顏をして、團栗の樣な眼をきよと〳〵と動かして、皆の視線の集まつてゐる親父の方を見た。するとMさんは、片手に鉈豆の煙管と煙草入とを摑んで、その猪首の丸い背中を見せながら、狐鼠々々と廊下の方へ逃げ出して了ふのであつた。

こんな事が、怠屈な單調な職員室の眠氣ざましの爲めに度々繰返された。三之助は、初めの中は職員室などに引つぱり込まれて、流石に一寸弱つた樣に見えたが、二回三回と度重なると共に、次第に平氣になつて、しまひには、大威張で引つぱられて來た。

それを見ると、Mさんは、「又か！」といふやうな顏をして、見る〳〵赤くなつて、くしや

くしやと瞬きを始める、手を揉み出す――而して、恨めしさうな、哀願するやうな、そんなに私を苦めて呉れるなといふやうな眼附でおど〳〵とその息子の方を見るのだが、三之助はいゝ氣味だと云はないばかりの、勝誇つたやうな顏をして、傲然とその親父の前に突立つてゐるのだつた。

實際、三之助の太々しさには、皆呆れるより外無かつた。あの小心な、好人物のMさんに、どうしてあんな子が出來たのか？　顏附などは、そつくりその儘似てゐるのに――と、皆不思議に思つたが、つまり、三之助は母親似で、手におへない悍婦だといふMさんのお上さんの血をそつくり享けて來たのらしかつた。ある時、Mさんは、額に滲む汗をこすり〳〵、眞面目な調子で私にこんな事を話して聞かせた事があつた。

「いやどうも困りますよ。いやどうも、わしもあれにや困りますよ。てんで私を馬鹿にしてゐるんですからね。いくら叱つても糠にかすがへで些とも利かないのですよ。思ひ切つて仕置をしようとすると、また明日學校へ行つて惡い事をしてやるぞ――なんて云つて。わしを困らせる爲めにねたをするんですからね。――困りますよ。いやどうも、困りますよ。いやどうも。」さう云つて、Mさんは腹のどん底から大きな溜息をした。――が、それを聞いても私は、氣の毒といふよりも、矢張滑稽な感じの方が先に立つて、

「それはどうも困りますね。ですが、三之助氏、なか〳〵快男子ですね。」などと云つて笑つてゐた。

――私は、がた馬車に搖られながら、それからそれへと昔の事を思ひ出してゐたが、氣がついて見ると、Mさんはこくり〳〵と居睡りをしてゐた。而して膝の上の「戀の命」が、危く下に轉げ落ちさうにしてゐた。

家に歸つて、その翌日、私は町の方へ出かけて、久振りで舊友のFを訪ねた。Fは、もう今では止めてゐるが、十年前、私と一緒に學校に出てゐた男だつた。いろ〳〵の話の後に、Mさんの事が話題に上つた。

「Mさんも可哀さうに。」Fはこんな調子で話し出した。Mさんは、もう二年勤めれば、勤續三十年で、廢めてもかなりの額の恩給がつくのに、餘りに老朽だといふので、一昨年免職になつて了つた。一年程、家に居て百姓仕事を專念にやつてゐたが、去年の秋から代用教員になつて、前よりはずつと安い月給で、H村の方へ出てゐるのだといふことであつた。それからFはこんな事を話した。五六年前、Mさんのお上さんは亡くなつた。而してMさんは、若い後妻を迎へた。その女は、Mさんの家の近所の機屋に奉公してゐた女で、少し拔けたや

うな處はあるが、色の白い一寸美い女だつた。Mさんは大へんな御執心で、F村のその女の家まで御百度を踏んで、やうやくお嫁さんに貰ふ事が出來たのださうであつた。

「どうして、Mさん、あれでなか〳〵盛んなもんだつたのさ。何しろ花婿のやうな氣になつて、その當座はきれいに髯などを剃つて、學校でも皆にひやかされると、にや〳〵と得意さうに笑つてゐたつけ。そのお上さんも、『あんな爺さんはいやだ。』などと云ひながらも、Mさんが舐めるやうに可愛がるし、それに何しろ先生の奥様になつたんだから機織女にしては出世なんだからね、まあ機嫌よく暮らしてゐるらしかつたよ。あの時分がMさんの黄金時代だつたんだね。」と云つて、Fは笑つた。

「ところがね。」と、更に、Fの語る處によると、その中にあの三之助がいゝ若衆になつて來て、今年はもう二十か二十一だが、昔から、親父と仲惡の三之助は、親父が若い女房など持つてゐるのが氣に喰はぬと見えてひどく親父を痛めつけるのだ。親父が身を粉にして稼いで溜めた金を盗み出しては、町の淫賣などにつぎ込んだりして、少しでも意見がましい事を云ふと、腕力でやりこめたりする。が、Mさんは、若いお上さんを持つたりして、弱身があるので、どんなに息子に傍若無人の振舞をされても、何ともいふ事が出來ない——。

「本當に可哀さうだよ。それに近頃はMさんもすつかり老い込んで了つたんでね。」と、Fは

笑ひながら云つた。

「さうだね。もうすつかり弱つてゐるね。もう五十を越えてゐるんだらうからね。」

「面白い話があるんだよ。」とFは更に言葉をつゞけて、「何でもね、あの三之助の奴、Mさんの貯金をすつかり持出して了つて、もう持ち出すものがないので、此頃ぢや、毎晩々々用もないのに、十二時までも一時までも起きてゐて——。」と、面白さうな調子で話すには、三之助はMさんが冬中の燃料にと掻き溜めて置くくづ(落葉)を一晩の中に、皆どん〳〵と燃して了ふのださうだ。で、Mさんは、「困つた、いやどうも。困つた、いやどうも。」と泣き面をしい〳〵、一日學校勤めで疲れ切つた身體に籠を背負つて出かけては、又、せつせと掻き溜める。すると、三之助は待ち構へてゐて、あとから〳〵とせつせと燃して了ふ——といふのだ。

Fはこの話をして、

「三之助の奴、つまりねたをするんだね。」と云つて大きな聲で笑つた。ねたといふのは、何か氣に喰はぬ事がある時、故意に人困らせをする事をいふ私の地方の方言なのである。

「はゝゝ。そいつは面白い。」と、私も聲を合せて笑つた。が、昨日久振りで見たMさんの、すつかり老い込んだ、いかにも疲れ切つたらしい樣子を思ひ浮べると、妙に笑へない氣がして來た。而して、十年前、三之助に弱らされてゐたMさんの、あのみじめな顏附をはつきりと

思ひ出した。あの時分は面白半分に、私もよく三之助を引張つて來て、Mさんの前に立たせたものだが、今考へると、つく〴〵と悔いられるやうな氣がした。

「Mさんも樂が出來ないなあ。」と私が一寸暗然とした氣持になつて云ふと、「本當だ。あのいゝ人が、またえらい子供をもつたものさ。」と、Fは、心からをかしさうに笑ふのであつた。

平凡非凡

（九年三月）

一

年の暮近くなつてから臨時に引受けた仕事の爲めに、壯吉は毎晩續けて夜更かしをしなければならなかつた。仕事といふのは、煩瑣な乾燥な、殆ど筋肉勞働に近い機械的の書き物だつた。彼は時々、ペンを書きかけの原稿紙の上に叩きつけて、その儘仰向にひつくり返つて、まじ〳〵と天井の隅を見まはしたりなどした。

山の手の町は靜かに更けて、時々、近くの街上を駛る電車の音が、一種の燥音をなして響いて來た。丁度、大勢の人が聲を合せて叫んで居るやうなその音は、或時は勇ましい喊聲のやうに聞えた。或時は難破船の上から援ひを呼ぶ悲鳴のやうに聞えた。風の加減で、高くなつたり低くなつたりした。全く聞えない夜もあれば、しツきりなしに耳につく夜もあつた。勿論、それは風の加減ばかりでは無い、こちらの氣分の加減で、聞えたり聞えなかつたりするのでもあつた。——苦しい仕事で疲れ切つて、疊の上に組合せた掌の上に仰向に投げ出された頭には、それは強く響き寄せる聲で無ければならなかつた。時々彼は、頭の內部に幻覺として鳴り渡つてゐるその聲を聽く事もあつた。彼は、かなり強い神經衰弱にかゝつてゐるらしかつた。

もう一息と、懶い身體を机の前に立て直して、その棍棒よりも重いペンを、インキの滲み附いた指先に執りあげた時であつた。白井が尋ねて來た。

白井は座につくとすぐ、

「御忙しさうですね。一寸御邪魔にあがりました。——長瀨の細君が郷里から出て來ましてね。」と云つて、壯吉の顏を見て微笑した。相手の驚きを待構へるやうな、一寸得意さうな表情が、その人の好い微笑を湛へた眼の中にあつた。

「長瀨の細君が？　長瀨に細君があつたんですか？」

「あつたんですよ。しかも、子供まで。」

「へえ？」

「此の五月に生れたのださうです。實際、私も驚きました。」

「で、何時細君なんか貰つたんでせう？　長瀨の細君なんて、一體どんな人です？」

「どんな人だか未だ會ひませんがね。何でも——。」と、白井の語る處に據ると、長瀨が本郷の安下宿にごろ〳〵して居た頃、その下宿の隣に彼女の姉聟の家があつて、彼女はそこに寄食して裁縫學校に通つてゐるうち長瀨と知合になり、それからまあ戀みたやうなことをして

一緒になつた。それは去年の春の事だつた。而して、長瀬が食ふに困つて東京の町ぢゆうを轉々してゐたそれからの間を、細君は、靜岡縣の方の實家に歸つて居たのだが、いつ迄さうしても居られないので、つい三四日前にそこで生んだ子供を背負つて東京に出て來た。ところが、丁度それが宿から立退きを迫られつゝあつた際だつたので、流石の長瀬も非常に弱つてしまつた。昨夜は一晩中夫婦して寒風に晒されながら町中をうろつき歩いたといふのであつた。夫婦は兎も角、そんな事をしてゐては赤ん坊が可愛さうだといふので、白井夫婦が心配して、今日一日がゝりで同じ區内のこゝからすぐ近くのところに貸間を探して、借りる事にしたのだが、前金に置く間代が出來ない――。

「で、あなたに御願ひに出たわけで。なあにたつた五圓ばかりあればいゝのですよ。」と、白井は自分の事のやうに、言ひにくさうにして斯う賴むのであつた。

「その位なら――。」壯吉は承諾しないわけに行かなかつた。あの仙人のやうな長瀬がいつの間にか女房や子供をこしらへてゐたといふ事實は實際意外に感ぜられた。而して、今までうまくだまされてゐたやうな氣がして一寸不愉快な氣もしたが、しかし、それが長瀬である丈に、何となくとぼけてゐて愛嬌があるやうにも思へた。あの長瀬が、顏を斜めに上げてぢつと空を睨めるやうにして、(吾れェ吾れェはア)と妙に節をつけて、(唯、靈に生きるのです。

肉體に囚はれてはなりません。)と、演說口調で云ふ時の様子をふと眼の前に浮べて、壯吉は思はずくすりと笑つた。而して、火鉢の縁を撫で廻しながら、

「へえ、さうですかねえ。女房や子供まであつたんですかねえ。」

「二三日、どうも様子がへんでしてね。何か、そは〳〵して云ひ度い事でもありさうな風でしたがね。――今朝、だしぬけに、『實は白井さん！』なんて、顏を赤くして、切口上になつて打明け話をしたんですよ。」

「あれでも、矢張顏を赤くしましたかね。」と壯吉は笑つた。

「あの男が、あんなに慌てた事を見た事がありません。――いや、あわてる筈でさ。間借をしてゐる家から追出されて、門口を出ようとする處へ、細君が子供を背負つてひよつこりと訪ねて來たと云ふんですからね。」

壯吉は、いかにも面白さうに語る白井の様子から、此の事件が、非常に白井の興味を動かして居るのを見てとつた。而して、何くれとなく、その爲めに奔走してゐる世話好きの白井の細君の緊張した顏附なども想像に浮べた。

「しかし、長瀬も幸福ですよ。あなたのやうな親切な人がついて居るんですからね。」と壯吉は多少皮肉めいた口吻で言つた。

「いや、親切といふわけぢやありませんがね。どうもあまり何でも見て居られないもんですからね。長瀬一人ならどうでもいゝが女房兒が氣の毒ですからね。」白井は眞面目になつて、辯解するやうに云つて、

「ぢや、明日の十時頃に伺ひます。」

かういひ殘して歸つて行つた。壯吉はそれまでに五圓の金を拵へて置かなければならない事を考へた。貧しい壯吉の生活ではそれ丈の金でも決して容易なものでは無かつた。彼は書架の上の賣つてもいゝ本を眼で數へて見たりなどした。——彼は、又してもうつかりとそんな事を引受けて了つた自分の不徹底さが顧みられた。もう長瀬の事なんか構はないつもりで居たのぢや無いか？　何故、白井にその事を言つてきつぱり斷つて了はなかつたのか？　と、壯吉は輕い悔いを感じたのであつだ。

壯吉が初めて長瀬を知つたのは、もう三四年前、壯吉が未だ獨身で下宿してゐた頃であつた。

その時分、長瀬は小間物類の大きな風呂敷包を背負つて行商して居たが、壯吉の下宿にもちよい〳〵賣りに來るうち、壯吉と心易くなつたのであつた。長瀬は夜の間さうして働いて、

晝はT大學に通つて哲學を勉强してゐるといふ事であつたが、話が哲學の事になると商賣などはそつちのけに、アリストテレス、プラトン、カント——と夢中になつて辯じ立てるのであつた。而してその話振も極めて特色的で、興が乘つて來ると、ふだんは象のやうに細い眼が三角に見開かれて活々と輝き出す。薙刀形に上反つた鼻の先端が少し赤味を帶びて來て、尖つた吻が一層尖つて來る。その尖り口を斜め上に向けて、黃いろい聲を搖り上げ搖り上げして演說口調で談じ續ける——しまひにはとん〳〵と拍子をとるやうに火鉢の緣を叩く、といふ風であつた。

長瀬はゆく〳〵は大哲學者になつて、哲學を以て世界を救ふのだ。人心の迷妄を破るものは哲學より外に無い、といつて居た。途方も無い事を云つてる、と思ひ乍らも、その飽迄も眞面目な熱心な樣子を見ると壯吉は笑へない氣がした。どうかすると、宵の口から話し續けて、夜更に驚いて歸る事もあつたが、でも、歸り際には、來合せた女中などをつかまへて、

「姉さん。香水を買つて下さい。廉くしときまさ。」と不器用な調子で勸めたりした。

「おしろいはどうです。この方は十五錢にしときまさ。」

そのつまらなさうな白け切つた樣子は、たつた今まで熱狂的に談じ立てた彼とは全く別人のやうであつた。哲學の話をしない時の彼は、丁度酒の氣の無くなつたアルコール中毒者の

やうなもので、何だか、とぼんとして影が薄かつた。些とも賣れなかつた重い荷物を背負つて、みしり〳〵と懶さうに梯子段を降りて行く足音を聞きながら、

「おゝ、氣の毒な哲學者よ！」と壯吉は心の中で呟いた。

半年ばかりの間、長瀨はさうしてよく壯吉の下宿にやつて來たが、そのうちに壯吉は家を持つたりなどして、それきり長瀨と逢ふ折も無かつた。ところが、それから二年ばかり經つた後の或日、長瀨は、どこでその住所をきゝつけたのか、ふらりと壯吉を訪ねて來た。その時はもう行商はして居なかつた。而して酷く窮迫して居るらしく、六月の末だといふのに綿入のぼろぼろなやつを着てゐた。勿論、學校の方は疾くに止めて居た。が、哲學には相變らず夢中で、いや前よりも一層狂熱的な調子で、訪ねて來た最初の日から盛に論じ立てた。その言ふ事に時々閃きを感ずることは出來たが、しかし全體としてはどうもよくわからなかつた。

壯吉は食ふに困つてゐる長瀨の爲めに、仕事口を探さなければならなかつた。時間で束縛されたり、人に頭を下げたりする事が無いやうなといふ註文なので、筆耕だの編纂物の手傳ひだのを見附けて來たが、長瀨は自分で賴んで置きながら、いざとなると何とか彼とか云つて、ろく〳〵手を附けもしなかつた。急ぎの寫し物に圖書館に行つても、何にもしずに歸つ

て來る。どうしたのかと聞くと、今日はあまり天氣がいゝので、途中で氣が變つて戸山が原へ行つて、そこの芝原の上で一日暮らして來たといふのだ。而して、「かうぢつと大空を眺めて居る——大空を眺めては又眼を閉ぢて瞑想する。さうしてゐると、この大自然と自分とが一體であるといふ事がだん〳〵はつきりと感じられて來るのでしてな。」などと呑氣な事を云つてゐるのであつた。

「瞑想もいゝが、長瀨君！　生きてく爲めにや働かなきやならないよ。哲學や瞑想では飯が食へないよ。」と、壯吉も流石に腹を立てゝいふと、

「えゝ、ですがね、僕はどうも心持にぴたりと合つた仕事でないと、——どうもやる氣がしないもんですからね。」と、長瀨は飽迄も悠々としてゐた。

「そんな事を云つても、さう御誂へ向きの仕事があるもんぢやないよ。皆、何人だつて生きる爲めにや可厭な事をしてるんだ。もうすこししつかりやらなきや駄目だよ。」

「ですがね——唯、無意義に生きてゐたところで仕方が無いんですからね。何か斯うしつかりとした、謂はゞまあ生存——いや、存在の全意義といふやうなものを——。」などと、長瀨は、すぐに調子にのつて、例の演說口調で始めさうになる。

「そんな事を云つたつて、先づ食ふ事をしなけりや駄目だよ。」と壯吉が叩きつけるやうに

云つた。

「それはさうですけれど、人はパンのみにて生くるものに非ず――で。」などと今更黴の生えたやうな文句を引張り出して、得々と――さうだ、長瀬はさういふ風な話を初めさへすれば、直ぐ誇らしげな自信あり氣な、而して力強い、活々とした樣子になる――語り出す長瀬を見ると、壯吉は腹も立つが、一寸をかしくもなつて、

「そんな事を云つたつて――。」位のことで、二の句がつげなくなるのであつた。

ほんとに始末にをへない男だ、と思ひながら、しかし長瀬の、そのとぼけたやうな處に、何かしら一種の魅力(チャーム)があるので、壯吉は、長瀬を突放して了ふ氣にはなれなかつた。この善良な眞摯な一つの魂は方向を誤まつて居る、戸惑ひをして居る。救ひ出してやらなければならない――一方にはまたこんな氣もして、壯吉は出來る丈親切に長瀬の爲めに盡さうと思つた。而して、長瀬が長い間の食ふや食はずの生活の爲めに酷く健康を損つて居るらしいのを見て、長瀬が何をする氣にもならないのは、或は營養不良からの神經衰弱のせゐかも知れないなどと考へ、夏の間中、自分の家に置いて靜養させる事にした。長瀬は、「俺はどうでもいいのだが、お前がさういふのなら。」とでもいふやうな態度で、壯吉の家にやつて來て、座敷の隅に横になつて、とりとめもなく本を讀んだり、ぼんやりと天井を見つめながらその所謂

瞑想をしたりしてゐた。壯吉の細君や子供は海岸の方の鄕里に出かけてゐたが、留守居の、房州生れの精悍な老婢(はあや)に、

「長瀬さん何だね。朝から晩迄ごろツちやら〳〵。たまにや庭の掃除位したらいゝぢやないか。何だね人の家(うち)に厄介になつてゐて。」などと小ツぴどくやツつけられて、初めは唯にやにやとして居たが、しまひには、仕方無しに日盛りの庭に出て草拐りなどをやつた。が、老人のやうに少し禿げ上つた額際やひよろ〳〵と細い頸筋に汗をにじませて、鼻の先を地にすりつけるやうにしてもぞくさと這ひ廻つてゐるその樣子全體が、「やれ〳〵酷い眼に逢ふものだ！」とでも呟いてゐるやうなのを見ると、壯吉は、

「長瀬君、まあいゝからそんな事あ止めて、上つて休み給へ。どうも、君には矢張り働くのはふさはしくないよ。」

苦笑しながら、斯んな風に云はずには居られなかつた。

壯吉は妻子の外鄕里の方にも負擔があつて、その爲めにつとめの外の仕事までしなければならないやうな境遇にゐたので、勿論、他(ひと)の爲めに何(ど)う斯うするといふ餘裕などは無いのであつた。その後も、相變らず捗々しく仕事も爲ずにゐる長瀬の爲めに、時々いくらかの物質上の面倒を見てやらなければならなかつたが、しまひにはそれがかなり苦痛になつて來た。

で、そんな姑息な親切は何にもならない、長瀬を救ふには、長瀬のどしやう骨を叩き直すより外は無い、その哲學の迷ひから覺まして、眞面目に人並に働くやうにさせる外はないと壯吉は考へた。で、壯吉はよく長瀬に說法した。

「長瀬君。兎に角、働かなきや駄目だよ。少なくとも、自分を生かす丈の事は自分でしなけれや駄目だよ。額に汗してパンを食ふ——これが先づ第一の事だ。君の所謂、深遠な哲理も、高遠な理想もそれからの事だ。第一義的に生きる——無論それはいゝ事だ。併しこの肉體を以て生きてゐる以上、まづ食ふといふ事が根本なのだ。いや食ふといふ事がつまりその第一義なのだ。僕の云ふ事は平凡だがね、わかりきつた事だがね。しかしこれが眞理なのだ。いや、事實なのだ。眼の前の事實なのだ。」壯吉はいつもこんな風に、長瀬に云ふのであつた。

「えゝ、そりやさうですがね。」長瀬は、仕方なしのやうに氣の無い返事をする。

「君のやうに自分の氣に入つた事でなけりやしない、なんて云つてたら、何人だつてする事は無くなる。何人だつて君、皆厭々働いて居るんだぜ。自分の仕事を面白いと思つてしてゐる人は恐らく一人もあるまいと思ふ。食つてく爲めにや仕方が無いから、いやな事でも毎日コツ〳〵と働いてゐるんだよ。僕にしてからがさうだ。安月給に縛られて毎日々々窮屈な勤めをやつてる。而して一生で今が一番大事といふ時を、下らない仕事をして下らなく過してゐる。そりや、全く骨身を削るやうなおもひなのだ。けれども、仕方ない。食はなきやならないから。君などの眼から見ると僕などは、平凡な家庭生活などに滿足して、何も考へずに醉生夢死する人間のやうに見えるんか知らないが、そりや僕だつて君が考へる位の事はちやんと考へてゐるんだ。僕だつて君、そんな安ツぽい人間ぢや無いんだ。」こんな風に云つてゐる中に、壯吉は次第に昂奮して來るのであつた。

「僕は君、表面呑氣の樣に見えるかもしれないがね。どうしてこれで人一倍の野心家なんだ。こんな事をしてゐちや仕方が無いと、始終じり〳〵と煮えくりかへるやうな氣持で居るんだ。やり度い事はいくらもある。いつその事何も彼も打捨てゝ、あらゆる者を犧牲として、驀地にその方へ進んで行かうとも思ふんだ。けれどもね、責任がある、負擔がある。それを抛つて行くわけにやいかない。で、腹の中ぢや血の涙を流しながら、いやな下らない事でもやつてゐるんだ。君なんかに、かういふ苦しい氣持は判るまいがね。」

一語一語と壯吉の言葉は激して行つた。而して壯吉は、妙に沈痛な、涙含ましいやうな氣持にさへなつて行くのであつた。そして壯吉は、それが、もう長瀬を對象としてゐるのでは無く、何者かに向つて自分を辯解し、且つ訴へてゐるのである事に自分でも氣がついて、誇張した言葉の調子が、一寸氣恥しく顧みられるのであつた。が、長瀬が薙刀形に、その上反

つた鼻の先をつき反らすやうにして、お役目に聽いてやるといふやうな顏附をしてゐるのを見ると、壯吉はまたむしやくしやと腹立たしくなつて、

「哲學の何のと云つた處で、自分で自分が養つて行けないやうぢや駄目ぢや無いか。男一疋が自活して行けないなんて何よりも恥しい事だよ。本當にしつかりしなきや駄目だよ。」と激しく叩きつける樣に云ふ。

しかし、長瀨は近頃では、そんな事を云つても薩張り手應へが無かつた。相變らず悟り濟ました平氣な顏をして、唯、默つて聞いてゐるのであつた。その無言の中に、强い信念を藏してゐるやうな長瀨の樣子を見ると、壯吉はもう堪らなく苛々として來た。

「本當に君などは世の中の寄生蟲なのだ。そんな乞食見た樣な生活をしてゐてカントもプラトンもあるものか！」などと、思ひ切つた惡態を吐かずには居られなくなるのであつた。が、そんな風にして長瀨を歸した後では、壯吉はいつも、深い憂鬱の中にその心を押ししづめられるのであつた。

壯吉は作家に志してゐる男であつた。而してその爲めに東京へ出て來てから十年にもなるのだが、未だ一枚の小說も書いて居なかつた。自分を信ずる力の薄い、物に對して惑ひの多い、要するに此の人生に對して何の信念をも持つ事の出來ない、從つて何事にも全力を傾倒する事の出來ない、その癖、いやそれ故に、實生活上のつまらない事に累はされ易い性格の彼は、未だ何一つしないうちに、平凡な家庭の主となつて齷齪と世の營みに追はれ乍ら、其の「靑年」を葬りつゝあるのであつた。同じ仲間がそれ〴〵世の中へ出て、華々しく活動し出したのを見たりすると激しい焦燥に夜も眠れぬ思ひをするのだが、しかし、奮起して志すところに進む丈の力を彼は有つて居ないのであつた。而してそれには書けない爲めの負惜みも多分に交つてゐるのであるが、「小說なんか書いて何になる！」といふやうな藝術といふものに對する根本的な疑ひに囚へられたりなどして、其の日の生計も忙しいまゝに、「本當にしたいと思ふ事」は何一つしないで日を送つてゐるのであつた。而して、あの嘗ての燃えるやうな野心もいつの間にかくすぶり消えて、善良な父、善良な夫としての世間並の平凡な生活に泥んで行きさうな心持になつてゐるのであつた。口ぎたなく長瀨を罵つたあとの、ヒステリーの發作の通り過ぎた人のやうな淋しい心持の中で、壯吉はさういふ自分の姿をまざ〴〵と省みないではゐられなかつた。長瀨は未だしも、生甲斐のある生き樣をして居るのだ。長瀨は方向を誤つてゐるかも知れない、が、とにかく彼は方向を持つて居る。動いてゐる。進んでゐる。而して飽迄もその信念に殉じて、本當に自分に忠實な　充實した生活をして居る——少なくもしようとしてゐるのだ。

こんな風に考へては、壯吉は、

「あの人のいふ事は成程道德的かも知れません。しかしあまり世俗的です。あすこから一歩踏み出さなければ駄目です。つまらん生活などに囚はれてゐては駄目です。われェわれェは――。」何人かに演說して聞かせてゐる長瀨の樣子を想ひ描いたりしては、一人でむしやくしやと腹を立てた。長瀨に對してといふよりも、自分自身に對して腹を立てたのであつた。

長瀨は間違つてゐるかも知れない。が、少なくとも俺よりも本當に生きてゐる。長瀨の方が俺よりもえらいのだ。その長瀨をこの俺が悶んだり、輕蔑したり、世話をしたり、忠告をしたりするのはあべこべだ。――幾度もの斯ういふ反省から、壯吉は長瀨から遠ざかるやうにしはじめた。而してもう斷然、長瀨に對して、普通の交際以上の餘計なおせつかいなどはしまいと心を決めたのであつた。

さすがに、まるきり働かないわけには行かないので、長瀨が白井の世話で、一つの仕事を始めたのは、その頃からであつた。「これなら長瀨さんにも出來るでせう。」と云つて白井が見附けて呉れたのは、軒燈の電蓋（グローヴ）の破れたのを新しいのとつけかへたり、又字の消えたのを書き換へたりしていくらかの手間賃をとるといふ仕事で、看板書きなどをしてゐる白井はその文字書きの方を引受けたので、長瀨は唯、其邊の横町などを歩き廻つて、電蓋（グローヴ）のいけないのを見つけて來ればいゝのであつた。つまらぬ事に大切な頭はつかひ度くない、しかし身體が弱いのであまり激しい勞働も出來ないといふ長瀨にとつてはこれは、うつて附けの仕事であつた。長瀨は、白井のお古の小倉の詰襟に何處からか見つけて來たカーキー色のだぶ〳〵のズボン、それに駒下駄穿（は）きといふ風體でぶらり〳〵と巷々をぶらつき歩きはじめた。

「廣い世の中には いろ〳〵の仕事があるもんですね。なるほどこれはまるで長瀨の爲めに出來てゐる仕事といつてもいゝ位ですね。」などと云つて、壯吉は白井と一緒に笑つたが、しかし、長瀨はこの仕事も、あまり身を入れてしなかつた。而してたまにせいを出して一日歩き廻つても、外の者が十位見つけ出してとつて來るところを、せい〳〵三つ四つ位しかとつて來ない。其上、いつも「哲學」の事ばかり考へてゐるので、電蓋（グローヴ）を提げて歩く間に、自轉車に打ツかつたり、とり落したり、度々それを割るので、働いて却つて損をする事もあつた。

「長瀨さんの哲學もいゝが、何しろ持ちあるくのは壞れ物なんですからね。」と、白井は眞面目くさつて、こんな事をいつた。

白井の家は壯吉のすぐ近所の、ごみ〳〵した露路の奥にあつた。二階を人に貸して、階下の八疊に細君と二人で棲んで居たが、その貧しげな、薄暗い室の壁の上には、幾枚もの拙い油繪が、彼の畫學生々活の記念として懸け竝べられてゐた。白井は畫家になり損つて、今は

看板書きだの、製圖だのをして細々と暮しを立てゝゐるのだつたが、「此の人はほんとに器用貧乏といふんですよ。」と、細君が云ふ通り、大變器用な、何でも出來る、而して何にでも興味をもつといふやうな人で、繪の方はまあ本職として、細工物などもなか〳〵器用にやるし、一寸發明じみた事をして專賣特許を受けた事もある―― 尤も、それで金儲けが出來るといふほどの大した發明ではないが。遊びごとなども、將棋、碁、はな、トランプ、何んでも好きで、仲間を集めてはよくやつてゐた。壯吉は仕事の隙を見ては白井の許へ碁打ちに行くのを樂みにしてゐた。二階を借りてゐる關といふ中年の獨身者も時々一緒に打つた。白井と壯吉は同じ位、關は二人より二三目上であつたが、三人とも迚も人前には出せないやうなひどい笊碁であるといふ點で變りは無かつた。關は十五六の少年位の柄しかない小男で、色の白い丸顏に、細い眼の眼尻を始終にこ〳〵と波打たせて、ちよんぼりとした天神髯を勿體らしく撫でるのが癖であつた。壯吉はそれに「烏羽繪の公卿さん」といふ綽名をつけてゐたが、公卿さん丈に歌が好きで、

「いかゞです、御近詠は？」などといふと、「此頃はどうもうまいのが浮びませんが。」などと、洋服の内がくしから小さな手帳を出して、鉛筆でかきつけたいくつもの拙い歌を、調子をつけて讀んで聞かせた。白井も、時々、關と一緒に歌を作つて、壯吉に批評を求めたりな

どした。

「ふるさとの母老い給ふいたづらに我は都の――。さあ、此のあとを何としようかと昨夕は一晩中寢ずに考へたんですがね。つまりその、故郷の母はもう老いてゐるのに、自分は何事にも成功しないで、かうして都の片隅でつまらなく暮して居る。さういふ心持を出したいと思ふんですよ。これは私の本當の心持なんですからね。」などと、白井はしよぼ〳〵した眼を眞赤にしてゐる事などもあつた。心臟が惡いとかで、青く痩せてゐる白井は、物に凝るとすぐ眼に充血する癖をもつてゐた。壯吉は、御師匠顏して、さもえらさうな樣子で、二人の歌の批評などをしたが、しまひには自分も一緒になつて作つて見たりした。が、壯吉はそんな自分にふと氣がつくと、何といふ詰らない馬鹿々々しい事をしてゐるのだ？　ヘボ碁を打つたりヘボ歌を作つたり、そんな呑氣な事ばかりしてゐられる時か？　と衝き動かされたやうに思ふのだつた。而して、三十面さげた今日まで何一つしてゐない自分を――かうしてぐづぐづと大事の一生を市井の間に埋めて行きさうな自分の姿を、いやといふほどはつきりと見せつけられたやうな氣がするのだつた。而して、その發作的の苛立たしさに、ぢつとしてゐられなくなつて、急に座を立つて歸つたりする事もあつた。而して、もう白井の家などには行かないで、たとへ少しの暇々にでも、本當の仕事志す處に向つて力量を試みるやうな仕事を

しよう。生活などはどうでもいゝ、何者をも犧牲とする意氣込みでやらなければ駄目だ。やらう！　大にやらう！　と決心するのだつたが、それもその時丈で、いざとなると、又、疑ひが起つたり、まだしない先から絶望的な氣分になつたりして、なか〳〵「本當の仕事」には手がつかなかつた。而して何がなしに所在なく淋しくなつて、又、自然に足が白井の家の方に向くのであつた。

「此頃些ともやつて來ないね。それに何時行つても留守ぢやないか。一體どこへ行くんだい。何かいゝ處でも出來たのかい？」などと友達に問はれると、壯吉は、

「あゝ、いゝ處が出來たんだ。」と冗談のやうに云つて、顏を赤くするのであつた。何の友達の家よりも、壯吉には白井の家が居心地がよかつた。そこには何の刺戟も、壓迫もなかつた。而して、人懷つこい客好きの白井夫婦は、心から歡迎して吳れて、一週間も行かずに居ると、どうしたのかと心配するのであつた。

善良で親切で世話好きな白井夫婦は、壯吉から紹介された長瀨の、傷ましい窮迫の姿を見ると、自分達の苦勞の經驗からわけもなく同情して了つて、殊に細君の方は、

「いゝえね。あの人は餘り苦勞したので、少し氣が疎くなつてゐるんですよ。」などと云つて、親身の姉のやうな親切で優しく長瀨を受取つて吳れたのであつた。

「貧すりや鈍すると云ひますがね。本當にあの若さで、氣の毒な――。」こんな風にいつて、その年よりもずつと老けて見える顏の、ひどく落ち窪んだ眼に涙などを浮べる白井の細君を見ると、壯吉は、「いゝえ、あれはあゝ云ふ變り者なのですよ。」などといつて、その折角のやさしい心持に、灰を嘗めるやうな幻滅を感じさせ度くなかつたので、

「本當に長瀨君も仕合せです、しん身だつてあなた方の樣に親切にして吳れはしませんよ。」などといふと、

「いゝえ。心持だけで何も出來はしませんけれど――。私など、自分でひどい苦勞をして來たものですから、人樣の苦勞もだまつて見て居られないやうな氣がするのですよ。」細君は、自分で自分の親切な心持に感激するやうにして、涙含んだ眼を連りにしば叩くのであつた。

「今だつてまあ御覽の通りの有樣ですけれど、あの時分に較べりや今はお大名といつてもいい位ですよ。あの時分の苦勞といつたら。恥をいふやうですが。」細君はこんな調子で、白井を一人前の畫家にする爲めに、奉公して學資を貢いだ事だの、繪の具を買ふ錢に困つて、夜具蒲團まで質に入れて寒い夜を行火で凌いだ事だの、納豆賣りをして歩いた事だの――これまでの苦勞の經驗を、涙つぽい調子で細々と話して聞かせるのであつた。

「本當にあの時分は私も苦勞したもんでさあ。實際泣くにも泣かれ無いおもひをした事が幾

度あつたか――。」と、白井も一緒になつて嘆息するやうに云ふのであつたが、併し、さうした苦勞がどうなつたか。十幾年間のさうした苦勞にどんな實りが齎らされたか。壯吉はもうすつかり疲れ切つてゐるやうな、せいのない白井の顏を眺めて、淋しい氣がするのであつた。

でも、白井は、新聞などで、昔同じ師匠に學んだ仲間で、今は立派な畫家になつてゐる誰彼の噂などを見ると、

「僕も大にやりますよ。今度の文展へは是非出します。今迄は何しろ生活に追はれて駄目でしたが、これから私も大にやります。」昂奮した調子で、こんな事を云ひ出す事もあつた。白井の灰色に褪めた顏にも、さういふ時はかすかに血が上つた。

「今年こそ〳〵つて、いつでも口で許りいひますがね。もう二三年一枚も繪なんか書いた事は無いんですよ。駄目ですよ此の人は、此頃はすつかり怠け者になつて了つて。」細君が嘲るやうな悲むやうな調子でいふと。

「駄目だかどうだか、まあ見てろ！　何もわかりもしない癖に。」と白井はだしぬけに怒鳴り出した。

「(見てろ！　見てろ！)が此の人のおはこなんですよ。」細君は、それにはもう取合はないといふ風に、同じ様な冷笑の語調で壯吉の方に話しかけるのだが、壯吉はその言葉が壯吉自身に向つて云はれた言葉のやうに聞かれるのであつた。

「本當にお互にやりませうよ。僕もやりますよ。僕だつていつまでも埋れてはゐないつもりですよ。」壯吉もこんな風に云つて一緒に昂奮せずにはゐられなかつた。而して白井がむやみに昂奮して文展の墮落を罵つたりするのに合槌を打つて二人で盛に氣焰を揚げる。白井の細君はそれをきくと、何かしら賴母しげな表情をその眼に浮べて、ぢつと夫の横顏を見てゐる事もあつた。白井の細君は、白井より二つ三つ年上だと聞いたが、十も上に老けて、どこかに未だ書生らしい風の殘つてゐる白井には、姉とも叔母とも見えるやうな人であつた。

が、二人のさういふ昂奮も、その場限りで、線香花火の様にすぐ消えて了つた。二人は、相變らずヘボ碁を打つて夜を更かした。ヘボ碁だけに激しい接戰があつて勝負にはなかなか興が乘つた。而して、熱して來ると、二人とも碁打ちの常として、平常の禮儀や遠慮を忘れて、半無意識の喧嘩を初める。

「このヘボが！」と云つて壯吉がちよんと打つ。

「このヘボが！」と云つて白井がちよんと打つ。

「また負けようと思つて！」

「どつちがまた負けようと思つて！」

二人が碁打ちに夢中になつてゐる傍で、長瀬は、ぼんやりと例の「瞑想」をして居るのであつた。而してたまには、二階から降りて來た關をつかまへて、「われェわれェはア――」と說き立てる事もあつた。長瀬は段々なまけ出して、近頃ではたまに白井の看板書きの手傳をする外、ろく〳〵動きもしないで、三度々々の食事まで白井の家の厄介になつてゐた。いくら親切な白井夫婦でも、それでなくてさへ苦しい生活の中で、長瀬の食扶持まで引受けることは骨が折れた。

「本當に圖々しいのだか馬鹿だかわかりやあしない。あんな人も珍らしい。」さすがの細君もしまひには愛想をつかしたが、こんな愚痴をいひ乍らも、矢張いろ〳〵と面倒を見てやつて、飯時にはちやんとその用意などして、若し來ないと、どうしたのか？　と心配するといふ風だつた。

石女（うまめ）の彼女は、始終その母性のはけ口に苦んでゐるといふやうな人で、何か面倒を見てやるもの、親切をつくしてやる者がいつでも一人位は居ないと淋しくて堪らないのであつた。白井も矢張、始終自分を頼りにして呉れる人を一人位は持つて居度いといふ心持の人であつた。

「長瀬さん。君のやり方はどうしても間違つてゐるよ。そんな考へぢや世の中は渡つて行けないよ。」などと白井はよく長瀬をつらまへては、前に壯吉が長瀬に云ひ〳〵したと丁度同じやうな事を――哲學もいゝが、人間は生活して行く以上、まづ働かねばならぬといふ樣な事を繰返して聞かせた。いかにも諄々として說くといふ風に、一時間以上も說き續ける事があつたが、長瀬は、唯「へい〳〵」とうけこたへをする丈で、本氣にきかうとは勿論しなかつた。事實、白井の說教はあまりに常識的で、長瀬がそれに耳を傾けないのは當然であつたとは云へ、さういふ長瀬の樣子は、そばに見てゐる壯吉をむやみに腹立たしくするのであつた。

ところが、四月ほど前、長瀬は突然どこかへか姿をかくして了つた。白井の細君は、「長瀬さんもあんまりだ。默つて何處かへ行つて了ふなんて。」と、長瀬の不義理を罵つてゐたが、その當座は白井も白井の細君も何か掌の物を奪はれでもしたやうに、大へん淋しさうな風だつた。それが又、つい十日ばかり前から長瀬は白井を頼（たよ）つて來て、丁度歲暮で忙しくなつた白井の仕事の手傳ひなどをしてゐたのだつた。而して、そこへ、今度、細君が田舍の万から突然出現したのであつた。

二

それから四五日の後、もう大晦日近くの夜に、やうやく仕事を仕上げた壯吉は、久振りに白井の家を訪ねた。丁度長瀨が來て居て、火鉢の向う前で白井と何か連りに話し込んで居た。

「驚いたなあ。長瀨君、君は何時の間に女房や子供を拵へてゐたんだい？」對手の極り惡さを想像して壯吉はわざと冗談のやうな調子で斯う云つたが、長瀨は案外平氣で、而して生眞面目な面をして、

「え、。不意に田舍の方から出て來たもんですから。」と云つた。

「今も長瀨君に云つてゐる處ですよ。女房子があつて見りや長瀨君も餘程しつかりしないと駄目だ。一人身ならば兎も角。」と、白井は勿體振つた調子で言つた。

長瀨は、ぢつと俯向いて何か考へ込むやうにして居たが、

「どうも女といふ者は理解がなくて困ります。僕も今が一番大事の時だからもうすこし辛抱してあつちに居るようにと云つてやつといたんですが。昨夕も一晩中いろ〳〵の事を說明し

てきかせたのですが、矢張り女は駄目です。女といふ奴は、なか〳〵物質から超越する事が出來ないものです——。」と呟くやうな調子で云つた。

「女ばかりぢやない。何人だつて人間である以上さう物質から超越出來るものぢや無いよ。」と壯吉は、冷かな調子で斯う云つた。

「兎に角ね。食ふ丈の事はしてやらなければ可哀さうだよ。君は、妻子なんてどうせ犧牲者だなんて云つてゐるが、併し、それは間違つてゐる！　そんな筈は無い！」と、白井も壯吉のあとについて云つた。前から大分その事で論じ合つてゐたらしく、白井の言葉は、例になく詰り迫るやうな强い調子をもつてゐた。

「それはさうですけれどね——。」長瀨がそれに答へて何か云ひ出さうとした時、水口の戸をがたぴしと引きあけて白井の細君が歸つて來た。抱へて來た風呂包みを下ろして、一寸壯吉の方に會釋してから、

「まあ長瀨さん。お上さんは大變な熱ぢやあ無いか。それにあかさんも何だか惡るいらしいよ。蒲團を敷いて寢るようにつて云つて來たが、お醫者に見せなけりやいけないよ。」と喘ぐやうに云つた。

「そんなにひどい熱でしたかね。」と、長瀨は別に驚く風もなく、白井の細君に問ひ返した。

「本當に長瀬さんも餘り呑氣ですよ。打捨つといたら取返しがつかない事になりますよ、早く歸つて見てお上げなさい。私があとから渡邊先生に賴んで、診察に行つて貰ひますから。きつと、此間の晩一晩中寒い風に吹かれなさつたりなどしたからですよ。」

長瀬は、白井の細君に急き立てられてぐずり〳〵とその新しい住居へ歸つて行つた。

長瀬の細君は、いくら長瀬が貧乏して居るとは云つても、少しどうにかなつてゐると思つて出て來たのだらうが、出て來たその晩の寢所さへ無いといふ始末には實際呆れ返つたらしい。「ほんとにこんな意氣地無しとは思ひませんでした。」と白井の細君にも泣いて訴へたさうだ。而して、白井の細君の前で、さん〴〵長瀬をやりこめた上、長瀬の頭をぽん〳〵と二つ三つ叩いたりしたが、長瀬は水洟を啜り乍らにや〳〵笑つて一向平氣であつた——などいふ話が、白井の細君から話された。而して、三人は一緒に笑つた。

「どうして、あのお上さんはなか〳〵しつかりしてゐますよ。あのお上さんがついてゐて、ぴし〳〵と仕込んだら長瀬さんも働くやうになるかもしれませんよ。——でも、結構な女ですのに、どうしてあんな長瀬さんなんかと一緒になる氣になつたものでせうかね。長瀬さんはどうでもいゝとしても、お上さんや子供は本當に氣の毒ですからね。——大分熱があるやうですが。」

白井の細君は心から心配さうにそんな事を呟きながら、臺所の方に立つて行つた。米櫃をがら〳〵鳴らす音がした。

而して、障子の隙から一寸壯吉の方を覗き込むやうにして、

「病氣で寢てゐるといふのに明日の米だつて無いんですよ。」と一寸笑つて見せたが、やがて裏口から出て行つた。溝板に小刻みの足音がこと〳〵と鳴つた。何だ彼だと愚痴を云ひながらも、白井の細君にはこんな風にして他の爲めに何かしてやる時位、幸福な活々とした氣持のする時はないのであつた。而して、「本當に困る」とか「仕方が無い」とか愚痴をいふその事までが樂しさうな風に見えるのであつた。

さうして妻子と一緒になつたので、長瀬も前のやうに、のらくらしてはゐられなかつた。また例の電蓋採りをはじめたが、今度はなか〳〵勉强して歩き廻り、とり落して壞してしまつたりする事もすくなくなつた。白井夫婦は、世話甲斐があるといつて喜んで居たが、しかし、それもほんの當座の二十日ばかりの事であつた。長瀬はまた怠け出した。また例の瞑想をやり出した。さうして、白井の家の貧しい米櫃から親子三人の糧が運ばれるやうな日が、はじめは一週間に一度、それから五日に一日、やがて三日に一日、といふ風に頻繁になつて來た。

白井夫婦は、壯吉の行く度に、長瀨の怠けてばかりゐるのをこぼした。

「あれは駄目ですよ。打捨つといた方が宜いですよ。どん底へ落ちりやどうかしますよ。」と、壯吉は云つたが、白井夫婦はそれでも矢張何彼と面倒を見てゐた。白井の細君は、自分の古い着物を仕立直して、長瀨の子供の爲めにねんねこ半纏をこしらへてやつたりなどしてゐた。さういふ心づくしを有難く思つてゐるのかどうかもわからない、例のぬうとした超然とした樣子をして、長瀨は、

「すみませんが、またお米をすこし貸して下さい。」などと、平氣で云つて來るのであつた。

火鉢の向う前で、白井が熱心に長瀨に忠告してゐる處へ、壯吉はよく行き合せた。長瀨は、大抵例の無關心な表情で聞いてゐたが、時とすると却つて逆捻ぢに白井に說教して聞かせるやうな事があつた。

「此頃は、妻にも漸く私の心持がわかりかけたやうです。今ではもうあんまり愚痴などは云はなくなつたやうです。それに私自身も漸く何かゞ摑めて來たやうに思はれます。」と、非常に、活々とした調子になつて、

「人間は何でも、何かしつかりとしたものを握らなければ駄目です。唯、空々寂々と生きて居たのでは、生甲斐はありません。所謂醉生夢死では駄目です。食ふとか着るとか、そんな

事はどうでもなるのですよ。そんな眼前の事に累されてゐては駄目です。われェわれェはアー――。」と例の樣に次第に演說口調になつてプラトン、ソクラテス、カントなどを引張り出して來て、滔々と辯じ立てるのであつた。それは相變らず長瀨一流の、唯長瀨だけが獨合點の何が何だかわけのわからぬものであつたが、しかし、その三角の眼を輝かし、空間の何物をか凝視するやうに、薙刀形の鼻を反らして、熱心に說き立てる樣子には、ある靈感が來り宿つてゐるやうに見えて、唯、嗤ひ捨てゝばかりは措けぬやうな一種の力があつた。兎に角、此の男は求めようとするところを求めてゐる、信念をもつてゐる――壯吉は、長瀨のさういふ態度から或る壓迫を感じずにはゐられなかつた。而して又、少なくとも、その學者である點に於て、哲學者である點に於て、長瀨を尊敬してゐる白井は、その平常の長瀨とは變つたやうな、熱のある調子と、何かしらむつかしげな議論とにすつかり烟にまかれて、呆れ返つたやうにぢつとその顏を見つめて居るのであつた。

長瀨の妻子が出て來てからそんな風にして一月の月日が經つた。一月の末の、空に一ぱい星を散らした寒い夜であつた。壯吉が白井を尋ねる爲めに、その暗い露路の溝板をこと〳〵と踏んで行くと、ぱつたりと長瀨と行き會つた。

「やあ、林さんですか？」暗い中を透かすやうにして、長瀬がかう聲をかけた。
「今歸るところかい？」と壯吉が云つた。
「はあ。」と云つて長瀬は、立止まつたまゝ、一寸の間默つてゐたが、
「林さん、今一寸、私は白井さんと議論したんですが、白井さんがあんまり無理解なので、私も、すこし不愉快になりましたからもう白井さんとこへは來ないつもりです。」長瀬の聲は落着いてはゐたが、幽かにふるへてゐた。彼は少し昂奮してゐるらしかつた。
「不愉快だからもう來ないつて——。そりや君の勝手だらう。白井君が何も君に來て呉れといふのぢやないからね。そんな事を云つて白井を離れちや君が困りやしないかね。」
「いや、別に困ることは無いのです。妻の兄も些と位の間はどうかするから來い〳〵と云つてゐるのです。——えゝ。東京に居るのです。しかし、その兄といふ男も、十分私といふ者が理解出來ないやうなので、不愉快なので行かずにゐたのですが、それでも白井さんよりやいゝと思ひます。白井さんは全く駄目です。はじめは、私ももつとわかればわかり得る人だと思ひました。が、いくら話して見ても些ともわかりません。些ともわかりません……。」
「君のいふ事がわかる人は一寸あるまいと思ふね。僕にしたつてわからない。」壯吉は嘲るやうに云つた。

「いや、あなたは白井さんとは違ひます。あなたはわかり得る人ですよ。——あなたにはわかつて頂けると思ひます。又機を見て、あなたにはゆつくりとお話ししたいと思ひます。ぢや。」と云ひすてゝ、長瀬は足早に、その軒燈の影の薄暗い露路の角にかくれて行つた。壯吉は、それを見送りながら、一寸の間、呆氣にとられたやうに、そこに立つてゐた。
おや〳〵、あの男は俺達を教へるつもりでゐたのだ——壯吉は、おどけた調子で斯う自分で自分に云つて見た。が、そのおどけた調子を受け入れないやうな何物かゞ、壯吉の心の中にあつた。壯吉は笑へない氣がした。
白井の家では、白井が蒼ざめたむづかしい顏をして火鉢の傍に坐つてゐた。茶を飲みながら夕刊を見てゐる關もてれた樣子をしてゐた。白井は壯吉の顏を見ると、その硬張つた筋肉を無理に崩すやうにして、一寸笑つて見せながら、
「やあ、いらつしやい。」と云つた。白井の細君もまだ怒りの消え切れない尖つた顏をして押默つてゐたが、
「林さん、まあ長瀬さんといふ人は呆れた人ですよ。」と訴へるやうな調子で力を籠めて云つた。
「一體どうしたんです。」と壯吉はきいた。

今夜も例のやうに、白井が長瀬に意見をはじめたのであつた。すると、長瀬は、今夜ははじめから妙に昂奮した調子で、今自分は心の上に大問題にぶつつかつてゐるので、つまらない仕事なんかして居られないなどと云つた。白井も腹が立つて自分で妻子を養ふ事も出來ないくせに、とか何とかやりこめると、長瀬は、あなたなどは本當に生きる道を知らない憫れむ可き人間だ、などと方圖もない事を云ひ出したので、白井もくわつとして、「もう君などは絶交だ！　歸つて了へ！」と怒鳴りつけながら、傍にあつた茶盆をとつて投げつけようとしたのだ。が、平常から心臓の悪い白井は、くわつとすると同時に心臓に故障が來て、あぶなく卒倒しかけたといふのであつた。

「いや、どうも私などは怒る事さへ出來ないんですから――。」と、白井は力無く苦笑した。

「散々世話をしてやつて馬鹿呼ばはりまでされて、本當に好い面の皮つたらない。」と、細君はくやし涙を浮べて、

「それにね。長瀬さんはあゝいふ人だとしても、あのお上さんがまた憎らしいんですよ。近頃ぢやすつかり長瀬さんに云ひくるめられたと見えて、あのやくざ者の亭主を神さまか何かのやうに傑い人だと思ひ込んで、自分で世話になりながら私などはもうてんきり馬鹿にして、禮一つ云はないんですよ。どうでもいゝんだが、世話になつてやるんだといふやうな顔

をして、本當ににくらしいたら無い！」

「いや、馬鹿にあつちやかなはない。」と白井は吐き出すやうに云つて、「もうなまじひ人の世話なんかやくもんぢやありませんね。いやはや、さん〳〵だ。はゝゝ。」と自ら嘲るやうな調子で云つて苦笑ひをした。

「實際、あゝいふ仙人にあつちや叶ひませんな。」と關も云つた。

「さうですよ。あゝいふのにあつちや叶ひません。普通の人情なんか通用しないのですからね。――ほんとに、人の事なんか構はないで、自分の事をするのですね。」と壯吉は云つた。而して、一寸言葉をきつたが、考へ深い顏附をして、

「――僕は思ふのですがね。長瀬なんか、あれで本當に傑い人間なのかも知れない――僕は、時々そんな風に思ふ事もあるんですがね。」と云つた。實際、壯吉は、長瀬が何か非常に非凡な、えらい男なのではないか、天才か何かではないかと思ふ事がこれまでによくあつた。あの捨犬のやうなみじめな男の中に、どんな高貴な魂が潜んでゐるか判らないぞ。あの老人のやうに禿げ上つた少しおでこの頭の中で、どんなに偉大な思想が出來上りつゝあるかも知れないぞ。本當にあれが大天才で、今に、世の中ぢうの人をひれ伏させるやうな豫言者となつて現はれるかも知れないぞ。昔から天才とか豫言者とか云はれる奴は、皆、平凡な周圍から

は馬鹿扱ひにされてもてあまされたものだ――。今夜は殊にそんな事が考へられて來るのであつた。

「Lさんもいつかそんな事を云つてゐましたがね。あれは大馬鹿か、でなければ天才なのかも知れないつてね。實際、餘程變つてゐますからね。本當にあゝいふのが非凡な人間なのかも知れませんね。」ひどく萎れかへつて、ぢつと考へ込むやうにしてゐた白井は、やがてこんな風に言ひ出した。素直な善良な、而して單純な白井の心が、てもなく長瀨を天才かなどにして受け入れて了ひさうなのを見ると、壯吉は、妙にむしやくしやとした氣持になつた。而して、搔き捨てる樣な調子で、

「いや、しかしあれは矢張そんなものぢやないんです。あれは唯の馬鹿ですよ。大馬鹿者なんですよ。こけの一心といふやつですよ。あゝして今に路傍でのたれ死にするんですよ。あれも矢張敗北者なんですよ。何でもありやしませんよ、はゝゝ。」と笑つた。それは、とつてつけたやうな笑ひであつた。

「さうでせうかね。」と白井は云つたが、何だか浮かない顏附になつて默り込んで了つた。その妙に重苦しい沈默が、壯吉の心にのしかゝつて來た。壯吉はぢつとしてゐられないやうな氣がして、

「どうです？　始めませうかな？」と云つた。

碁盤が持ち出された。二人はぱちり〳〵と打ち出した。闘は又、何か浮びかけたと見えて、鉛筆を嘗めながら、しきりに首をひねつてゐた。

壯吉は、いつもかうして盤に向ふ時、こんな事をしてゐちやならない。いろ〳〵おれはする事があるのだ。呑氣にヘボ碁など打つて居られる時ぢやない、と今更のやうに苛々とそれを感じるのであつたが、今夜は、餘計にむしやくしやするのだつた。而していつものやうに、その苛々しさを忘れて一石々々の興味にひき込まれて行く事が出來ないのであつた。而して、壯吉は長瀨は本當に非凡な男かも知れない、長瀨がもし本當に天才だつたら――と考へてみたり、あんな奴が天才なんかで堪るもんかと打消してみたりしながら、唯、めちやくちやに石を竝べて居た。

白井もまだ感情の昂奮が去らないと見えて、いつもの手堅さに似ない、だらしのない石を竝べてゐた。しかし、半ば過ぎに打ち進んで、際どい接戰がはじまつて來ると、流石に二人とも調子づいて來た。

「このヘボが！」

「このヘボが！」

間もなく例の口喧嘩が初まつた。壯吉は、何かを叩きつけるやうに、やけくそになつて、石を盤の上にうちつけた。

「また負けようと思つて。」

「どつちが負けようと思つて。」

「なにこのヘボが！」

「なにこのヘボが！」

次第に緊張して來た。二人にとつて、それが一番充實した時であつた。——二人はかうして夢中になつていつまでも〳〵ヘボ碁を打つてゐた。

小品十一

（九年四月）

椎の實

體操の時間になると、私は生徒を連れて村端(むらはし)れの山裾の鎭守の森に遊びに行つた。而して、生徒等は自由に遊ばせて置いて、私は一人、森蔭の萱(かや)の繁みに身を埋めてポケットから本を出して讀んだ。

耳元では萱がさや〳〵と鳴つた。何處かから小鳥の聲がした。而して、明るい晩秋の日ざしは、肩を掠めて頁の上にきらめき落ちた。私はその頁の中に心を吸ひ込まれるやうにして、我を忘れて讀み耽つてゐた。すると背後の方で突然(だしぬけ)に笑ひ聲が起つて私を驚かすのであつた。

「まあ、こんなところに先生が――、」

こんな事を云ひ乍ら萱の間から女生徒達が現はれて來た。女生徒は皆で五人しか居無かつたが、中でN子といふのとK子といふのは、黑い眼と白い頰とを持つた美しい少女であつた。彼女等は各自(てんで)に拾つて來た椎の實を私のポケットの中に入れて呉れた。

高原の一角の小さい小學校の宿直室で、私は木枯の音を聞き乍ら毎晩々々夜更まで本を讀んだ。晝間あの少女達から貰つた椎の實を火鉢の火で燒いて喰べながら――。私が一ばん愛讀したのは西行法師の「山家集」であつた。

私はその頃十八歳の田舍教師であつた。

白い月

夕ぐれであつた。崖の上から掩ひかぶさつた竹藪の間から白い月かげがちら〳〵と搖れてゐた。村の子守達の一隊が口々に大聲で歌ひ連れ乍ら、その藪蔭の路を歩いてゐた。

その子守達の一人の背に私も居たのだと思ふ。何時の夜にか見た夢の斷片(かけら)かも知れない、とも思ふが、しかし、それは慥かに實際の記憶なのだ。而して其處は、あとで思へば慥か伊之(いの)さん許(とこ)の前の路に違ひ無いのだ。而して其の時私をおぶつて居た子守は、おとらといふ少女に違ひ無い。彼女は非常におてんばで、村中の子守を手下にして、自分が音頭を取つて

は朝から晩まで歌ひ歩いたものだ――と姉は云ふ。而して、私がおとらに子守られたのは三つの時迄だといふから、その時私は二つか三つかであつた筈だ。

藪蔭にちらめく白い月――それが私の此の世に於ける最初の印象なのだ。

木蓮の花

「あゝ、もうあの花が咲く頃になつた！」

私は路を歩きながら、とある横町の奥深い家居の中から、高い梢に咲き亂れた白い木蓮の花を見つけた。

漸く春の深くなつた空は蒼々と晴れ渡つて、明るい光が一面に波うち搖れて居る中に、惜氣もなく投げ出されたやうな大輪の花が、燻銀の色に輝いてゐる。その一輪々々が、皆白日の強い光線の中に、うつら〳〵と夢をみて居るやうに見える。

何といふきらびやかな、而して放膽な花だ！　私は此の花を見ると妙に心が躍り立つ。が、しかし、此の花が咲く頃になると屹度頭痛がするのだ。――今朝も、私の頭は連りに痛むのである。

芽蜩

私の家の裏庭につゞく林と山裾とは、そのまゝに延びて、私の部落から、次の部落へと通ふ往還の片側に添うて續いてゐた。その林には、ねぶたの樹が多くまじつてゐた。ねぶたの樹が、ほんたうの名は合歡といふのであるといふ事は、私はその時分には知らなかつた。傾斜した山畑を隔てゝ眞直に續いた林の梢に、ほんのりと赤い縞を描いてその花の咲く時分になると、そこは茅蜩の領となる。町の絲市に出かけて行つた祖父の歸りを待つ可く、妹と共に、夕ぐれをその往還に彳む時、どんなに、淋しい心持で、私はその茅蜩の音を聽いたことであらう。

「未だ來ないの？」と、小さい妹は泣きさうな顏を振仰げる。

「來ない。もう少し待つてよう。」

日は暮れて了つた。右側に開けた野の面も、胡粉でぼかしたやうな夕闇に埋められて、彼

方の街道から、歸りおくれた馬力車の轍の音が、こと〳〵と響いて來る。林もすつかり暗くなつた。そして茅蜩の聲も、もうたえ〴〵になつた。

「歸らうか。」私は白く浮き上つたやうな往還を透かして見るやうにしながら云つた。妹もぢつとそつちを見乍ら、返事をしないでだまつてゐる。

「あのかなかなが鳴かなくなつたら歸ろ。」

さう云つて、二人はまた立ち盡す。——しばらくすると、その路の上に何か黑いものが見える。背に物を背負つて急いで來る風附が、ひよい〳〵と躍つてゐるやうに見える。いつまでも同じところで躍つて居るやうに見えるのをもどかしく待つてゐる二人を認めると、祖父は、「おう、おう、よく待つてゐたな。」と遠くから聲をかける。

「祖父さん！」と二人はうれしさに聲をあげる。而して、そしてその左右にとり縋るやうにして家に歸るのであつた。

納豆賣

私の家の前を毎朝二人の納豆賣が呼んで行く。

どちらもその邊の裏長屋から出て來るらしい、乳呑子を背負つたお上さんだが、一人は服裝も汚なく、呼聲もぶつきらぼうで、いかにも愛想氣が無く、唯むしやくしやに我鳴り立てるといふ風だが、一人はなか〳〵愛嬌者で、門毎に、「お早う御座います。」と聲を掛けて行く。而してその呼聲も滑かでしほがある。それに小綺麗にしてゐるので、どうしてもその方がよく賣れるやうだ。

よく賣れるにつれて、一方は益々如才無くなつて、「納豆！　納豆！」と呼ぶ聲も何となく甘えを含んで聞えるのであるが、それにつれて一方は益々がむしやらな調子になつて、唯、ヒステリカルに叫び續けるのであつた。すると又それに比例して、一方の態度なり呼聲なりは、更に〳〵媚びをもつた、甘えるやうな調子になつて行くのであつた。

——私は、その甘えるやうな一方の呼聲を聞くと、何故か無暗に腹立たしくなるのであつた。